富山市埋蔵文化財調査報告5

富山市金屋南遺跡
発掘調査報告書Ⅲ

―金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)―

2006

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告5

富山市金屋南遺跡
発掘調査報告書Ⅲ

―金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)―

2006

富山市教育委員会

例　言

1　本書は、富山市金屋地内に所在する金屋南遺跡の発掘調査報告書である。

2　現地調査は、金屋企業団地造成工事に伴う発掘調査であり、富山市商工労働部（当時、企業立地推進室）の依頼を受けて、富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会が実施した。
出土品整理及び本書の発刊は富山市商工労働部（工業政策課）の依頼を受けて、富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）が行った。

3　調査期間、調査面積、担当者は以下のとおりである。

現地調査　**平成９年度調査**　平成９年８月４日～平成10年３月31日　2,920㎡
藤田富士夫（当時、生涯学習課主幹）、小林高範、鹿島昌也（当時、生涯学習課学芸員）、安達志津（富山市埋蔵文化財調査委員会調査員）
平成10年度調査　平成10年４月１日～平成11年３月31日　5,960㎡
近藤顕子、小黒智久（当時、生涯学習課学芸員）
平成11年度調査　平成11年４月１日～平成12年３月31日　10,800㎡
小林高範、堀沢祐一、小黒智久、原川幸子（埋蔵文化財センター学芸員）、安達志津（埋蔵文化財センター嘱託）

出土品整理調査　平成14年６月１日～平成18年３月17日

4　調査にあたり、次の方々や関係者からご協力いただいた。記して謝意を表します。
赤澤徳明、穴澤義功、五十川伸矢、内山純蔵、宇野隆夫、久々忠義、久保智康、久保尚文、関清、寒川旭、中村潤子、西中川駿、布尾和史、布尾幸恵、林寺敏州、林真子、平口哲夫、藤井昭二、前川要、前田英雄、前田洋子、御嶽貞義、宮田進一、渡邊朋和、四柳嘉章、（五十音順、敬称略）

5　自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、元興寺文化財研究所に委託した。また考古地磁気分析については広岡公夫・南依里、地震痕跡の分析については寒川旭に依頼し、その成果を本書第Ⅳ章に掲載した。

6　遺構番号は、SB：掘立柱建物、SE：井戸、SD：溝跡、SK：土坑、P：ピット、SX：不明土坑とし、各年度ごとに記号の後に通し番号を付けた。

7　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

8　本書の執筆は、藤田富士夫、堀沢祐一、近藤顕子、小黒智久、野垣好史、安達志津が行った。

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1～4
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 5
Ⅲ　調査の概要
　1　平成９年度調査 …… 6～39
　2　平成10年度調査 …… 40～49
　3　平成11年度調査 …… 50～146
Ⅳ　自然科学的分析
　1　金屋南遺跡の帆状遺構の用途と当時の栽培植物や古環境について
　　パリノサーヴェイ株式会社 … 147～155
　2　金屋南遺跡の考古地磁気学的研究
　　広岡公夫・南　依里 …… 155～159
　3　金屋南遺跡で検出された液状化現象の痕跡
　　寒川　旭 …… 160～162
　4　金屋南遺跡出土不明鉄製品について
　　㈱元興寺文化財研究所 …… 163～165
　5　金屋南遺跡出土遺物の金属学的調査
　　パリノサーヴェイ株式会社 … 166～169
写真図版 …… 170～225
報告書抄録 …… 226

Ⅰ　遺跡の位置と環境

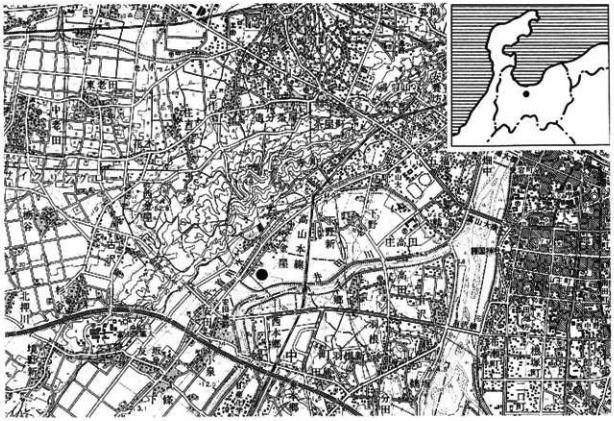
1．地理的環境

富山県は庄川、神通川、常願寺川などの大河川が南北に貫流し、下流に平野部が展開する。富山市域の広い範囲を占める富山平野は、主に神通川と常願寺川水系からなる。金屋南遺跡が所在する富山市金屋地内は、この富山平野の西端部に位置し、神通川と呉羽山丘陵に挟まれた場所にある。金屋地内周辺は、現在、主要地方道富山・庄川線沿いに宅地が広がり、周囲には水田が広がる閑静なたたずまいを残している。近年は企業団地や分譲住宅の建設がはじまり、次第に開発が及んできている。

本遺跡の北西にある呉羽山丘陵は、南西―北東方向に約７kmにわたってのびるなだらかな丘陵である。呉羽山丘陵を境に県内は大きく二分され、東側が「呉東」、西側が「呉西」と呼ばれている。両地域は文化・気候などの面での違いが認められ、金屋南遺跡はこのうちの呉東に位置している。丘陵の西斜面は全体的に傾斜が緩やかで、馬背状の尾根が長く続くのに対し、本遺跡に近い東斜面は急崖が多く、尾根は急傾斜で短い。

一方、本遺跡の南には呉羽山丘陵に併行して神通川の支流、井田川が流れる。井田川は蛇行しながら南北に流路をとった後、本遺跡付近で東に折れ、約2.5km東で神通川に合流する。神通川は過去に流路の変更を繰り返しており、付近一帯はこれら河川によって形成された扇状地や沖積平野が展開する。本遺跡は、井田川下流左岸の自然堤防上に立地しており、遺跡一帯にはシルト質土を主体とした河川堆積物が広がる。人為活動が及ぶ前は井田川が氾濫する湿地帯であったことがわかる。遺跡の標高は約９～11mである。

本遺跡は神通川と井田川の合流点近くにあり、水上交通の要衝を占める環境に位置していたと推測される。



第１図　金屋南遺跡位置図（１：50,000）●の地点

2．歴史的環境

金屋地内周辺は、丘陵地形と河川が形成する扇状地とからなる。県域でも遺跡密度の高い地域であり、旧石器時代から各時代の遺跡が連綿と営まれている。

旧石器時代　富山平野の旧石器時代遺跡の多くが呉羽山丘陵周辺で見つかっている。住居などの遺構は検出されておらず、石器が１点～数点出土するといったことから確認される場合が多い。

本遺跡近くの呉羽山丘陵東麓にある金屋嘉平出遺跡では局部磨製石斧が出土し、丘陵の西側にある古沢遺跡ではナイフ形石器・局部磨製石斧、古沢八遺跡ではナイフ形石器・掻器が出土している。また、丘陵の南西端付近では境野新遺跡からナイフ形石器・石刃・掻器、杉谷67遺跡から彫刻刃形石器などが出土している。丘陵の南から西側にかけての地域に多くの遺跡が立地する傾向がある。

縄文時代　前期に縄文海進がピークを迎える。呉羽山丘陵北部周辺には小竹貝塚、蜆ケ森貝塚があり、当時潟湖が大きく入り込んでいたことが推測できる。小竹貝塚からは貝殻、獣魚骨や土器、石器などのほか、豊富な骨角器が出土している。屈葬人骨があることから、墓域の存在も想定される。

中期は丘陵北部の台地上に営まれた国指定史跡の北代遺跡が代表的である。北代遺跡は200棟以上の竪穴住居の存在が推定される北陸屈指の縄文集落で、中期後葉に最盛期を迎える。周辺の台地には、他に中期前葉～中葉の北代加茂下Ⅲ遺跡などがあり、大小の差はあれ、多くの集落の点在がみられる。

なお、後期～晩期にかけて遺跡数は大きく減少する。中期と比較すると、丘陵の南部周辺に比較的分布するようである。

弥生時代　当該期の集落は少ない。呉羽山丘陵の最高所（標高145.3m）に中世の白鳥城跡があり、ここで弥生時代の高地性集落が確認されている。集落に伴う環濠や竪穴状遺構の一部が確認されたほか、終末期の土器が出土している。他に金屋笹山西遺跡、西金屋京平遺跡も高地性集落の可能性がある。また、古沢A遺跡で中期の土器、西金屋京平遺跡で後期の土器が出土するなど散発的に遺物の出土がみられる。

終末期には杉谷古墳群中に四隅突出型墳丘墓の杉谷４号墳をはじめとした墳墓が築かれる。隣接して築かれた杉谷A遺跡の方形周溝墓からは素環頭大刀、銅鏃、ガラス小玉などが出土している。

古墳時代　当該期は呉羽山丘陵周辺に円墳、方墳を主体として、前方後円(方)墳を含めた各種の古墳が築かれる。方墳系がやや多い。円墳系が丘陵西側に張り出した主脈に形成されるのに対し、方墳系は富山平野や婦中平野を望む丘陵縁辺に多い。また、最近の調査で、呉羽山丘陵の北東、神通川左岸の河岸段丘上にある百塚住吉遺跡において、削平されてはいたが、前方後円墳、前方後方墳各１基が確認され、呉羽山丘陵北東地域に新たに有力勢力の存在が浮かび上がってきている。

中期の代表的な古墳には、前方後円墳で墳長約41mの古沢塚山古墳がある。後期には本遺跡と同じ金屋地区に金屋陣ノ穴横穴墓が築かれ、丘陵北部には番神山横穴墓があるほか、これと同一の墓域に呉羽山古墳が築かれている。

集落遺跡には古沢A遺跡、境野新遺跡などがあり、中期の竪穴住居が数棟確認されている。丘陵上に多数築かれた古墳に対応する集落の検出はこれまでのところ希薄で、様相はなお不明な点が多い。

古　代　富山平野では古代に入ると遺跡数は大きく増加し、呉羽山丘陵周辺でも同様である。集落遺跡は丘陵北東部周辺に多く、窯跡・生産遺跡は南西部周辺にまとまる傾向がある。

北代遺跡や呉羽富田町遺跡などの集落遺跡では、竪穴住居、掘立柱建物、鍛冶工房などが見つかっており、遺跡北部の沖積平野を背景に形成された開墾集落と考えられる。

また、丘陵南西部周辺の生産遺跡には、センガリ山窯跡、金草第一古窯跡、法尻窯跡の須恵器窯、栃谷南遺跡の瓦陶兼業窯などがある。炭焼窯などの生産遺構も多数確認されており、付近一帯が一大

第２図　金屋南遺跡周辺の遺跡分布（１：30,000）

窯業・生産地帯であったことがわかる。

中　世　中世の遺跡は丘陵の北側に比較的多い。また、本遺跡南側の神通川と井田川に挟まれた扇状地上にも多くの集落がある。中名Ⅴ・中名Ⅵ遺跡では多数の掘立柱建物を配した集落が確認されており、水量調節のためと推定される治水関連遺構が検出されている。ほかにも清水島Ⅱ遺跡、中名Ⅱ遺跡、持田Ⅰ遺跡などがあり、各遺跡が連携をもちながら営まれたと推定される。また、丘陵の南西部には杉谷群集塚がある。

本遺跡の周辺では城館跡も複数確認されている。南西に位置する安田城跡は3つの郭を持ち、堀と土塁の全体像が把握できる平城である。呉羽山丘陵頂上にある白鳥城跡は、本丸を空堀で囲む山城で、土塁や敷石遺構が検出されている。約1.5km東には白鳥城の出城である大峪城跡がある。本遺跡と周辺の遺跡との鉄製品の需給関係などについては今後の検討課題となろう。　(野垣)

第1表　金屋南遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代								備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
1	金屋南遺跡	集落・墓・生産					○	○	○	○	
2	願海寺城跡	城館			○	○			○	○	
3	高木中坪遺跡	散布地			○		○	○	○		弥生後期主体
4	小竹貝塚	貝塚		○		○	○	○	○		
5	蜆ヶ森貝塚	貝塚		○							
6	極楽寺廃寺	寺院					○	○	○		
7	北代加茂下Ⅲ遺跡	集落		○			○	○			特異な形態の縄文時代の掘立柱建物を検出
8	北代遺跡	集落	○	○	○		○	○			国指定史跡
9	呉羽富田町遺跡	集落		○			○	○			
10	北代中尾遺跡	集落	○	○		○	○	○	○	○	奈良・平安主体
11	呉羽小竹堤遺跡	集落	○	○			○	○	○	○	
12	呉羽三ツ塚遺跡	散布地					○	○	○		
13	呉羽三ツ塚古墳	古墳		○		○					方墳15.5×16.5×高2.3m前後
14	小竹源平山窯跡	窯跡						○			
15	高木南遺跡	散布地			○		○	○	○		中世主体
16	東老田Ⅱ遺跡	集落			○	○	○	○	○	○	
17	東老田Ⅰ遺跡	集落・生産		○			○	○	○	○	平安～中世主体
18	古作北Ⅲ遺跡	集落					○	○			
19	古作城	城館							○		伝承地、近世絵図では西金屋地内
20	追分茶屋遺跡	集落		○							
21	呉羽モグラ池遺跡	集落・墓・祭祀・生産		○	○	○	○	○	○		
22	北代西山遺跡	集落・生産		○			○	○			
23	茶屋町遺跡	集落・生産	○	○			○	○	○		平安時代に鉄生産を行う
24	茶屋蒲山古墳群	古墳				○					
25	茶屋表山古墳群	古墳				○					
26	古作3号窯跡	窯跡					○	○			
27	古作Ⅳ遺跡	窯跡		○			○	○			
28	住吉南Ⅰ遺跡	窯跡					○	○			
29	花ノ木C遺跡	集落		○			○	○	○	○	9世紀前半の官衙関連祭祀場か
30	砂川カタダ遺跡	散布地		○			○	○			
31	金草第一古窯跡	窯跡					○				県指定史跡
32	呉羽山古道	道路					○	○	○		
33	白鳥城跡	集落・城館			○	○		○	○		
34	金屋向山遺跡	集落						○	○		
35	大峪城跡	城館							○	○	
36	金屋寨平田遺跡	散布地	○				○	○	○		
37	西金屋京平遺跡	散布地			○						高地性集落か
38	金屋笹山西遺跡	古墳・集落			○	○					高地性集落か
39	法尻窯跡	窯跡					○				
40	金屋陣ノ穴横穴墓	横穴墓				○					
41	呉羽山丘陵古墳群	古墳群				○					
42	西金屋窯跡	集落・窯跡		○			○	○			奈良・平安主体
43	古沢下堤池東遺跡	集落・生産		○	○	○	○	○			
44	古沢窯跡	集落・窯跡・生産		○			○				
45	センガリ山窯跡	窯跡					○				
46	古沢A遺跡	集落・窯跡	○	○	○	○	○	○			
47	古沢B遺跡	窯		○							
48	古沢遺跡	集落・生産	○	○			○	○			
49	杉谷67遺跡	散布地	○	○			○	○			
50	境野新遺跡	集落	○	○		○	○	○			現在は史跡公園
51	杉谷遺跡	集落		○							
52	杉谷群集塚	塚							○		
53	杉谷A遺跡	集落・墓			○	○	○	○			
54	杉谷古墳群	古墳群		○	○	○					
55	友坂遺跡	集落・城館・散布地		○				○	○	○	
56	安田城跡	城館・散布地					○	○	○	○	国指定史跡

※No.は第2図の遺跡番号に対応する

Ⅱ．調査に至る経緯

1．調査に至るまで

平成５年12月に富山市教育委員会が実施した富山市金屋地区の分布調査で、「金屋南遺跡」(№201590)、「金屋殊八遺跡」(№201591) の所在が確認された。その際には、土師器・珠洲・青磁が採集されている。両遺跡とも『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。包蔵地の範囲は２遺跡合わせて約71,000㎡（金屋南遺跡約15,000㎡、金屋殊八遺跡約56,000㎡）であった。

平成６年に富山市商工労働部は富山西インターチェンジ周辺開発事業として、金屋地内で企業団地（現・金屋企業団地）を造成する計画を明らかにした。計画地にこの２遺跡が含まれていたため、市教育委員会と市商工労働部で協議を行い、試掘確認調査を実施することとした。

試掘確認調査は、平成８年４～５月に約69,000㎡を対象として実施した。試掘確認調査の結果、平安時代と中世の穴・溝が検出され、平安時代の土師器・須恵器・土錘、中世の珠洲・青磁・白磁・八尾・鉄釘・るつぼ・鉄滓・鍛冶炉壁・砥石、近世の越中瀬戸・伊万里などが出土した。この調査によって２遺跡が約62,500㎡の範囲にまとまっており、金屋南遺跡と金屋殊八遺跡はともに同一遺跡と判断されたため、「金屋南遺跡」として遺跡名を統合した。

この調査結果をもとに工事計画との調整を行ったところ、幹線・区画道路、造成敷地部分約57,200㎡について事前の発掘調査を行い、公園・緑地帯部分約5,300㎡は盛土保存することで協議が整った。

2．調査の経過

発掘調査面積は約57,200㎡に及ぶため、平成８年度から平成13年度まで６年計画で実施された。平成８・９年度と平成13年度は民間の発掘会社に委託して実施し、それ以外については市教育委員会が実施した。各年度の概要と発掘部分、調査機関は第２表のとおりである。

なお、出土品整理は、平成14～18年度まで実施予定で、平成９～11年度の発掘調査成果は本書よる。平成12～13年度の発掘調査成果は平成18年度末に報告する予定である。（堀沢）

年　度	面積(㎡)	発掘調査区分	主な遺構	主な遺物	調査機関・〔報告書〕
平成８年度	2,200	幹線	土坑、溝、畠	土師器、須恵器、土錘、珠洲、中世土師器、青磁、銭貨	〔富山市教委1999〕
平成９年度	15,220	幹線	掘立柱建物、井戸、土坑、溝、畠、道路	土師器、須恵器、土錘、珠洲、中世土師器、八尾、青磁、銭貨、石製品	〔富山市教委1999〕
	2,920	敷地造成	掘立柱建物、土坑、溝、河川	珠洲、中世土師器、八尾、青磁、白磁、土師、越中瀬戸、銭貨、鉄製品（小刀・鉄釘・鉄鏃・鉄鍬）、石製品（石錘、紙石）	市教育委員会〔本書による〕
平成10年度	5,960	造成敷地	掘立柱建物、土坑、溝	珠洲、中世土師器、青磁、白磁、銭貨、越中瀬戸焼、鉄製品	市教育委員会〔本書による〕
平成11年度	10,800	造成敷地	掘立柱建物、井戸、土坑、溝、畠、溶解炉、廃滓場、鋳造土坑、礎石建物、河川	須恵器、土師器、土錘、土馬、珠洲、中世土師器、八尾、古瀬戸、瀬戸美濃、瓦器、青磁、銭貨、鉄製品、石製品、木製品、鋳造関連遺物、越中瀬戸、伊万里、唐津	市教育委員会〔本書による〕
平成12年度	10,500	造成敷地	竪穴状遺構、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、畠	須恵器、土師器、土錘、珠洲、中世土師器、八尾、青磁、銭貨、唐津	市教育委員会
平成13年度	9,600	造成敷地	竪穴状遺構、掘立柱建物、土坑、溝、畠、土器祭祀跡	須恵器、土師器、土錘、珠洲、中世土師器、青磁	大成エンジニアリング株式会社〔富山市教委2003〕

第２表　各年度の概要及び調査機関〔富山市教委1999〕は『富山県富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〔富山市教委2003〕は『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

Ⅲ．調査の概要

１．平成９年度調査

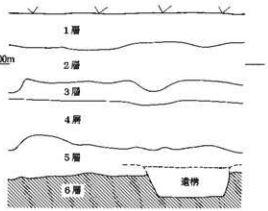
(1) 調査の経過

発掘調査は約2,920㎡を対象として行い、平成９年８月４日から平成10年３月31日（ただし平成９年12月26日から平成10年２月25日までは冬期間休止した）まで実施した。調査は、藤田富士夫（富山市教育委員会生涯学習課主幹）、小林高範（同　学芸員）、鹿島昌也（同　学芸員）、安達忠津（富山市埋蔵文化財調査委員会調査員）が担当した。

８月からベンチマークや調査区の設定、プレハブ設置、排土置き場の確保などの事前準備を進め、９月24日から28日までバックホウとキャリアダンプを用いて表土排土を行った。引き続いて調査区南西半からベルトコンベアーを設置し、スコップ、ジョレンなどによる包含層発掘を開始した。11月４日には調査区南西半で、溝SD01や土坑SK01～18がかたまって所在するのを確認した。この後、北東半への包含層排土に伴い、順次多くの土坑や掘立柱建物などの所在を確認した。遺跡の地形は北西から南東に向って傾斜しており、低位となる南東端では湧水に加えて、雨水や雪融け水による滞水があり遺構への冠水が見られ調査に苦慮した時期もあった。（藤田）

(2) 基本層序（第３図）

調査区の標高は、北東壁中央（地山面で、以下同じ）で9.4m、北西壁中央で9.4m、南東壁中央で9.0m、南西壁中央で9.3mを測る。最高点は9.5mで調査区西隅にある。従って地山は西隅から東に向けて緩く傾斜している。



第３図　調査区北端部基本層序（１：20）

調査区のほぼ中央で、現地表面下80～90cmで地山に達する。基本層序は、第１層 褐色耕作土（厚さ10～15cm）、第２層 暗灰色土（厚さ10～20cm）、第３層 赤灰色土（厚さ約10cm）、第４層 暗灰茶褐色土（厚さ25～30cm）、第５層 灰茶褐色土（10～20cm）、第６層 茶褐色地山土（シルト質に富む）となる。第４層は低位にある南東壁方向に向って厚みを増す傾向にある。特に、第５層の下位は中世土器の包含層を成していて、遺構の多くは本層内で営まれたことを示していた。（※土層表記は『新版標準土色帖1990年版』財団法人日本色彩研究所色票監修、1990年、に準拠した）（藤田）

(3) 検出遺構の概要

本調査区では、掘立柱建物跡（SB）23棟、柵列（SA）10本、土坑（SK）217基（掘立柱建物付帯土坑も含む）、不明遺構（SX）３基、溝（SD）４本、ピット（P）多数、噴砂痕跡数箇所を検出した。掘立柱建物跡は、調査区の緩い南東斜面に北東－南西方向に列を成して営まれ、ほとんどが同一箇所で何度かの立て替えの痕跡を有していた。土坑は、掘立柱建物跡に重複するものと、最高位を占める西隅辺りに集中するものとが見られた。前者は掘立柱建物の付帯施設である可能性が高い（このことについて、現地調査の段階では認識できなかったが、整理段階で掘立柱建物の様子が具体的に見えてきたことから、このような判断に至った）。また、後者は土壙墓である可能性が高い。溝は、連続し本遺跡を区画するかのように設けられており、いわゆる区画溝として理解できる。（藤田）

ア．掘立柱建物（第６～12図　第３表　写真図版４・５・７）

掘立柱建物23棟が、主にSD01に沿って検出された。また、これらと軸方向を揃える長方形土坑が掘立柱建物内部や、外側に構築されている。金屋南遺跡平成８・９年度のB・C調査区（富山市教委・山武考古学研究所1999）や富山県南砺市（旧福光町）梅原胡麻堂遺跡（財富山県文化振興財団1994）などで、掘立柱建物にともなう土坑の類例がある。

SB01（第６図）　変則的な２間×２間の母屋に南東側に１間×２間の張り出し、北西側に１間×１間の張り出しが付く。柱間寸法は桁方向北東筋南東から1.55、1.70、1.90、2.20、2.15m、梁方向北西から３列目北から1.2、2.1mである。SK36・SK38等がこの掘立柱建物にともなうと考えられる。

SB02（第12図）　４間×３間の総柱建物である。柱間寸法は桁方向南東から２列目北東から2.20、2.30、2.15、2.20m、梁方向北東筋南東から2.25、2.55、1.85mである。柱穴規模は直径0.2～0.5m、深さ0.1～0.45mである。SK26・SK28・SK40がともなうと考えられる。

SB10（第12図）　４間×４間の総柱建物である。SB02との新旧関係は不明である。SA02より古い。柱間寸法は桁方向北東筋南東から2.45、2.40、2.40、2.00m、梁方向南東筋北東から2.20、2.30、2.05、2.10mである。柱穴規模は直径0.2～0.55m、深さ0.25～0.55mである。SK30、SK27が本建物にともなうと考えられる。SK30からは13世紀代の土師器が出土している。

SB03・SB05（第10図）　４間×４間の総柱建物で、SB05はSB03の建替えである。SB03・05はSB14より古い。SB05の柱間寸法は桁方向南西筋南東から2.25、2.30、2.55、1.90m、梁方向北西筋北東から1.90、2.20、2.25、1.60mである。柱穴規模は直径0.3～0.55m、深さ0.15～0.5mである。SB03にSK113が、SB03・05のいずれかにSK103・SK112・SK117・SK118などがともなう。SK103・SK112から13世紀代の土師器が出土している。SA01は方向からSB03にともなうと考えられる。

SB04（第11図）　２間×２間の総柱建物の北側に１間の張り出しが付く可能性がある。柱間寸法は桁方向東筋北から2.60、2.70、2.60m、梁方向南筋東から2.55、2.45mである。柱穴規模は直径0.2～0.3m、深さ0.15～0.35mである。西側にSA07がともなう。

SB06（第11図）　６間（推定）×４間の総柱建物で、SD02をまたいで構築されている。SD02上の柱穴を検出しえていないが、出土遺物の年代からSD02が古く、SB06・SB21はSD02が埋まりきってからその上に建てられたと考えられる。柱間寸法は桁方向南東筋北東から2.10、2.50、4.40（２間分）、2.20、2.40m、梁方向は北東筋南東から2.25、2.90、2.30、2.00mである。柱穴規模は直径0.2～0.4、深さ0.2～0.3mである。SK45がSB06にともなうと考えられる。SK45からは13世紀後半の土師器、珠洲が出土している。

SB21（第11図）　SB06と重なって占地する４間（推定）×３間の総柱建物で、前述のようにSD02より新しい。SB06とSB21の新旧関係は不明である。１回の建替えを行っている。柱間寸法は桁方向南東筋北東から1.85、2.15、4.70（２間分）m、梁方向北東筋南東から2.35、2.70、1.90mである。柱穴規模は直径0.2～0.4m、深さ0.15～0.4mである。SK75がこれにともなうと思われる。SK75からは13世紀前半の土師器が出土している。

SB07（第８図）　３間×２間の総柱建物である。柱穴規模は直径0.3～0.5m、深さ0.2～0.4mである。柱間寸法は桁方向東筋北から2.90、3.10、2.70m、梁方向北筋東から2.55、2.50mである。長方形土坑はともなわない。

SB08（第９図）　５間×４間の総柱建物である。P96からは12世紀後半から13世紀前半のロクロ成形土師器が、P366から13世紀代の土師器が出土している。柱間寸法は桁方向南西筋南東から2.05、2.30、2.45、1.75、2.00m、梁方向北西筋北東から2.20、1.95、2.15、1.90mである。柱穴規模は直径0.2～0.3m、

深さ0.15～0.3mである。SK152・SK127がこれにともなう可能性がある。SK152からは12世紀後半から13世紀前半の土師器が出土している。占地をほぼ同じくするSB16と棟方向が同じである。

SB09（第6図） 北西側の柱列の柱穴規模が小さいことから、4間×3間の総柱建物の母屋に1間の廂がつくと考えられる。南隅のピットは非常に浅く、柱穴ではなく、礎石立ちであった可能性がある。SB02、SB13、SB19でも南隅の柱穴がなく、入口（玄関）部分などの可能性も考えられる。柱間寸法は桁方向北東筋南東から2.50、2.80、2.70、1.70mと廂部分の柱間が短い。梁方向は北西筋北東から2.20、2.25、2.40、2.05mである。柱穴規模は直径0.15～0.35m、深さ0.15～0.35mである。SK199・SK202がともなうと考えられる。SK199からは13世紀後半の土器が、SK202からは13世紀中葉から後半の青磁が出土している。

SB11・SB22（第7図） SB11は3間×1間の北西－南東棟、SB22は2間×1間の北東－南西棟である。SB11桁方向の柱間寸法は北東筋南東から1.90、2.30、2.15mである。SB22桁方向南東筋北東から2.30、2.10mである。両建物の柱穴規模は直径0.2～0.35m、深さ0.2～0.4mである。

SB12（第7図） 4間×3間の側柱建物であるが、南西側の桁行きは廂状に2列の柱列が並ぶ。また、北東側は1間×1間と1間×2間の張り出しが付く可能性があるが、北側の別の掘立柱建物にともなう可能性もある。柱間寸法は桁方向南東筋北東から2.90、3.00、2.60m、梁方向北東筋南東から1.90、2.25、2.20、1.90mである。柱穴規模は直径0.35～0.5m、深さ0.15～0.4mと他の掘立柱建物に比べて、やや大きい。P431から12世紀後半から13世紀前半の土師器が出土している。

SB13（第9図） 6間×5間の総柱建物であるが、南隅や北隅付近の内部に柱穴が検出されていないところがある。南西側は1間×4間の廂または張り出しの可能性もある。北隅の梁間に1間×2間以上の張り出しが付く可能性があるが、隣接するSB19・SB12と棟方向が同じため、どちらに属する柱穴か判断できないところがある。本調査区の中で最大の建物である。P369・P374から12世紀後半から13世紀前半の土師器が出土している。柱間寸法は梁方向南西から5列目の南東から2.40、2.10、2.25、2.40、2.15m、桁方向南東筋北東から2.25、2.50、2.75、2.65、2.30、2.60mである。柱穴規模は0.2～0.7m、深さ0.5mである。SK163・SK160がこれにともなう可能性がある。SK163からは12世紀後半から13世紀前半の珠洲が出土している。

SB14（第10図） 5間×4間の総柱を基本とする建物であるが、東隅の2柱穴や、内部の柱穴で検出されていないものがある。SB13に次ぐ大型建物である。柱間寸法は桁方向北西筋北東から2.30、3.35、3.00、3.00、2.55m、梁方向南西筋南東から2.50、2.35、2.60、2.40mである。柱穴規模は直径0.2～0.5m、深さ0.15～0.5mである。SK101がこれにともなう可能性がある。

SB15・SB18（第8図） 他の建物と離れて墓壙群に隣接する。両棟とも2間×1間の小型の建物である。柱間寸法はSB15桁方向南東筋北東から2.25、2.00m、SB18桁方向南東筋北東から3.05、2.80mである。柱穴規模はSB15が直径0.3～0.65m、深さ0.15～0.5m、SB18のほうが直径0.5～0.55m、深さ0.3～0.7mと後者が大型である。

SB16・SB17（第8・9図） SB16は4間×3間の北西－南東棟の総柱建物であるが、内部に柱穴が検出されていないところがある。SB17は3間×4間の北東－南西棟の総柱建物である。柱間寸法はSB16桁方向南西筋南東から2.65、2.30、2.20、2.40m、SB17桁方向南東筋北東から2.15、2.20、2.30、2.70、2.30mである。柱穴規模は直径0.2～0.5m、深さ0.15～0.45mである。SK150がともなうと思われる。T字形の棚列SA03が軸方向から本建物にともなう可能性がある。

SB19（第7図） 5間×2間の建物に4間×1間の張り出しが付く。柱穴規模は0.2～0.4m、深さ0.15～0.4mである。P446から13世紀代の土師器が出土している。SK184・SK166がともなうと考えられる。（安達）

第3表　掘立柱建物・棚状遺構一覧

遺構番号	間数	桁行長(m)	梁行長(m)	面積(㎡)	棟方向	方位	柱形式	出土遺物の年代	備考
SB01	2×2	(4.25)	(3.25)	(13.813)	NW-SE	N－59°－W	総柱		南東側に1×2、北東側に1×1の張り出し
SB02	4×3	8.85	6.70	59.295	NE-SW	N－34°－E	総柱		面積に柱穴なし
SB03	4×4	9.00	8.25	74.25	NW-SE	N－61°－W	総柱		SB05より古い
SB04	3？×2	7.90	5.10	40.29	NE-SW	N－19°－E	総柱		2×2の北側に1間の張り出し？
SB05	4×4	8.90	8.20	72.98	NW-SE	N－64°－E	総柱		SB03より新しい
SB06	6？×4	13.50	9.45	127.575	NE-SW	N－31°－E	総柱		
SB07	3×2	8.70	5.05	43.935	NE-SW	N－26°－E	総柱		
SB08	5×4	10.30	8.20	86.1	NW-SE	N－55°－W	総柱	12C後半～13C	
SB09	4×4	9.70	8.90	77.33	NW-SE	N－61°－W	廂付総柱		北西側1間は廂
SB10	4×4	9.25	8.70	80.475	NW-SE	N－60°－W	総柱		
SB11	3×1	7.35	2.30	16.905	NW-SE	N－57°－W	—		
SB12	4×3	8.60	8.20	70.52	—	N－61°－W	廂付？側柱	12C後半～13C前半	東側にも張り出し？
SB13	6×5	(15.00)	(11.00)	(165.00)	NE-SW	N－31°－E	総柱	12C後半～13C前半	北東側に張り出し
SB14	5×4	14.20	9.80	139.16	NE-SW	N－27°－E	総柱		
SB15	2×1	4.25	1.90	8.075	NE-SW	N－30°－E	—		
SB16	4×3	9.60	8.35	80.16	NW-SE	N－55°－W	総柱		
SB17	4×3	9.15	8.00	73.2	NE-SW	N－32°－E	総柱		
SB18	2×1	5.85	2.60	15.21	NE-SW	N－33°－E	—		
SB19	5×2	9.90	8.00	79.2	NW-SE	N－60°－W	—	13C	北側に1×2、1×1の張り出し
SB20	3×2？	5.20	3.30	17.16	NW-SE	N－55～60°－W	側柱		
SB21	4？×3	8.70	6.90	60.03	NE-SW	N－29°－E	総柱？		
SB22	2×1	4.40	2.40	10.56	NW-SE	N－36°－W	—		
SB23	2×1	4.00	3.00	12.00	NW-SE	N－64°－W	—		
SA01	3	7.00				N－30°－E			SB03にともなう
SA02	5×5？	11.30	10.40			N－58°－W			建物か？
SA03	4	8.80				N－55°－W			T字形、SB16にともなう
SA04	4	7.00				N－28°－E			
SA05	4？×3	9.40	8.40			N－65°－W			L字形、北隅に2×1の建物？
SA06	3	7.90				N－37°－E			
SA07	2	6.90				N－24°－E			
SA08	3	9.50				N－31°－E			
SA09	2	4.30				N－55°－W		13C	SK207にともなう
SA10	1	9.00				N－34°－E			

イ．土坑（第13～16図　写真図版9～11）

全部で217基検出した（土坑番号はSK219まであるが、SK140・142は欠番となる）。それらは大局的には主軸を北東－南西にとるものと北西－南東にとるものとに分かれる。また共伴遺物によって、①12世紀後半、②12世紀後半～13世紀前半、③13世紀後半、④13世紀後半～14世紀前半、⑤14世紀前半の計5区分できる。これを時間推移の一応の基準資料とみて、主要遺構を記しておきたい。

①12世紀後半の土坑（SK73）

SK73　一辺が2.20m×2.20m、深さ0.20mのA1？類方形土坑である（類型分類は、第6表の下端に表示）。主軸は北東－南西をとる。南壁はSK76に切られていて欠失している。床面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。上層は、一様にシルト質に富み、灰茶褐色土、茶褐色土、黄色褐色土などの20～30cm大のブロック堆積をなす。遺物には、中世土師器、珠洲、鉄製品、炉壁、鋳造滓がある。

②12世紀後半～13世紀前半の土坑（SK152・157・163・185・187・201・204）

SK152（第14図）　長軸1.71m、短軸1.44m、深さ0.49mのA2類方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、シャープな箱形を成す。覆土は、東西方向は水平堆積を成すが、北壁寄りではレンズ状堆積を成す。覆土上層には拳大の円礫が含まれていた。東壁寄りに30cm大の長円礫が出土した。遺物には中

世土師器破片多数、八尾、鉄製品、鋳造滓がある。

SK157（第14図） 長軸0.94m、短軸0.68m、深さ0.26mのC2類楕円形土坑である。壁は緩い傾斜を成して立ち上がり底部は皿状を呈する。覆土は、ブロック状の堆積を成す。全体に細粒炭化物が混じる。覆土上層から中世土師器、珠洲、土錘が出土した。

SK163（第14図） 長軸2.06m、短軸0.92m、深さ0.52mのB1類長方形土坑である。壁は緩く立ち上がる。覆土は、ほぼ水平堆積を成し、上半部は薄層を呈する。南東隅に小ピットの重複が見られる。遺物には須恵器？、中世土師器、珠洲、土錘がある。

SK185（第14・16図） 長軸4.08m、短軸2.78m、深さ0.92mのC1類楕円形を示す大型土坑である。壁はやや斜めに立ちあがる。覆土は、ほぼ水平堆積を成し、全体に細粒炭化物を含む。遺物は、上・下層いずれからも出土しており、中世土師器、珠洲、白磁？、雁又鏃、鉄製品（刀？）がある。

SK187（第15・16図） 長軸2.72m、短軸2.30m、深さ0.69mのA1類方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、シャープな箱形を成す。覆土は、中間層７層（灰茶褐色砂質土・炭化物含み）を挟んで上・下層の計３層に大別できる。上層は、横位の薄層堆積で多くに細粒炭化物を含む。下層は、横位で上層よりも薄層堆積を成し粘質性に富んだ土質を示す。炭化物をわずかに含む薄い層（14層）はあるが、他の層では認められなかった。遺物には、中世土師器、珠洲、白磁、土錘、石錘がある。なお石錘は長さが19.2cm、重さ1,590ｇの大型石錘である。SK188がSK187を切って構築されている。

SK201 長軸2.12m、短軸1.24m以上、深さ0.57mのA1類方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土は、上半部はブロック状の乱積層を成す。二段の重複遺構の可能性がある。遺物には、珠洲がある。

SK204（第15・16図） 長軸1.76m、短軸1.64m、深さ0.45mのC2類楕円形土坑である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土は、ブロック状の乱薄層堆積を成す。遺物には、中世土師器、珠洲、青磁、磁器、銭貨、鉄釘、鉄製品がある。

SK75（第16図） 長軸2.60m、短軸1.62m、深さ0.51mのB1類長方形土坑である。壁はやや斜めに立ちあがる。覆土は、乱積層を成す。遺物には、中世土師器、珠洲、銭貨、小刀、骨片、鉄釘、鉄製品、鋳造滓、炉壁？がある。SK44（A類方形）がSK75を切って構築されている。SK44から中世土師器、銭貨、骨片、鉄製品、鋳造滓が出土している。SK75とSK44の遺物の混在があるかもしれない。SK75は13世紀前半に特定できる。

③13世紀後半の土坑（SK45・199・202）

SK45（第13・16図） 長軸1.82m、短軸1.00m、深さ0.52mのB1類長方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土は上・下層はブロック状堆積で、中層は水平堆積を成す。全層シルト質に富み、部分的に礫石が混在する。遺物には、中世土師器、珠洲、八尾、小刀、鉄釘、鉄製品がある。

SK199（第15図） 長軸1.87m、短軸1.50m、深さ0.53mのB1類長方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土の上半部はブロック状の乱積層を成し、床直直上には細粒炭化物含みの暗茶褐色粘性土が水平堆積する。遺物には、中世土師器、珠洲、八尾、越前、鉄釘、鉄製品、鋳型がある。

SK202 長軸1.57m、短軸1.22m以上、深さ0.43mのA2類方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土は、細ブロックの乱堆積を成すが、床直上には厚さ約10cmで、暗黄褐色土の水平堆積がみられた。遺物には、13世紀中葉～後半の中世土師器、八尾、磁器、鉄製品がある。

④13世紀後半～14世紀前半（SK29・57・151・180・217）

SK29 長軸1.55m、短軸1.12m、深さ0.66mのB2類長方形土坑である。壁は傾斜をもって立ちあがる。覆土は、レンズ状堆積を成す。SK28の北壁覆土が切り込んでいる。遺物には、中世土師器、八尾、珠洲、鉄製品がある。SK28と切り合い関係にある。土層断面からSK28が後出である。

SK57（第13図）長軸1.76m、短軸1.00m、深さ0.56mのC2類楕円形土坑である。長軸の壁は緩やかな傾斜をもって立ちあがる。短軸の壁は口部の開いたU字形を成す。覆土は、水平堆積を成す。壁際の床面から礫が比較的まとまって出土した。遺物には、珠洲がある。

SK151　長軸推定1.10m、短軸0.80m、深さ0.38mのC2類楕円形土坑である。壁は傾斜をもって立ちあがる。覆土は、粗い水平堆積を成す。壁際の床面から礫石が比較的まとまって出土した。遺物には、珠洲がある。SK128・SK150と切合い関係にある。

SK180　長軸1.70m、短軸1.29m、深さ0.40mのC2類楕円形土坑である。壁は傾斜をもって立ちあがる。覆土は、粗い水平堆積を成す。壁際の床面から礫石が比較的まとまって出土した。遺物には、白磁がある。SD01・SK181と切合い関係にある。

SK217　長軸3.32m、短軸2.10m、深さ0.12mのB1類長方形土坑である。壁は傾斜をもって立ちあがる。覆土は、細ブロックの乱堆積を成す。遺物には、八尾がある。

⑤14世紀前半（SK165）

SK165　長軸2.00m、短軸1.42m、深さ0.89mのB1類長方形土坑で西壁がやや広がる。壁は傾斜をもって立ち上がる。遺物には、中世土師器、珠洲がある。

[その他の土坑の概要]　①～⑤には含めなかったが、それ以外で遺物を伴出する多くは13世紀代に帰属する。それには、SK25・30・41・42・44・46・103・112・121（第13・16図）・128（第14図）・161・167（第14図）・169・170・208がある。傾向として13世紀前半に含まれる可能性の高いものが多いと観察された。次に主要遺構を記述する。

SK42（第13図）長軸1.26m、短軸0.88m、深さ0.27mのA2類方形土坑であるが、やや長軸が長く隅丸気味に構築されている。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土は、上半部は乱層を呈するが下半部はほぼ水平堆積を成す。北壁寄りではレンズ状堆積を成す。覆土上層には拳大の円礫が含まれる。東壁寄りに30cm大の長円礫が出土した。遺物には、中世土師器がある。

SK167　長軸1.65m、短軸0.84m、深さ0.56mのB2類長方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土は、上半部はブロック状の乱積層を成すが、下半部は水平堆積を示す。中央部がレンズ状に窪む乱積層を呈する。遺物には、中世土師器、珠洲、鉄製品があり、主に壁際から出土した。

SK102（第16図）長軸0.78m、短軸0.70m、深さ0.21mのD類円形土坑である。土坑断面はやや口の開いたU字状を呈する。底面に接して正位で15世紀代と思われる鉄鍋（第19図35）が出土した。

SK121　長軸2.73m、短軸2.20m、深さ0.36mのB1類長方形土坑である。壁は傾斜を成して立ちあがる。覆土は、ブロック状の乱積層を成すが、床直上は厚さ３～５cmの薄い水平堆積を成していた。一様にシルト質に富む。遺物には、中世土師器、珠洲、八尾、越前？、鉄製品、鋳型がある。SK122と切り合い関係を成す。

[C2類楕円形土坑]　主に北西地区に集中して営まれている（第５図）。遺物の出土は無い。（SK57は唯一例外で、13世紀後半～14世紀前半の珠洲を出土）。多くはC2類を呈する。平面形は、卵形や円形、長円形などが多い（SK01・57・58など－第13図）。短軸断面がV字あるいはU字状を成す。覆土は、平面で見ると暗色系の中央帯と明褐色粘土質の外縁帯の二分化が顕著である。

ウ．不明遺構

SX01　深さ約30cmで、南北一辺が４mを越える竪穴状遺構である。東コーナー部を検出している。覆土は、暗灰褐色土や暗黄褐色土などのブロック状堆積から成り、シルト質に富んでいる。

SX02　長軸1.95m、短軸1.85m、深さ0.18mのA2類方形土坑である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆

第４表　土坑観察表(1)

遺構	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	備考	時期
SK1	B2	1.76	0.70	0.53	骨片		
SK2	B2	1.12	0.70	0.51			
SK3	C2	0.98	0.80	0.32			
SK4	C2	0.90	0.62	0.30			
SK5	C2	1.00	0.76	0.41			
SK6	C2	1.00	0.81	0.28			
SK7	C2	1.34	0.74	0.49	鉄製品		
SK8	C2	0.87	0.50	0.24			
SK9	C2	1.38	0.82	0.40			
SK10	C2	1.08	0.66	0.44			
SK11	C2	1.21	0.72	0.30			
SK12	C2	1.04	0.82	0.34	中世土師器		
SK13	C2	1.08	0.70	0.34			
SK14	D	0.82	0.68	0.21			
SK15	C2	1.08	0.64	0.54			
SK16	C2	1.11	0.90	0.36			
SK17	C2	0.99	0.49	0.33			
SK18	D	1.02	0.89	0.50			
SK19	C2	0.88	0.66	0.38			
SK20	C2	0.91	0.64	0.32			
SK21	C2	1.21	0.80	0.50	炉壁		
SK22	B2	1.34	0.92	0.44			
SK23	C2	1.12	0.76	0.39			
SK24	D	0.82	0.73	0.32			
SK25	A2	1.32	1.10	0.44	中世土師器		13c
SK26	B2	1.17	0.93	0.19			
SK27	A2	1.68	1.38	0.48	中世土師器、砥石、鉄製品		
SK28	B2	1.64以上	1.18	0.51	鉄滓	SK29と切り合う	
SK29	B2	1.55	1.12	0.66	中世土師器、八尾、珠洲、鉄製品	SK28と切り合う	13c後半～14c前半
SK30	B2	1.43	1.16	0.59	中世土師器、鉄滓		13c
SK31	C2	1.24	0.76	0.18			
SK32	C2	0.58	0.36	0.27	土師器		
SK33	B2	0.78	0.63	0.53			
SK34	C2	0.70	0.51	0.50			
SK35	E	1.22	0.83以上	0.26		SK73と切り合う	
SK36	D2	1.44	0.93	0.33	鉄滓、鉄製品		
SK37	B1	1.98	1.12	0.42	中世土師器、青磁、土錘、鉄製品、鋳造滓、滓片	鋳造滓多い	
SK38	E	1.67	1.58	0.18	中世土師器、珠洲		
SK39	C2	1.18	0.45	0.35			
SK40	B2	1.67	0.92	0.19			
SK41	A1orB1	3.05	2.09	0.42	中世土師器、八尾、土錘、鋳造滓		13c
SK42	B2	1.26	0.88	0.27	中世土師器		13c
SK43	C2	0.92	0.48	0.18			
SK44		−		0.56	中世土師器、鉄滓、骨片、鉄製品、鋳造滓	SK75上に存在	13c
SK45	B1	1.82	1.00	0.52	中世土師器、珠洲、八尾、小刀、鉄釘、鉄製品		13c後半
SK46	D	0.96	0.92	0.49	中世土師器		13c
SK47	BorC	(1.16)	0.85	0.35		SK82と切り合う	
SK48	B2	0.95	0.56	0.29			
SK49	C2	1.03	0.80	0.19			
SK50	C2	1.00	0.75	0.26			
SK51	C2	1.14	0.94	0.18	鉄製品？		
SK52	C2	1.16	0.79	0.28			
SK53	C2	1.00	0.75	0.27			
SK54	C2	1.37	0.84	0.14			
SK55	C2	1.36	0.52	0.40			
SK56	C2	1.26	0.65	0.29			
SK57	C2	1.76	1.00	0.36	珠洲		13c後半～14c前半
SK58	C2	1.44	1.18	0.47			
SK59	B2	1.41	0.58	0.27	中世土師器		
SK60	C2	1.32	0.92	0.50			
SK61	C2	0.68	0.54	0.09			
SK62	D	0.82	0.75	0.31			
SK63	−	−	−	0.11		平面図には記載なし	
SK64	C2	1.47	1.10	0.49	八尾		
SK65	D	0.88	0.79	0.31			
SK66	E	0.71	0.62	0.14			
SK67	D	0.39	0.36	0.52			
SK68	E	0.84	0.57	0.06			
SK69	E	0.59	0.32	0.15			
SK70	C2	1.40	0.74	0.51	中世土師器		
SK71	E	0.96	0.84	0.32	中世土師器		
SK72	B2	1.41	0.76	0.24			
SK73	A1？	(2.20)	(2.20)	0.24	中世土師器、滓、鉄製品、炉壁、鋳造滓	SK35・SK76と切り合う	12c後半
SK74	−	−	−	0.22		SD02と切り合う、平面図には記載なし	

第5表　土坑観察表(2)

遺構	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	備考	時期
SK75	B1	2.60	1.62	0.51	中世土師器、珠洲、銭、小刀、骨片、鉄釘、鉄製品、鋳造滓、炉壁？	SK44と切り合う	13c前半
SK76	A1？	−	2.52	0.09	中世土師器、珠洲、鋳造滓	SK73と切り合う	
SK77	C2	1.69	1.29	0.40			
SK78	C2	1.34	(0.90)	0.56	中世土師器	SK84と切り合う	
SK79	C2	1.12	0.58	0.53	中世土師器	SK80と切り合う	
SK80	C2	(1.18)	0.68	0.49		SK79・SK98と切り合う	
SK81	C2	1.78	0.64	0.62			
SK82	C2	1.13	0.84	0.33		SK47と切り合う	
SK83	D	1.01	0.92	0.38			
SK84	A2？	0.92	(0.70)	0.58		SK78・SK85と切り合う	
SK85	B2	1.42	0.91	0.45		SK84と切り合う	
SK86	C2	1.42	0.66	0.41			
SK87	C2	0.89	0.72	0.19			
SK88	C2	0.96	0.74	0.25			
SK89	C2	1.17	0.86	0.27	白磁		
SK90	D	0.78	0.66	0.35			
SK91	E	1.17	0.93	0.22	中世土師器、鉄製品？		
SK92	AorB	(1.78)	0.84以上	0.35		SK97と切り合う	
SK93	C2	1.28	0.88	0.18			
SK94	C2	1.26	0.82	0.41	珠洲		
SK95	C2	1.19	0.60	0.42			
SK96	B2	1.14	0.60	0.40			
SK97	C2	1.22以上	(0.76)	0.28		SK92と切り合う	
SK98	D	0.78	0.68	0.35		SK80と切り合う	
SK99	B2	0.88	0.66	0.22			
SK100	C2	1.13	0.86	0.52	中世土師器		
SK101	B2	1.12	0.56	0.17	中世土師器		
SK102	D	0.78	0.70	0.24	鉄鍋		
SK103	B2	1.68	1.01	0.60	中世土師器		13c
SK104	B2	1.32	0.62	0.48		SK105と切り合う	
SK105	C2	1.64	(0.92)	0.57		SK104と切り合う	
SK106	C2	1.37	0.94	0.33			
SK107	C2	1.32	0.89	0.32	鉄滓？		
SK108	C2	1.28	0.86	0.30			
SK109	C2	1.46	0.70	0.35			
SK110	B2	0.98	0.68	0.06	瀬戸美濃？		
SK111	E	2.96	1.70	0.14	鉄製品		
SK112	B2	1.76	0.90	0.56	中世土師器、八尾、鉄釘	SK138と切り合う	13c
SK113	B2	1.48	0.84	0.28	中世土師器	SK114と切り合う	
SK114	B2？	0.44以上	0.72	0.36	中世土師器、鉄製品	SK113と切り合う	
SK115	C2	1.05	0.27	0.22			
SK116	B2	1.34	0.88	0.45			
SK117	B2	1.70	0.68	0.50	鉄製品？		
SK118	B2	1.60	1.20	0.61	中世土師器、小刀、鉄製品		
SK119	B2	1.48	1.18	0.48			
SK120	C2	1.05	0.74	0.35	鉄製品		
SK121	B1	2.73	2.20	0.36	中世土師器、珠洲、八尾、越前？、鉄製品、鋳型	SK122と切り合う	13c
SK122	AorB？	1.69	1.00以上	0.31	鉄釘	SK121と切り合う	
SK123	C2	1.10	0.95	0.37			
SK124	D	0.78	0.76	0.30			
SK125	A2	1.28	1.09	0.31			
SK126	C2	1.04	0.64	0.40			
SK127	C2	1.48	0.86	0.32	縄文土器		
SK128	A2orE	1.62	1.48	0.39	中世土師器、八尾、鉄製品	SK151と切り合う。拳大の礫多い	13c
SK129	C2	1.02	0.62	0.36			
SK130	C2	0.51	0.34	0.32			
SK131	C2	0.49	0.36	0.35			
SK132	C2	0.76	0.54	0.36			
SK133	C2	1.17	0.78	0.45			
SK134	B2	1.30	0.68	0.33			
SK135	E	1.59	1.30	0.35			
SK136	B2	1.26	0.68	0.36	中世土師器、銭貨、鉄製品		
SK137	C2	1.13	0.97	0.30			
SK138	AorB	(1.12)	(1.00)	0.23	中世土師器、珠洲、土錘、鉄鍋？、鉄製品	SK112と切り合う	
SK139	C2	1.06	0.83	0.20			
SK140	−	−	−	−		欠番	
SK141	C2	1.32	0.82	0.34			
SK142	−	−	−	−		欠番	
SK143	C2	0.93	0.66	0.11			
SK144	B2	1.00	0.84	0.13			
SK145	D	1.86	1.53	0.19			
SK146	D	0.51	0.48	0.10			
SK147	B1	2.22	0.74	0.49			
SK148	E	1.50	0.97	0.21			
SK149	C2	0.89	0.68	0.42			

第６表　土坑観察表(3)

遺構	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	備考	時期
SK150	B2	1.70	1.20	0.48	中世土師器、鉄製品、礫石	SK151と切り合う	
SK151	C2	(1.10)	0.80	0.38	中世土師器、鉄製品	SK128・SK150と切り合う	13c後半～14c前半
SK152	A2	1.71	1.44	0.49	須恵器、中世土師器、八尾、鉄製品、鋳造滓		12c後半～13c前半
SK153	C2	1.10	0.57	0.23			
SK154	B2	(1.10)	0.66	0.24			
SK155	D	0.71	0.66	0.20			
SK156	C1	2.14	0.62	0.40	土師器、中世土師器		
SK157	C2	0.94	0.68	0.26	中世土師器、珠洲、土錘		12c後半～13c前半
SK158	B2	1.08	0.82	0.20	中世土師器、鉄製品？		
SK159	D	0.94	0.86	0.18	中世土師器、珠洲		13c前半
SK160	D	1.25	1.22	0.17	須恵器、珠洲		
SK161	B2	1.38	0.88	0.28	中世土師器		13c
SK162	B2	1.38	0.86	0.38	中世土師器		
SK163	B1	2.06	0.92	0.52	須恵器？、中世土師器、珠洲、土錘		12c後半～13c前半
SK164	C2	(1.22)	1.06	0.31	八尾？	SK165と切り合う	
SK165	B1	2.00	1.42	0.89	中世土師器、珠洲	SK164と切り合う	14c前半
SK166	B2	1.72	1.33	0.83	中世土師器、珠洲、鉄製品		
SK167	B2	1.65	0.84	0.56	中世土師器、珠洲、鉄製品		13c
SK168	D	1.40	1.23	0.49	中世土師器、土錘	SD04と切り合う	
SK169	B2	1.29	0.83	0.35	中世土師器、鉄製品		13c
SK170	C2	1.18	0.43	0.56	中世土師器、珠洲		13c
SK171	B2	1.26	0.71	0.46	鉄滓		
SK172	A2	1.14	0.99	0.39	鉄製品、鉄滓、鋳造滓		
SK173	B2	1.08	0.80	0.25	鉄製品？		
SK174	B1	4.19	1.08	0.58			
SK175	C2	1.97	0.82	0.40			
SK176	B2	1.33	0.98	0.29			
SK177	D	0.94	0.84	0.53			
SK178	D？	1.06	—	0.40		SK179と切り合う	
SK179	D？	—	0.96	0.41		SK178と切り合う	
SK180	C2	1.70	1.29	0.40	白磁	SD04・SK181と切り合う	
SK181	C1	(3.70)	2.48	0.65	珠洲、八尾	SD04・SK180と切り合う	13c～14c
SK182	C2	1.25	0.88	0.07		SK217と切り合う	
SK183	D	1.03	1.00	0.31			
SK184	B1	2.18	1.30	0.55	土錘、鉄製品？		
SK185	C1	4.08	2.78	0.92	中世土師器、珠洲、古銭？、加工鉄、鉄製品（刀子）		12c後半～13c前半
SK186	B2	1.34	0.92	0.38	土師器、珠洲、鉄製品		
SK187	A1	2.72	2.30	0.69	中世土師器、珠洲、古銭、土錘、石錘	SK188と切り合う	12c後半～13c前半
SK188	C？	0.64以上	0.52	0.15		SK187と切り合う	
SK189	C2	1.02	(0.75)	0.28			
SK190	A2	1.52	1.46	0.10			
SK191	D	0.74	0.38	0.43			
SK192	E	0.82	0.61	0.45	中世土師器		
SK193	C2	0.97	0.65	0.21			
SK194	E	1.96	1.18	0.40	中世土師器、砥石、鉄滓		
SK195	C1	1.89	1.24	0.47	中世土師器		
SK196	E	1.24	0.69	0.16			
SK197	C2	1.54	1.22	0.63	鉄製品		
SK198	—	—	—	0.37	中世土師器、青磁、陶製、炉壁	SK199上に存在、平面図には記載なし	
SK199	B1	1.87	1.50	0.53	中世土師器、珠洲、八尾、越前、鉄釘、鉄製品？、鋳型	SK198・SK206と切り合う	13c後半
SK200	D	1.39	1.25	0.45	中世土師器、鉄製品		
SK201	A1	2.12	1.24以上	0.57	珠洲		13前半
SK202	B2	1.57	1.22	0.43	中世土師器、八尾、砥石、鉄製品	SK203・SK218と切り合う	13c中葉～後半
SK203	AorB	1.33以上	0.32以上	0.12	珠洲	SK202・SK218と切り合う	
SK204	C2	1.76	1.64	0.45	中世土師器、珠洲、青白、砥石、鉄滓、鉄釘、鉄製品		12c後半～13c前半
SK205	C2	1.08	0.51	0.08			
SK206	AorB	(1.00)	0.36以上	0.22	珠洲	SK199と切り合う	
SK207	B1	3.34	1.86以上	0.15	中世土師器、珠洲、鉄釘		13c～14c
SK208	B1？	1.84	1.39	0.32	中世土師器	SK209と切り合う	13c
SK209	—	—	—	0.30	珠洲	SK208上に存在、平面図には記載なし	
SK210	B2	1.25	0.58	0.39	鉄製品？		
SK211	C2	1.25	0.85	0.28	中世土師器		
SK212	C2	0.91	0.69	0.46			
SK213	B2	1.22	0.70	0.28			
SK214	D	0.95	0.92	0.20			
SK215	E	1.32	1.03	0.38	中世土師器		13c～14c
SK216	B2	0.87	0.54	0.07	中世土師器	SK217と切り合う	13c～14c
SK217	B1	3.32	2.10	0.12	八尾	SK182・SK216と切り合う	13c後半～14c前半
SK218	B？	0.70以上	0.16以上	0.40		SK202・SK203と切り合う	
SK219	B2	1.68	1.00	0.23		SD04と切り合う	

・平面形の分類は、富山市教育委員会1999『金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅰ』P15の土坑形態分類による。
A類：方形　B類：長方形　C類：楕円形　D類：円形　E類：不整形とし、さらにA～C類については、長軸の規模によって180cm以上を１類、180cm未満を２類に細分している。
・数値の（　）は推定長を表す。

土は、粗い水平堆積を成し、シルト質に富む。SD02と切り合い関係にある。

SX05（第15図） 長軸3.70m、短軸2.60m、深さ0.85mのC2類楕円形土坑である。壁は緩やかに立ちあがる。覆土や床面からは5～20cm大の長円形礫石が多数出土した。SD04と重複関係にある。SD04の床面にも同様の長円形礫石が出土しており同時存在の可能性がある。

SX03・SX04は欠番である。（藤田、第４～６表は野垣）

エ．溝（第17・18図　写真図版６・８）

SD01 調査区南部で検出した。主軸方向はおよそN－80°－Eで、わずかに蛇行している。南西に隣接する平成８年度調査区では、角度をやや南に変え、南西方向に延びる。検出長約33m、最大幅3.7m、最小幅1.5m、深さは最大0.50m、最小0.40mである。横断面形は幅広の逆台形状を呈する。底面の標高は西部で約8.7m、東部で8.9mとなり、西に向かってわずかに低くなる。なお、平成８年度調査区内では底面が一段落ち込んで西に延びており、落ち込んだ底面の標高は約8.3mとなる。

出土遺物には中世土師器、鉄製品があるが、出土量は多くない。なお、SD02に近い東部で、底面から約10cm浮いた位置で、投げ込みによるとみられる約10cm大の礫がまとまって検出されている。

出土遺物から遺構の時期は12c後半と推定される。

SD02 調査区南部で検出した。主軸方向はおよそN－120°－Eで、ほぼ一直線に掘削されている。平成10年度の調査では、西にさらに真っ直ぐ延びていくことが確認されている。検出長約44m、最大幅1.55m、最小幅0.7m、深さは最大0.62m、最小0.30mで、平均0.4～0.5mである。横断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は西部で約8.7m、中央部で8.8～8.9m、東部で8.75mとなり、中央部が高く、東西でわずかに低い。ただし、掘削や測量による誤差を考慮すれば、ほぼ同じ底面レベルを意識して掘削されたと推測できる。なお、西側の平成10年度調査区に続く溝は、9.1～9.45mと西に向かって標高はあがるようである。

出土遺物には中世土師器、珠洲、羽口がある。出土量は多くない。

出土遺物から遺構の時期は12c後半と推定される。

SD03 SD01とSD02が別れはじめた所で、両溝をつなぐように短く掘削されている。検出長約３m、幅0.35m、深さ0.18mである。底面の標高は約9.0mで、SD01・SD02に比べるとやや高い。

出土遺物はないが、SD01・SD02との関係を考慮すると、同時期の溝と考えられる。

SD04 調査区東部で検出した。主軸方向はおよそN－30°－Eで、ほぼ一直線に掘削されている。検出長約45m、最大幅1.45m、最小幅0.4m、深さは最大0.32m、最小0.13mとなる。SD01・SD02に比べると深さは浅い。横断面形は逆台形状を呈する。底面の標高は北部で約9.0m、中央部で約8.8m、南部で約8.9mとなる。SD02と同様、掘削や測量による誤差を考慮すれば、ほぼ同じ底面レベルを意識して掘削されたと推測できる。

出土遺物には珠洲、鉄製品のほか、古代のものと思われる土師器・須恵器がある。

残りの良い遺物がないため詳細な時期は不明である。ただし、SD02とほぼ直交する位置関係にあること、規模などの類似性を考慮すると、SD02と同時期の遺構と判断される。第21図108の珠洲壺が本遺構に伴うならば、12世紀後半の年代観を支持する。

以上のように、４本の溝についてはいずれも12世紀後半というほぼ同じ時期に機能していた可能性が高い。

このうちSD02・SD04は掘立柱建物および土坑と軸方向が一致する。出土遺物をみると、土坑は12

世紀後半～14世紀前半と時期幅をもち、掘立柱建物は遺物量が少ないため時期幅を限定しにくいが、いずれも12世紀後半という上限の時期は溝と一致している。したがって、溝と掘立柱建物・土坑は一体のものとして集落の形成が行われた可能性が高く、このことからSD02・SD04の機能を推定すると、集落を囲む区画溝であったと考えられる。ただし、溝をまたがるかたちで建つSB06・SB21などは、溝が集落の最終段階までは機能せず、比較的早い段階に埋没したことを示している。出土遺物からもそのことが裏付けられる。

SD01については、上記の溝と軸方向が異なるとはいえ、同時期に存続していた可能性が高いこと、また底面レベルに大きな違いがないことから、SD02・SD04と同様の機能を有する区画溝であった可能性を考えておきたい。（野垣）

(4) 出土遺物の概要（第19～21図　写真図版12～19）

本調査区からの出土遺物には、土師器・珠洲・八尾・瀬戸美濃・青磁・白磁などの中世陶磁器、土錘などの土製品、砥石・錘などの石製品、銭貨・鉄鍋・小刀・鉄鏃・鉄釘などの金属製品がある。鉄製品のなかには種類不明品が多数ある。また、鉄滓・羽口など鋳造関連の遺物の出土もみられる。このほか縄文土器、古代の土師器・須恵器、近世陶磁器など中世以外の遺物がわずかながら出土している。

出土遺物の主体的な時期は、概ね12世紀後半から14世紀前半である。なかでも13世紀代の遺物がその中心と考えられる。

ア．溝

SD01　1は土師器高台椀で、貼り付け状の高台を施す。2はロクロ成形の土師器皿である。体部は直線気味に開き、端部は丸くおさめる。底面は浅く凹み、回転糸切り痕を残す。

SD02　3は平高台をもつロクロ成形の土師器皿である。底面には明瞭な回転糸切り痕を残す。胎土は粗く、重量感がある。4は平高台をもつ土師器皿である。底面は回転糸切り痕を残し、内面中央はへそ状に小さく出っ張る。5は非ロクロ成形の土師器皿である。口縁部を強く撫で、体部との間に段ができる。6は珠洲擂鉢である。口縁部は内端が嘴頭状に突出する外傾口縁である。吉岡編年（吉岡1994、以下同じ）Ⅰ期に比定される。

イ．土坑

SK25　7は非ロクロ成形の土師器皿である。端部は尖る。

SK27　8は砥石である。断面長方形で、板状の形態である。表裏面ともに不定方向の擦痕がみられる。

SK28　9は元豊通寶（北宋銭、初鋳1078年）である。このほか、図示していないが、聖宋元寶（北宋銭、初鋳1101年）も出土している。

SK29　10は非ロクロ成形の土師器皿である。

SK30　11は非ロクロ成形の土師器皿である。端部はわずかに面取りされる。12は元祐通寶（北宋銭、初鋳年1086年）である。

SK36　13は元豊通寶（北宋銭、初鋳1078年）である。

SK41　14は非ロクロ成形の土師器皿である。

SK42　15は非ロクロ成形の土師器皿である。平坦気味の底部から口縁部が屈曲して短く上外方に立ち上がる。

SK44　16は紹聖元寶（北宋銭、初鋳1094年）、17は淳化元寶（北宋銭、初鋳990年）である。18は非ロ

クロ成形の土師器皿である。平坦な底部から浅い角度で口縁部が斜外方に立ち上がる。

SK45　19、20、22、23は非ロクロ成形の土師器皿である。19は角閃石を多く含み、平滑で表面にはつやがある。20は内面にハケ状工具の痕がわずかに残る。22は口縁部に全体的に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。23も22と同様の作りで、口縁部には煤が付着する。21は珠洲擂鉢である。器体はほぼ直線的に立ち上がる。外傾口縁で、内端部がわずかに摘み出され、端面は平直である。吉岡編年Ⅲ期に比定される。このほか、図示していないが、種類不明の銭貨が出土している。

SK46　24は非ロクロ成形の土師器皿で、平坦な底部から口縁部が浅い角度で短く立ち上がる。

SK57　25は珠洲擂鉢である。器体はやや膨らみをもって立ち上がり、口縁形態は方頭でやや外傾する。吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期に比定される。

SK73　26は土師器の有台塊である。高台は削り出しによる。内面には黒色処理を施す。30は須恵器の鉢と思われる。31は珠洲擂鉢である。器体はわずかに膨らみをもって立ち上がる。外傾口縁で、外端が突出し、端面は窪む。内外面のロクロ目が顕著で、凹凸が目立つ。吉岡編年Ⅰ期に比定される。

SK75　27～29は非ロクロ成形の土師器皿である。27は底部がやや丸みをもち、口縁部が上外方に屈曲して短く立ち上がる。28は丸底気味である。29は器壁が薄い。32は小刀である。全体が厚く錆に覆われているため、折損面の観察により形状を推定した。切先と茎の先端は欠損している。関、切先の正確な形状は不明である。33は熙寧元宝（北宋銭、初鋳1068年）、34は祥符元寶（北宋銭、初鋳1009年）である。

SK102　35は鉄鍋である。五十川信矢氏の研究（五十川1992）に拠ると、内耳がつく鍋Cに分類される。器体は底部から浅い角度で開いた後、体部下半から垂直に立ち上がる。口縁部は屈曲した後、直線的に上方にのびる。底部中央に一文字湯口が付く。内耳は対向する位置に一つずつあり、断面円形の棒状で、L字形に折り曲げられている。内耳を結んだラインと湯口の方向は完全には平行にならず、ややずれがある。内耳の一方の上部と口縁部の2ヶ所には木片が付着している。

SK103　36は非ロクロ成形の土師器皿である。

SK112　37～39は非ロクロ成形の土師器皿である。37・38はいずれも平底で口縁部が屈曲して短く立ち上がる。39は口縁部から体部上半にかけて幅広いナデ調整を施す。端部は尖り、器壁は薄い。40は鉄釘である。全体が錆に覆われており形状は明確ではない。折損面の観察によれば、断面は方形を呈すると思われる。

SK121　41・42は非ロクロ成形の土師器皿である。41の端部は尖り気味である。42は表面がやや摩滅しているものの、内面にハケ状工具の痕がわずかに残る。43は珠洲擂鉢である。卸目は一単位12目以上の櫛歯原体を用いている。底面は静止糸切りである。44は八尾瓶である。未発達なN字状口縁を呈し、垂下した部分は丸みをもっている。口縁外面の屈曲部にはヘラによる切り込みを入れる。

SK128　45は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は薄い。

SK136　46は熙寧元寶（北宋銭、初鋳1068年）である。

SK138　47は土錘である。側縁部に膨らみをもった樽型を呈する。48はやや湾曲した鉄板である。鉄鍋片の可能性がある。

SK150　図示していないが、種類不明の銭貨が出土している。

SK151　49・50は非ロクロ成形の土師器皿である。いずれも形態・大きさは似ている。49は器壁がやや薄い。

SK152　51は柱状高台をもつロクロ成形の土師器である。底面に回転糸切り痕を残す。胎土は粗く、

角閃石、石英と思われる粒子を多く含む。

SK157　52はロクロ成形の土師器皿である。端部は尖り気味である。底面には回転糸切り痕を残す。53は土錘である。側縁部は膨らみをもち、端部に寄った位置に最大径がある。

SK159　54は珠洲擂鉢である。器体は膨らみをもって立ち上がり、口縁を内湾気味におさめる。水平口縁で、内端が嘴頭状に突出する。内外面はロクロ目が顕著で、凹凸が目立つ。吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期に比定される。55は非ロクロ成形の土師器皿である。口縁部外面を強く撫で付けており、底部との間に段ができる。底部内面には粗いハケ状工具の痕が残る。

SK161　56はロクロ成形の土師器皿と思われる。端部は尖り気味である。

SK163・SK185　57は珠洲甕である。口縁はやや下方に挽き出し先端を舌端状とする。吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

SK165　58は非ロクロ成形の土師器皿である。内面にハケ状工具の痕が残る。

SK167　59は非ロクロ成形の土師器皿である。平坦な底部から口縁部が上外方に短く立ち上がる。器壁は薄い。

SK168　60は土錘である。側縁部はわずかに膨らみをもつ。

SK169　61は非ロクロ成形の土師器皿である。底面は丸底気味で、外面が全体的に黒変している。

SK170　62は珠洲擂鉢である。器体はやや急角度で立ち上がる。内面に一単位９～10目の卸目を施し、底面には板状圧痕が残る。吉岡編年Ⅱ期に比定される。

SK180　63は白磁碗である。口縁部がやや外反する。灰白色を呈し、外面は釉だれがみられる。

SK181　64は珠洲擂鉢である。内面は摩滅が著しく明確でないものの、一単位10目程度の卸目を施す。底面には板状圧痕が残る。吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期に比定される。

SK184　65は土錘である。側縁部はやや膨らみをもち、樽形を呈する。

SK185　66・67はロクロ成形の土師器皿である。いずれも回転糸切り痕を残すが、摩滅により明瞭ではない。68～71は非ロクロ成形の土師器皿である。69は器壁が厚く、端部は丸い。70は丸底を呈する。器壁は口縁部に向かうにしたがい厚みを増す。71は平坦な底部から口縁部が短く上方に立ち上がる。72は珠洲擂鉢である。器体はやや膨らみをもって立ち上がり、口縁部でわずかに内傾する。水平口縁で、端面は平直である。内外面はロクロ目の凹凸が目立つ。吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期に比定される。73は珠洲甕である。外面には単位の小さい叩目を部分的に施す。底面は静止糸切りである。74は雁又鏃である。茎断面は方形を呈し、関部には厚さ約５mmの方形の部材が鏑状につく。

SK187　75～82は平高台を有するロクロ成形の土師器皿である。76～81は底面に回転糸切り痕が残る。75は口縁部がわずかに摘み出されるように立ち上がり、端部は尖る。底面はヘラ状工具によるとみられる痕が残る。76は底面の回転糸切りの痕をナデもしくは工具により消している。77は口縁に向かって器壁を減じながら斜外方に直線的に立ち上がる。79・80は内面の中央部がへそ状にやや出っ張る。81は体部が直線的に開いた後、口縁部で内湾して立ち上がる。82は口縁部に向かって器壁を減じながら内湾して立ち上がる。底面は回転糸切り痕を撫で消しているとみられる。83・84はロクロ成形の土師器皿である。いずれも端部は尖り気味である。83は口縁部がやや内湾して立ち上がる。85は非ロクロ成形の土師器皿である。ナデにより口縁部の角度が変わっている。86は白磁である。口縁部はやや屈折し、内面に段をもつ。釉は薄く、色調は黄色がかった白色を呈する。87・88は珠洲甕である。いずれも外面に平行叩きを施す。88の内面には朱のような付着物が部分的にみられる。吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期に比定される。89～91は土錘である。89・91は側縁部がやや膨らみをもち、90は直線的である。92は石製の錘と考えられる。平面楕円形の石材の一方の端部付近を打ち欠いてくびれを作っている。重

量は1590ｇである。

SK199　93は非ロクロ成形の土師器皿である。平坦な底部から体部・口縁部が浅い角度で斜外方に立ち上がる。94は八尾鉢である。直線的に開く体部から口縁部がわずかに内傾して立ち上がる。火膨れが認められる。

SK201　95は珠洲擂鉢である。外傾口縁で、端部は内端を摘んでわずかに拡張している。吉岡編年Ⅱ期に比定される。

SK202　96は青磁碗である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、外面には鏑蓮弁文を施す。釉は薄い緑色、胎土は灰白色を呈する。

SK204　97は非ロクロ成形の土師器皿である。平坦な底部から体部・口縁部が斜外方に立ち上がる。赤色酸化粒を多く含む。98は青磁皿と思われる。口縁部が屈曲して外に折れた後、端部はわずかに内湾して立ち上がる。釉は薄い緑色、胎土は灰白色を呈する。99は皇宋通寶（北宋銭、初鋳1038年）である。100は小刀と思われる。全体が厚く錆に覆われているため、形状は正確でない可能性がある。

SK207　101は非ロクロ成形の土師器皿である。口縁部は強く撫でられ、底部外面との間に段ができる。102は釘もしくは馬鍬と思われる。全体が錆に覆われているため、形状は正確でない可能性がある。

SK208　103は非ロクロ成形の土師器皿である。平坦な底部から口縁部が斜外方に短く立ち上がる。

SK209　104は須恵器甕と思われる。外面に平行叩き、内面に弧状の当て具痕が残る。

SK215　105は非ロクロ成形の土師器皿である。体部・口縁部は浅い角度で開く。

SK216　106は非ロクロ成形の土師器皿である。丸底気味の底部から、口縁部が角度を変えて内湾しながら立ち上がる。

SK217　107は八尾甕と思われる。調整は、外面上半がナデ、下半がヘラによるカキ上げ、内面上半がナデ、下半が布状のものを用いてナデを行っている。内面には粘土接合痕が残る。

SK219 or SD04　108は珠洲甕である。SK194かSD04いずれかの遺構からの出土である。底面は回転糸切り痕を残し、外面底部と体部の境に指頭圧痕を施す。内面はロクロ目が顕著で凹凸が目立つ。吉岡編年Ⅰ期に比定される。

ウ．ピット（掘立柱建物・柵列柱穴含む）

P９　109は非ロクロ成形の土師器皿である。口縁部はやや黒変している。

P78　図示していないが、紹興元寶（南宋銭、初鋳1131年）が出土している。

P96（SB08）110は平高台をもつロクロ成形の土師器皿である。底面には回転糸切り痕が残る。

P366（SB08）111はロクロ成形の土師器皿である。胎土は粗い。

P369（SB13）112はロクロ成形の土師器皿である。底面は回転糸切り痕を撫で消している。

P374（SB13）113は非ロクロ成形の土師器皿である。丸底から口縁部が浅い角度で開く。

P431（SB12）114は非ロクロ成形の土師器皿である。体部と口縁部で角度が変わり、口縁部はやや外反して立ち上がる。115は平高台をもつロクロ成形の土師器皿である。底面は回転糸切り痕が残る。

P446（SB19）116は非ロクロ成形の土師器皿である。口縁部でやや角度が変わる。

P672（SA09）117は非ロクロ成形の土師器皿である。口縁部は強く撫でられ、体部と立ち上がり角度がやや変わる。端部は尖る。　（野垣）

(5) まとめ

検出遺構の概要　平成９年度の調査区では、12世紀後半から14世紀前半におよぶ集落跡を発掘した。検出した遺構には、掘立柱建物跡（SB）23棟、柵列（SA）10本、土坑（SK）217基、不明遺構（SX）３基、溝（SD）４本、ピット（P）多数、噴砂数箇所がある。遺跡は、12世紀後半に属するSD02とSD04で囲まれた方形区画溝（後の調査で北西－南東56m前後×北東－南西60m前後と判明した）内の遺構とその南西に位置する遺構とで構成されている。方形区画には、掘立柱建物、土坑が分布を遠えて営まれている。生活や墓域領域について計画性の高い村落形成が行われている。

掘立柱建物と付帯施設　調査区の最高位（標高9.5m）は西域にあり、北東端や南東端（端部でそれぞれ標高9.0m）に向って緩く傾斜している。掘立柱建物は、調査区の南東に立地し標高9.2m前後に集中する。主にSD04に沿って北東－南西方向に直列配置され、同一位置で数回の建て替えが行われたものが多い。特に、SB13やSB14は規模も大きく、同一地での建て替え回数も多い。区画溝内の中核的建物と見ることができる（SB13→SB14と推移）。なおP33・P117・P118では、円形掘り方内に方形の柱材痕跡を認めることができた。

土坑の分布と重なるようにして、方形土坑や長方形土坑、楕円形土坑が営まれている。本遺跡の遺物のほとんどはこれらの土坑から出土している。軸線方向が掘立柱建物と合致するものが多く、それらは付帯施設とすることができる。長軸が1.8m以上を成す大型（１類）土坑（竪穴遺構）もみられる。掘立柱建物の北西側に柵列を伴うものが多い。柵列は掘立柱建物の風除や土坑との遮蔽として設けられていた可能性がある。

土壙墓とその分析（第４図）　西域に分布する土坑群を検討したい。それらは土坑の形状や再埋土された土層堆積状況から土壙墓とすることができる。もっとも高位の標高9.3～9.4mに営まれている。掘立柱建物の営地よりも高位に位置しており、中世の、墓域に対する観念の一端が現れている。

土壙墓は主にC類・D類土坑から成り、総数約70基になる。SD02をはさんだ両域に分布する。分布域や主軸方向の違いによって３大別（Ⅰ群・ⅡA群・ⅡB群）することができる。おおよその傾向として２基が並列して１単位を形成している。単位土壙墓は大小などがあり様々である。３基でまとまる単位もある。各単位の主体として夫婦、兄弟、親子などが想定できる。各単位は、さらに属性によってA～Lの12類に集約することができる。なお第４図は、個別の帰属で疑義あるものも含むが、群別や分類の単位の把握を目的とし大局的な観点から作成した。

Ⅰ群は、主軸方位を北西－南東にとる。約17基から成り、７単位、３類（A～C）にまとまる。分布は、SD02（12世紀後半）の北側に集約されている。

ⅡA群は、Ⅰ群と分布域を同じくして営まれているが、主軸を90°違え北東－南西方向にとる。やや大型で整然とした配置様相を呈し北西－南東方向に広がる。約14基から成り、７単位、１類（D）にまとまる。

ⅡB群は、ⅡA群と主軸方向を一にするがⅡA群の南西域に営まれている。約30基から成り、18単位、８類（E～L）にまとまる。整った長円形の小振りタイプを成す。第４図ⅡB群の14・15・16単位（E類）はSD02を切って構築されている。これらは直列して重複形成されており、他の土壙墓とは築造原理を異にしている。

これらの土壙墓からは築造年代に直接結びつく遺物は検出されなかった。このため築造経過を周囲の状況から類推しておきたい。土壙墓の主軸方向は明確に二分できる。Ⅰ群が北西－南東をとるのに対して、ⅡA群とⅡB群は北東－南西方向をとる。主軸方向からみて両者の間に画期がある。ⅡA群とⅡB群の間は、連続する築造原理が働いていたとすることができる。

まずⅠ群（７単位３類）を本遺跡の創始期に関わる墓群とみたい。ⅡA群（７単位１類）は、切り合いが少ないことから類推してⅠ群の痕跡がまだ残っている間に成立したとみたい。Ⅰ群と方位を違えることから、何等かの原因で強固な世帯共同体の絆（整然とした配置から）が再構築された段階の墓群とみる。Ⅰ群のＡ・Ｃ類がⅡＢ群（Ｄ類）に集約され、Ｂ類がＥ・Ｆ類に分離したとみることができる。いずれもSD02の北に配置されておりⅠ群とⅡＡ群との間で墓群位置の世襲が行われている。

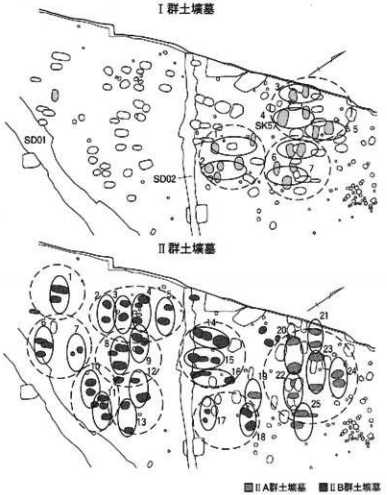
このことは、掘立柱建物の成立と展開過程とも連動するようである。初期の掘立柱建物は、SD02とSD04の方形区画内で成立したと想定されるが、SB06やSB21はSD02の上に構築されている。また、E群土壙墓がSD02を切って築かれていることから、この段階では、SD02の区画は廃棄されていたと思われる。SD02の廃棄は、集落区画の再編を意味する。SB13やSB14などの中核的施設の位置は堅持しながらも南西方向へと集落または屋敷が拡大されたことを示すであろう。このような掘立柱建物の展開過程を傍証として、SD02の南西に分布するⅡＢ群は、新興世帯による新墓域として設けられたとみたい。このようなことからⅠ群→ⅡA群→ⅡB群の築造推移を想定している。【補註…Ⅰ群土壙墓に属するSK57で13世紀後半～14世紀前半の珠洲が出土している。本来的な遺物であるとすればⅠ群土壙墓は調査区全体では新しい段階となる。この場合、築造推移の再考が必要となる。】

小総括　本遺跡は、12世紀後半に区画溝で区切られた計画的村落として成立した。当初の構成員は３世帯前後の血縁共同帯を単位としていたと想定できる。その後、村落の再編がありSD02の廃棄にあわせて居住空間と墓域の拡大が行われた。土壙墓はSD01の北側にのみ分布し、南側では皆無である。SD01が墓域の新境界となっている。

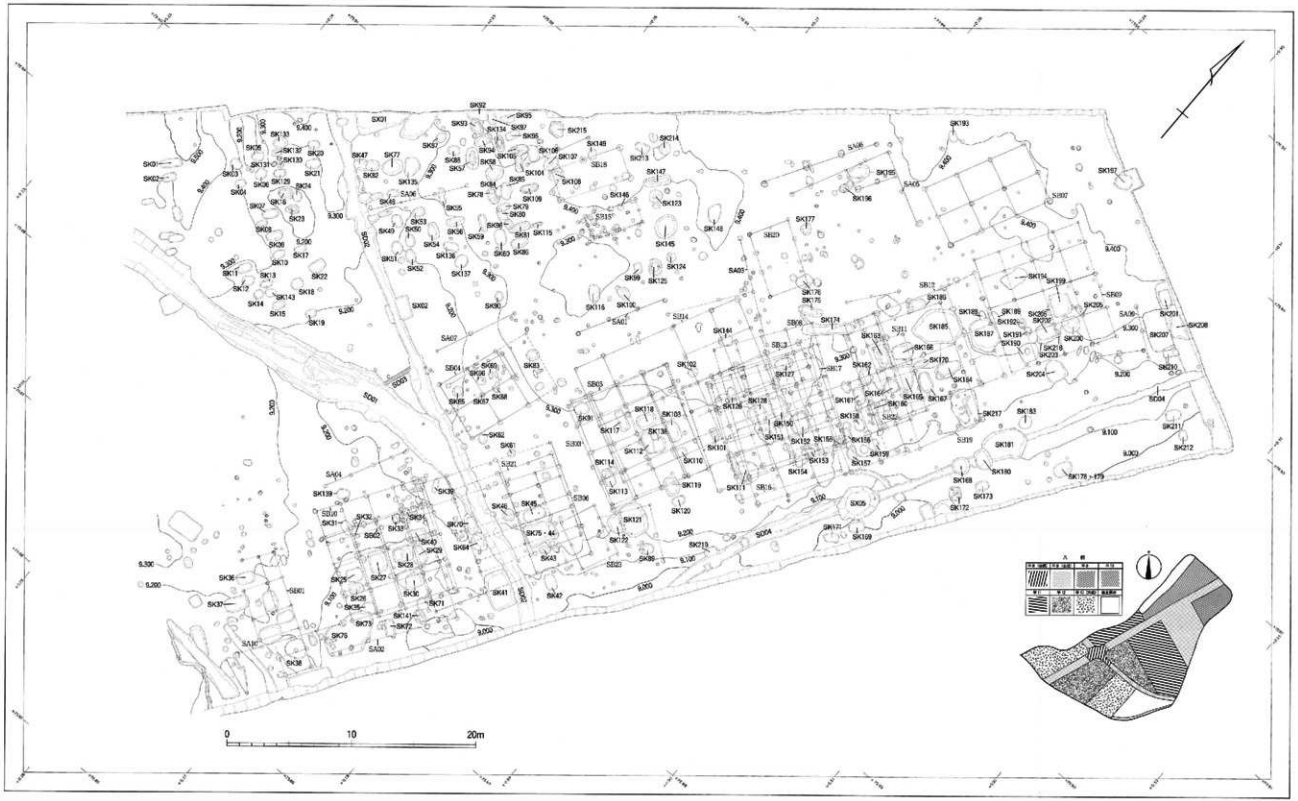
遺跡は13世紀前半に盛行し、後半にはやや衰退し14世紀前半まで継続した。この間、土壙墓ⅡＡ群とⅡＢ群が同時存立していたとすれば、９世帯前後で３～４代継続した村落であったと推測できる。村落の主体はSB13・14の屋敷地であり、土壙墓Ａ・Ｃ・Ｄ類の被葬者層が担っていた。

面積100㎡を越える掘立柱建物は、地侍層あるいは有力農民層（在地領主層）の住居とすることができよう。12世紀後半～13世紀前半に属するSB12あるいはSB19に付帯すると思われるSK185からは雁又鏃が出土している。またSK32やSK100では小刀が出土している。とりわけ雁又鏃は地侍層の存在を示す可能性がある。

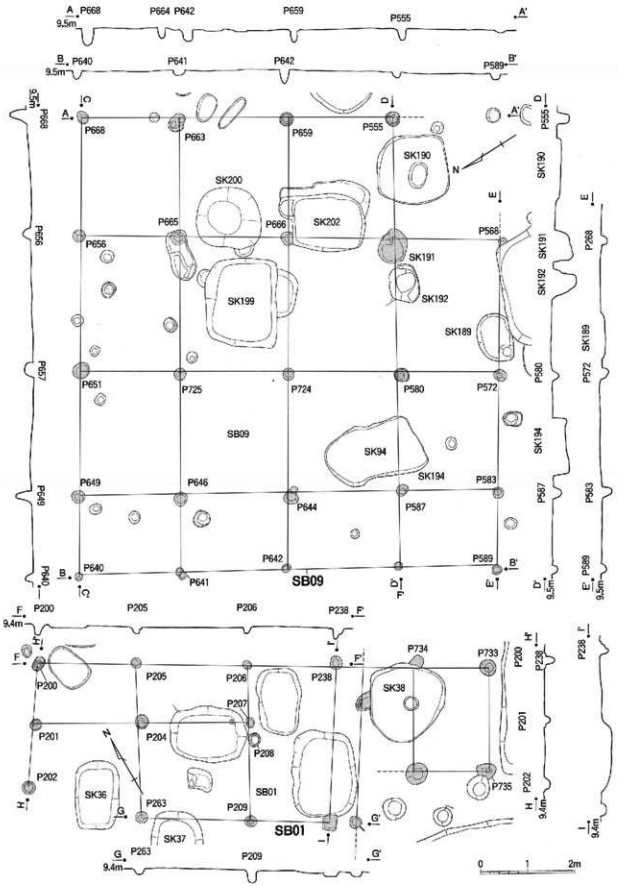
（藤田）



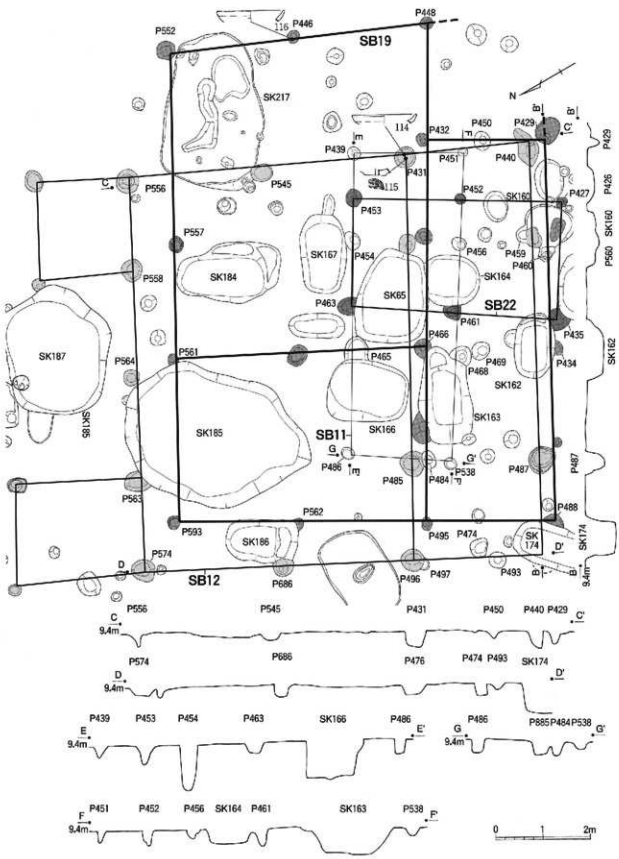
第４図　土壙墓 群別分布図（１：400）



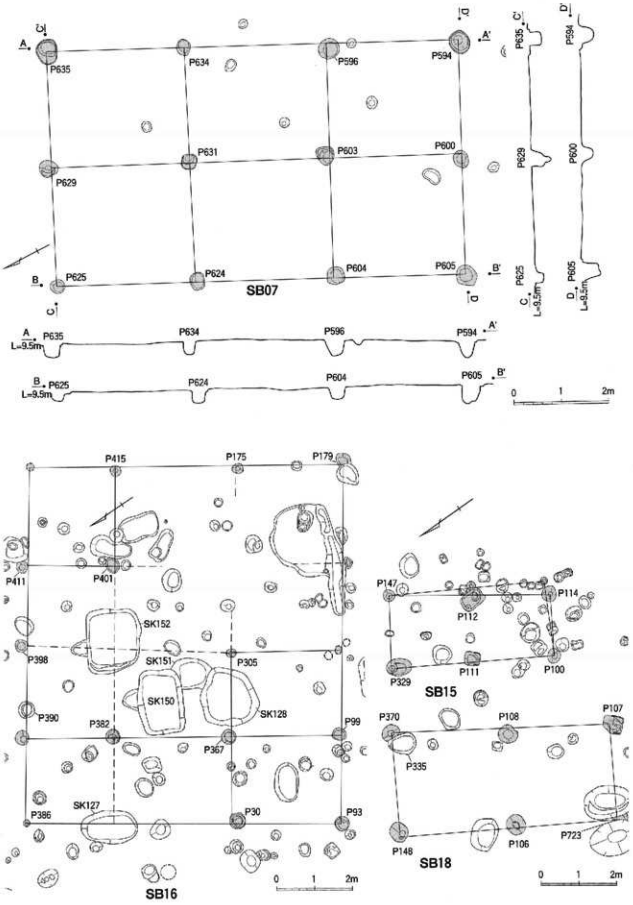
第５図　平成９年度調査区遺構配置図（１：300）



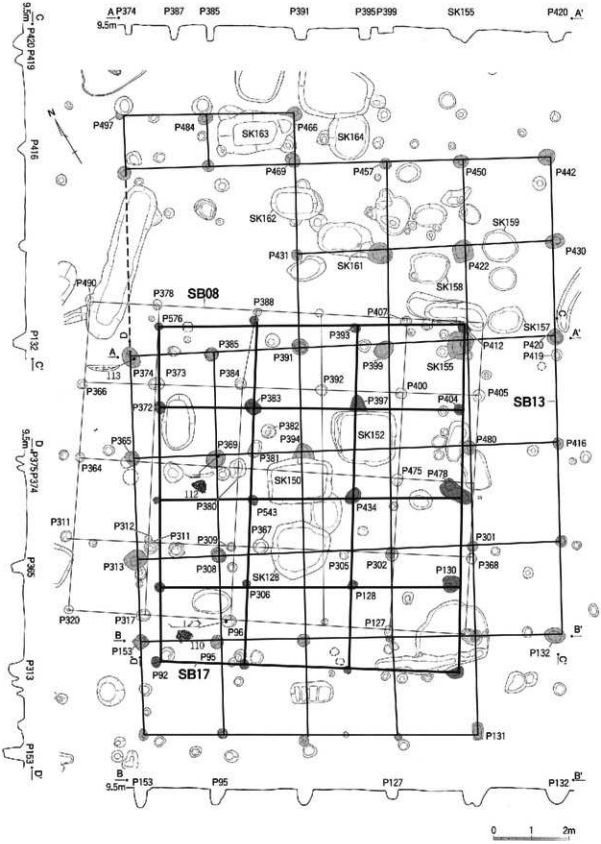
第６図　SB09、SB01平面図・エレベーション図（１：80）



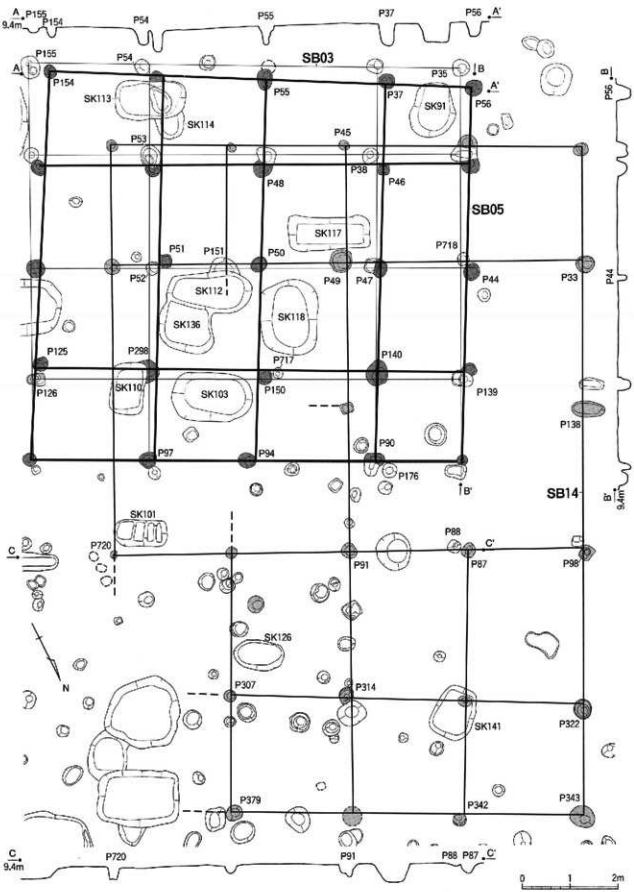
第７図　SB11、SB12、SB19、SB22平面図・エレベーション図（１：80）



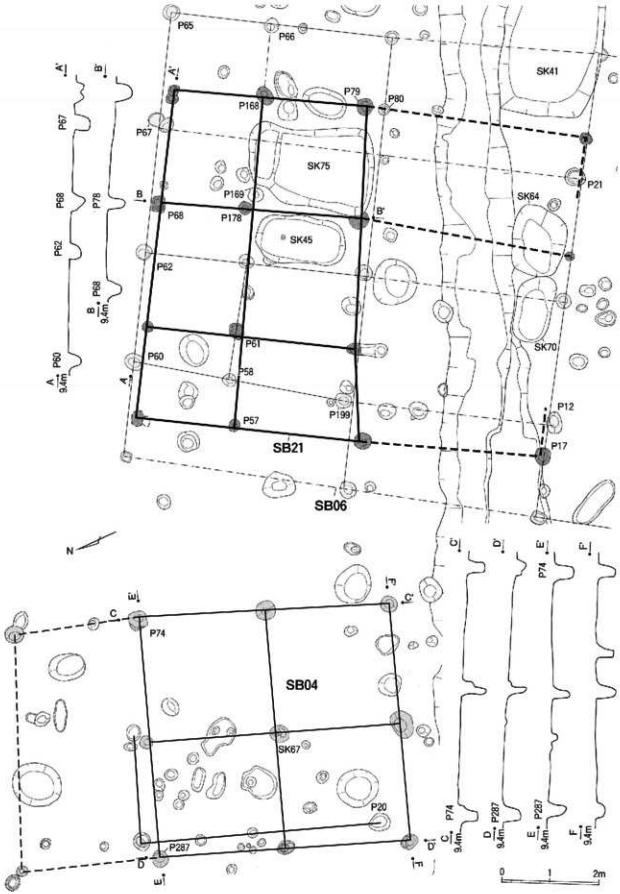
第８図　SB07、SB16、SB15、SB18平面図（１：100、SB07のみ１：80、他は１：100）



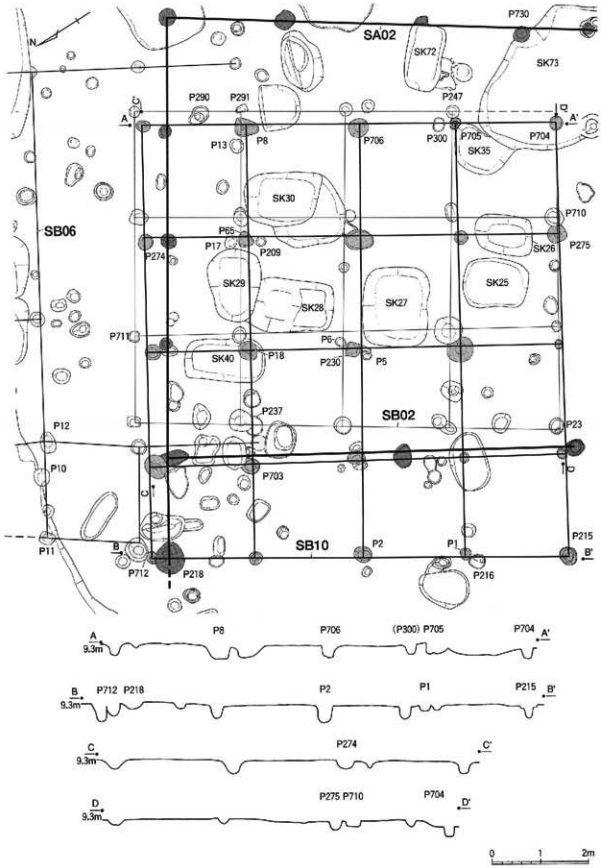
第9図　SB08、SB13、SB17平面図・エレベーション図（1：100、この部分に重なるSB16は第8図に掲載した）



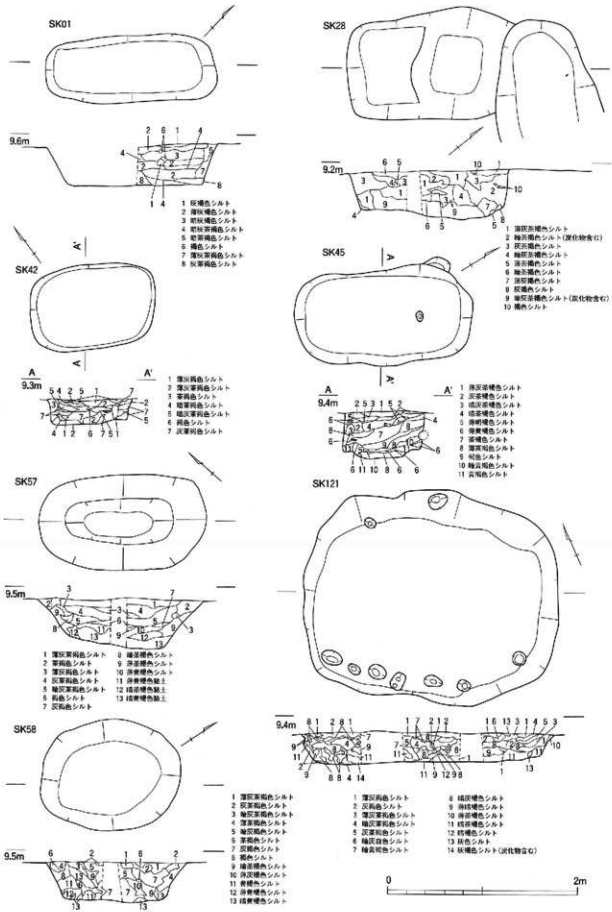
第10図　SB03、SB05、SB14平面図・エレベーション図（１：80）



第11図　SB06、SB21、SB04平面図・エレベーション図（1：80）

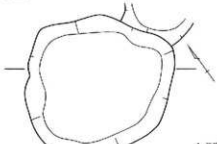


第12図　SB02、SB10、(SB06) 平面図・エレベーション図（１：80）



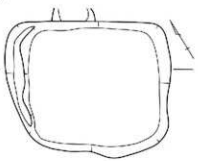
第13図　土坑平面図・土層断面図(1)（１：40）

SK128



1 暗黒褐色シルト
2 暗灰褐色シルト
3 暗色シルト
4 黒褐色シルト
5 灰褐色シルト
6 褐灰色シルト
7 灰褐色シルト(炭化物含む)
8 明灰白色シルト
9 明灰黄褐色シルト
10 明灰黄褐色シルト(炭化物含む)
11 褐灰褐色シルト(炭化物含む)
12 明褐色粘土
13 暗黄褐色シルト
14 黒褐色シルト

SK152



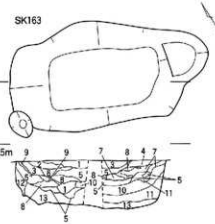
1 薄灰褐色シルト
2 薄灰茶褐色シルト
3 薄茶褐色シルト
4 灰褐色シルト
5 暗茶褐色シルト
6 灰褐色シルト(炭化物含む)
7 灰茶褐色シルト
8 薄灰茶褐色シルト(炭化物含む)
9 灰茶褐色シルト(炭化物含む)

10 暗灰褐色シルト
11 暗灰茶褐色シルト(炭化物含む)
12 暗灰茶褐色シルト
13 黒褐色シルト
14 暗茶褐色シルト
15 暗茶褐色シルト(炭化物含む)
16 茶褐色シルト(炭化物含む)
17 青灰褐色シルト
18 黄褐色シルト

SK157

1 薄灰褐色シルト
2 薄灰黄褐色シルト(炭化物含む)
3 灰褐色シルト
4 薄灰褐色シルト(炭化物含む)
5 灰褐色シルト(炭化物含む)
6 薄黄褐色シルト
7 灰白色シルト
8 褐灰黄褐色シルト
9 褐灰色シルト(炭化物含む)
10 灰黄褐色シルト
11 褐黄褐色シルト
12 褐灰色シルト
13 褐白褐色シルト
14 薄褐褐色シルト
15 薄白褐色シルト
16 薄灰白色シルト
17 褐灰白色シルト
18 灰褐色シルト
19 灰色シルト

SK163



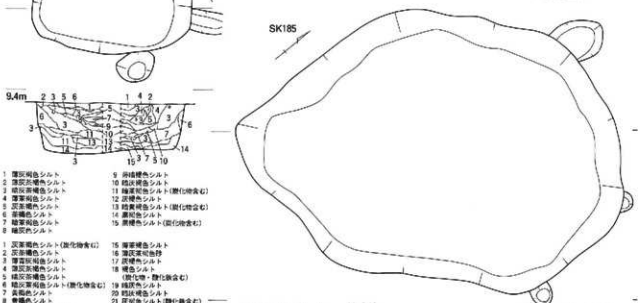
1 薄灰褐色シルト(炭化物含む)
2 薄灰黄褐色シルト
3 薄灰褐色シルト
4 薄茶褐色シルト
5 灰褐色シルト
6 薄黄褐色シルト(炭化物含む)
7 褐黄褐色シルト
8 褐灰白褐色シルト
9 青黄褐色シルト
10 褐褐褐色シルト
11 褐灰褐色シルト
12 茶褐色シルト
13 褐黄褐色粘土

SK167

1 薄灰褐色シルト
2 薄茶褐色シルト
3 薄茶褐色シルト
4 薄茶褐色シルト
5 薄茶褐色シルト
6 褐灰褐色シルト(炭化物含む)
7 暗茶褐色シルト
8 褐灰色シルト

9 炭褐褐色シルト
10 灰褐褐色シルト
11 褐茶褐色シルト(炭化物含む)
12 炭褐色シルト
13 褐灰褐色シルト(炭化物含む)
14 黒褐色シルト
15 黒褐色シルト(炭化物含む)

SK185

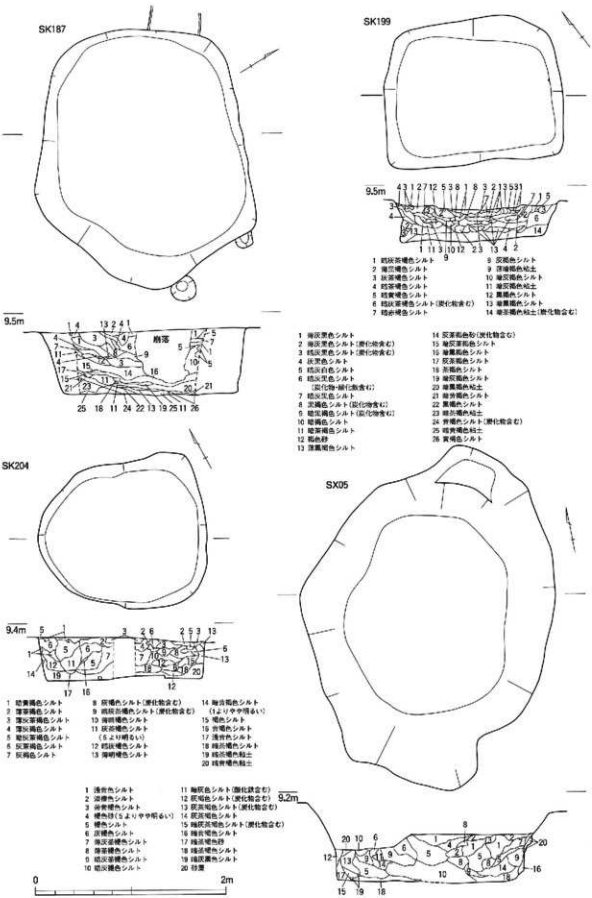


1 灰茶褐色シルト(炭化物含む)
2 茶褐色シルト
3 薄茶褐色シルト
4 茶灰褐色シルト
5 褐灰茶褐色シルト(炭化物含む)
6 茶褐色シルト
7 炭褐色シルト
8 青褐色シルト
(7よりやや明るい)
9 炭褐色シルト
(7よりやや暗い)
10 暗茶褐色シルト
11 暗黄褐色シルト
(10よりやや明るい)
12 炭茶色シルト
13 炭色シルト
14 灰茶褐色シルト

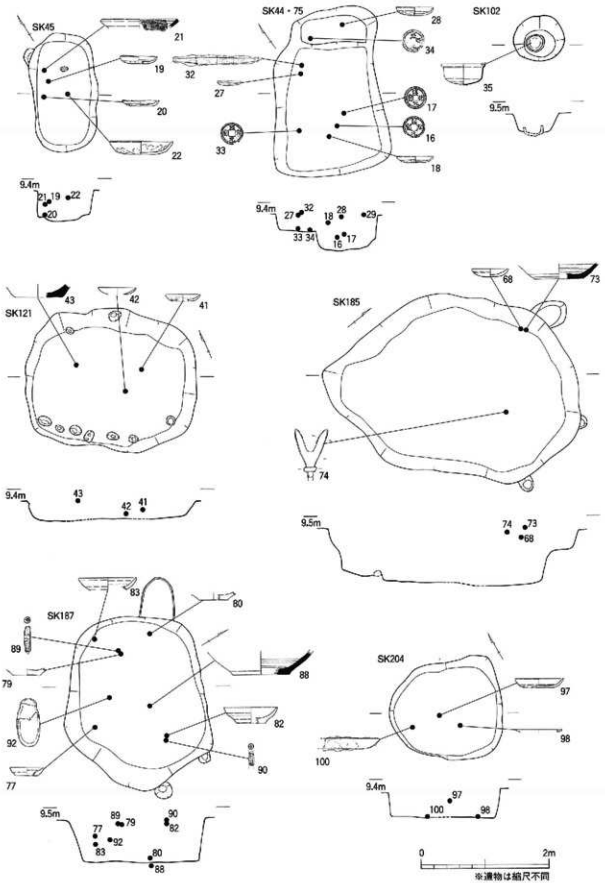
15 薄茶褐色シルト
16 薄茶茶褐色砂
17 炭褐色シルト
18 褐色シルト
(炭化物・酸化鉄含む)
19 褐炭色シルト
20 明炭褐色シルト
21 茶灰色シルト(酸化鉄含む)
22 炭褐色シルト(炭化物含む)
23 明炭褐色シルト(酸化鉄含む)
24 褐灰色粘土
25 明炭褐色土
26 薄炭褐色シルト
(14よりやや明るい)
27 褐炭褐色シルト(炭化物含む)
28 褐炭茶色粘土(酸化鉄含む)
29 褐茶褐色シルト
30 炭褐色シルト

0 2m

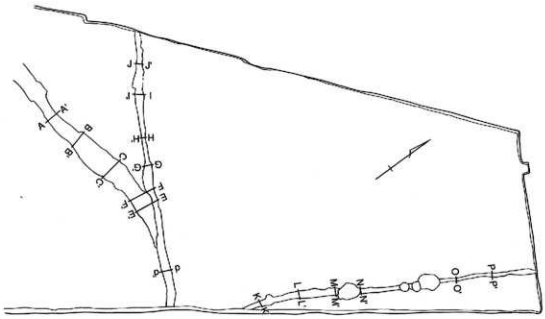
第14図　土坑平面図・土層断面図(2)（1：40）



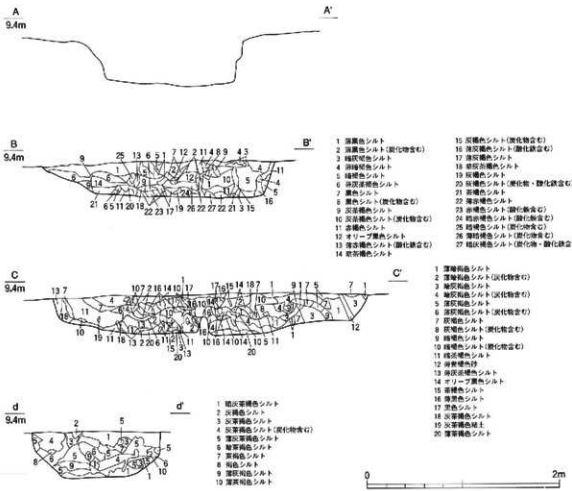
第15図　土坑平面図・土層断面図(3)（１：40）



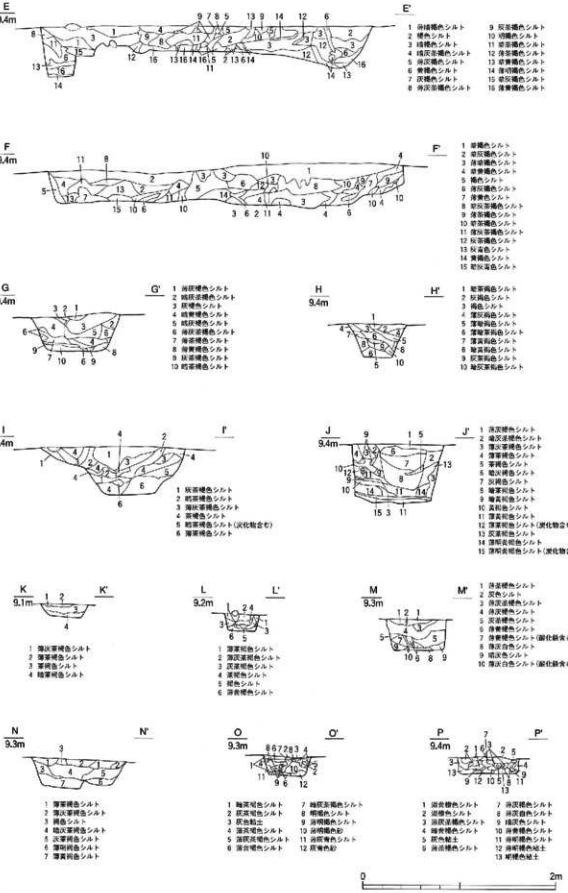
第16図　土坑遺物出土状況図（１：60）



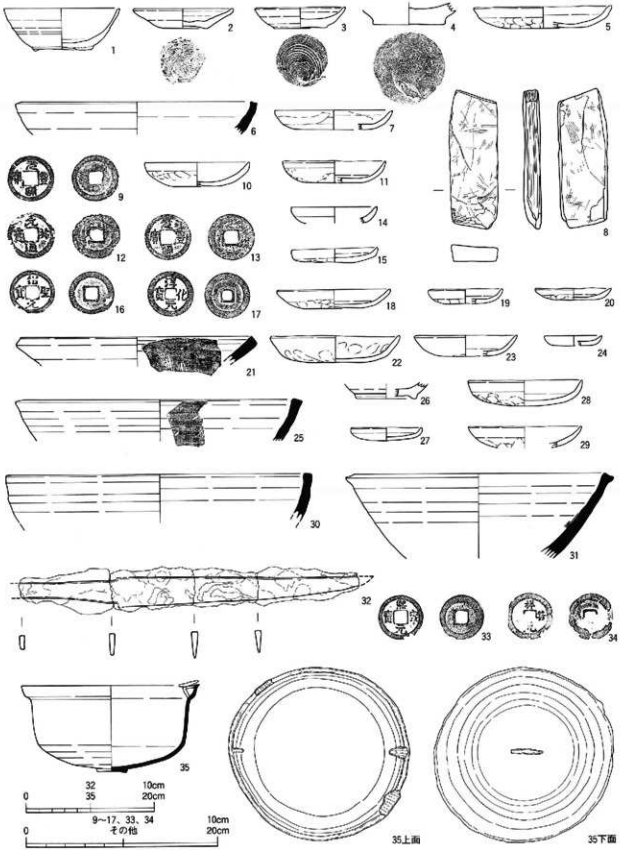
各土層断面の位置



第17図　溝土層断面図(1)（１：40）

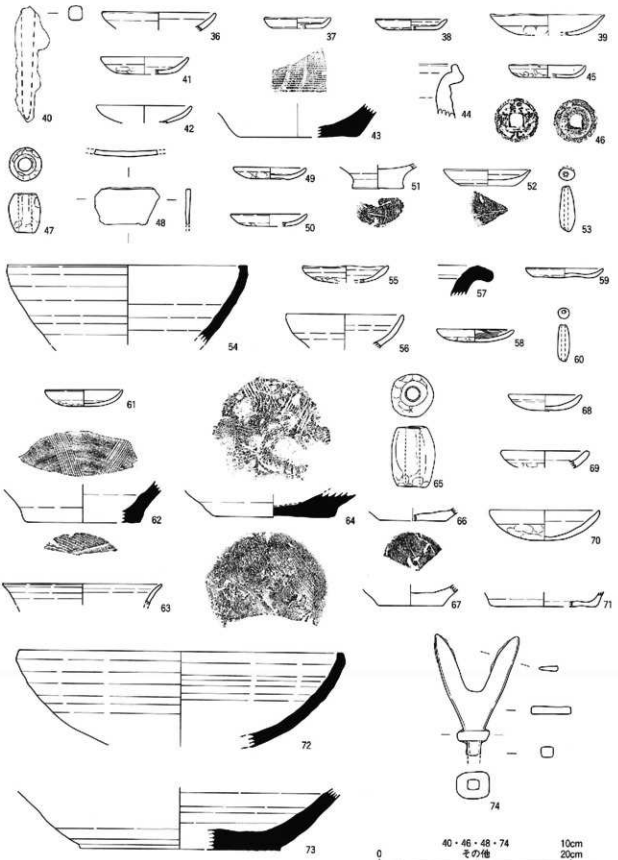


第18図　清土層断面図(2)（１：40）



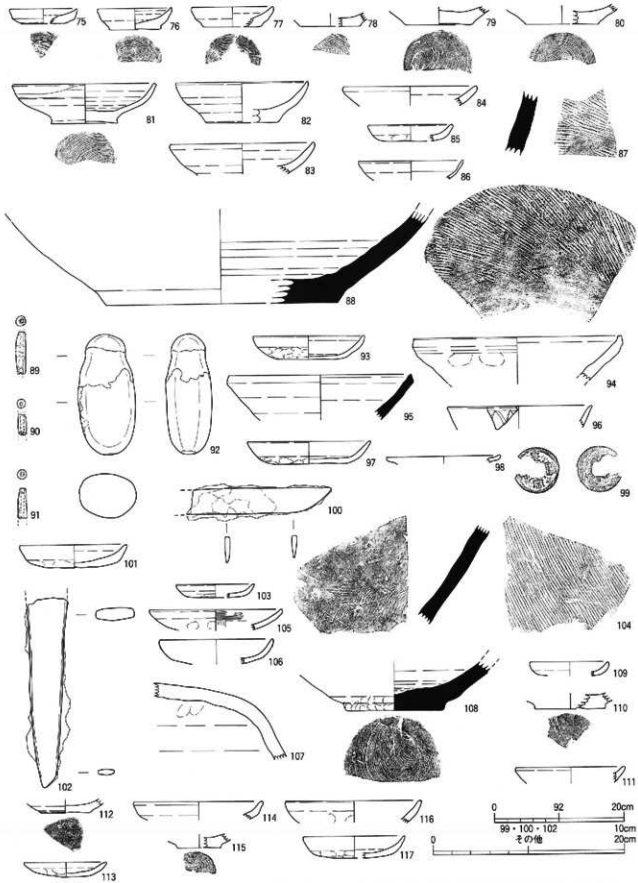
1～2 SD01、3～6 SD02、7 SK25、8 SK27、9 SK28、10 SK29、11～12 SK30、13 SK36、14 SK41、15 SK42、16～18 SK44、19～23 SK45、24 SK46、25 SK57、26・30～31 SK73、27～29・32～34 SK75、35 SK102

第19図　平成９年度調査区出土遺物(1)（9～17・33・34は１：２、32は１：３、35は１：６、その他は１：４）



36 SK103、37～40 SK112、41～44 SK121、45 SK128、46 SK136、47～48 SK138、49～50 SK151、51 SK152、52～53 SK157、54～55 SK159、56 SK161、57 SK163・SK185、58 SK165、59 SK167、60 SK168、61 SK169、62 SK170、63 SK180、64 SK181、65 SK184、66～74 SK185

第20図　平成９年度調査区出土遺物(2)（40・46・48・74は１：２、その他は１：４）



75～92 SK187、93～94 SK199、95 SK201、96 SK202、97～100 SK204、101～102 SK207、103 SK208、104 SK209、105 SK215、106 SK216、107 SK217、108 SK219 or SD04、109 P9、110 P96、111 P366、112 P369、113 P374、114～115 P431、116 P446、117 P672

第21図　平成９年度調査区出土遺物(3)（99・100・102は１：２、92は１：６、その他は１：４）

2．平成10年度調査

平成10年度調査は2-A～2-C地区が該当する。表土機械掘削は、平成９年度調査と並行して行われた。平成８・９年度調査での所見を基に実施されたわけだが、平成８・９年度調査区は遺構面が単層であったため、平成10年度調査区の表土機械掘削はその延長上で行われた。その後、調査が開始され、遺構面の精査が行われた時点で、平成10年度調査区の遺構面が２面あること、表土機械掘削により上層包含層・上層地山（下層包含層）が削平されていたことが判明した。

本遺跡は旧神通川（井出川）沿いの微高地上に形成されており、東側・西側の旧地形は緩やかに下る。後述するように東側部分（3-B地区）では、遺構面が複数存在する形跡は認められなかった。また、中央部（平成８・９・11～13年度調査区）は若干の高まり部分に相当し、本来は上下２面の遺構面が存在した可能性もあるが、発掘調査以前の段階ですでに削平されている可能性が高い。（小黒）

(1) 2-A地区

ア．検出遺構の概要（第22、24図・写真図版20～23）

遺構面は単層で、平成８・９年度調査と同様の黄褐色砂質土地山である。遺構は調査区南側（2-D区側）に偏って存在し、一部洪水氾濫による撹乱を受けるが溝４条、土坑９基、ピット69基が確認されている。以下、代表的なものについて概述する。

溝　SD01　幅0.5～1.3m、深さ0.2～0.5mの北西から南東方向へ直線的に伸びる溝で、SD02よりも新しく、B区全層交差点北側北半SD21（出土遺物なし、時期不明）と同一遺構である。区画溝と考えられ、この溝を隔てて北側は遺構の存在が希薄であるが、南側（2-D区）は遺構が密に所在している。確認面は削平されている。覆土は一様にしまりがあり上部は土層、下部は砂層である。覆土上層は水田耕作土（床土）と同質の灰褐色砂質土で、下層の黄褐色土層には酸化鉄を含む。出土遺物には珠洲（第24図１～５、写真図版23）・中世土師器・鉄滓などがあり、概ね中世前半に属する。

SD02　幅0.5m、深さ15cm程度の浅く直線的に続く溝で、確認面は削平されている。覆土は暗黄褐色砂質土である。SD01と直交し、時期はSD01よりも古いが、出土遺物がないため詳細な時期特定は難しい。区画溝と考えられる。

SD03　幅0.6～0.8m、深さ５cm程度の浅い溝で、SD04よりも新しい。確認面はすでに削平されている。覆土は水田耕作土（床土）と同質の灰褐色砂質土である。

SD04　幅0.2～0.3m、深さ10～15cmの直線的に続く溝で、SD03よりも古い。確認面はすでに削平されている。覆土は暗褐色砂質土で炭化物を含む。一部SD03により不明瞭となる。

土坑　SK01　長軸0.8m、短軸0.68m、深さ0.08mの楕円形土坑である。確認面は既に削平されており、覆土は灰褐色である。

SK02　長軸2.13m、短軸1.0m、深さ0.25mの楕円形土坑である。確認面はすでに削平されている。覆土は一様にしまりがあり、灰褐色土をベースに黄褐色土が混じる。出土遺物には珠洲・中世土師器などがあるが、いずれも小片であり、詳細な時期特定は難しい。平面形や埋土の状況から、土壙墓と推定される。

SK03　長軸0.85m、短軸0.55m、深さ0.25mの楕円形土坑である。確認面はすでに削平されている。覆土は灰褐色である。

SK04　一辺0.68m、深さ0.28mの方形土坑である。確認面はすでに削平されている。覆土は灰褐色。

SK07　長軸0.94m、短軸0.83m、深さ0.2mの円形土坑である。確認面はすでに削平されている。覆土は灰褐色でレンズ状堆積である。

SK08　長軸0.96m、短軸0.50m、深さ0.08mの楕円形土坑である。確認面はすでに削平されている。覆土は茶褐色土で水平堆積である。

イ．小結

2-A地区に営まれた遺構群は、長辺を平成８・９年度調査B区金屋交差点北側に隣接するため、相互につながるものがあり、時期も同時期と考えられる。隣接する2-C・D地区には下層遺構が所在するが、2-A・B地区は平成８・９年度調査区と同様単層で、認められなかった。

遺物はSD01とSK02からほぼ同時期に属する珠洲・中世土師器が出土しているが、周辺の遺構覆土からの混入の可能性が高い。周囲の状況から当該地区の遺構は2-C・D地区上層遺構と同時期に属すると考えられる。　（近藤）

(2) 2-B地区

ア．検出遺構の概要（第22、24図・写真図版20～23）

2-A地区と同様に黄褐色砂質土地山上に構築された遺構群である。洪水氾濫による撹乱により遺構面自体が削平を受けており、確認された遺構は土坑３基、ピット３基のみである。

土坑　SK01　長軸1.16m、短軸0.82m、深さ0.16mの楕円形土坑である。確認面はすでに削平されている。覆土は灰褐色である。

SK02　長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.5mの円形土坑である。確認面はすでに削平されているが、断面形は擂鉢型を呈し、覆土は茶褐色砂質土でレンズ状堆積である。出土遺物はない。

SK03　長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.3mの楕円形土坑である。確認面はすでに削平されている。覆土は灰褐色砂質土である。出土遺物には珠洲（第24図７、写真図版23）・14世紀代の中世土師器小片（第24図６、写真図版23）・鉄滓がある。

イ．小結

2-B地区は平成10年度調査の他調査区と比較すると極端に遺構数が少ない地区である。さらに遺構内から時期を特定できる遺物がほとんど出土しないため、時期確定は難しい。周囲の遺構所在状況からみると2-A地区の区画溝により集落主体部から区画外となった部分と考えられる。　（近藤）

(3) 2-C地区（上層）

ア．検出遺構の概要（第23図・写真図版20～23）

後述する2-D地区と同様、下層地山（黄褐色砂質土）上に暗褐灰色土が最大20cm堆積した後に構築された遺構群である。

以下では、調査区壁面の土層断面で把握することが可能で、上層遺構であることが確実な溝（SD01・02）について概要を記載する。

SD01　調査区壁面で幅約1.1m、深さ約0.5mで、直線的（N-57°-W）に続く。断面は半円形で、覆土は暗色系である。断面観察から、何度か掘りさらえられたことがわかる。出土遺物には9世紀代の須恵器杯蓋（写真図版23、10）があるが周囲からの混入と考えられる。SD01は、既報告（富山市教育委員会1999）の「B区金屋線交差点北側北半」で確認されたSD14と同一の溝である。SD14からは12世紀前後の土師質土器（椀・皿）が出土している。ただし、上層遺構であることを考慮するなら、これらの遺物がSD14に伴うとは考えにくい。周辺の遺構覆土からの混入遺物と推定される。

SD02　調査区壁面で幅約2.5m、深さ約0.6mである。断面は逆台形～半円形である。覆土は暗色系で、断面観察から何度か掘りさらえられたことがわかる。覆土からは、珠洲・八尾・中世土師器が出土し

た（写真図版23）。時期を特定できるだけの破片は少ないが、概ね中世前期に属すると思われる。大部分が覆土上部から出土しており、遺物の年代は遺構の構築時期を直接的に示すものではない。上層遺構であることを重視すると、これらの遺物は周辺の遺構覆土からの混入品の可能性もある。SD02は既報告の「B区金屋線交差点北側北半」・「C区」で確認されたSD16と同一の溝である。SD16から遺物は出土していないが同調査区SD14を切って構築されている。

イ．小結

以上、概観したように、上層遺構からは確実に遺構に伴うと考えられる遺物はなく、周辺の遺構覆土からの混入品と思われるものが多い。時期を特定できる遺物も少ないが、それらは概ね中世前期に属する。後述する2-D区では上層遺構に井戸があり、使用時期をある程度限定できる。そのため、下層遺構との間の年代的な関係にもアプローチが可能である。その所見を重視すると、2-C区の上層遺構も、中世前期に遡る可能性を完全に否定することはできないものの、中世後期に下る可能性が高いのではないだろうか。（小黒）

(4) 2-C地区（下層）

ア．検出遺構の概要（第23、25図・写真図版20～23）

黄褐色砂質土上に構築された遺構群で、掘立柱建物７棟、土坑８基、溝３条、ピット76基が確認された。前述の通り、表土機械掘削により削平されているので、確認された遺構のなかには本来は上層遺構として把握されるべきものが含まれている可能性もある。また、遺構自体が上面を削平されている可能性もある。以下、代表的なものについて概述する。

掘立柱建物　SB01　P78・84・96・97・99からなる桁行２間(4.8m)×梁行１間(2.9m)の側柱建物である。主軸はN-45°-E、桁側の柱間は2.8・2.0mである。柱痕から柱は直径15～20cmと推定される。時期は不明である。

SB02　P02～05・11～14からなる桁行２間(2.7m)×梁行１間(1.9m)の側柱建物である。２本の独立棟持柱をもつ。主軸はN-38°-Eで、柱痕から柱は直径10～15cm程度と推定される。時期は不明である。

SB03　P102・106・111からなる桁行２間(3.6m)×梁行１間(2.2m)の側柱建物である。主軸はN-35°-W、桁側の柱間は1.8mである。柱痕から柱は直径15～20cmと推定される。時期は不明である。

SB04　P38・114・122からなる2.3m四方の側柱建物である。主軸はN-0°-Eで、柱痕から柱は直径15cm程度と推定される。時期は不明である。

SB05　P16・37・113・121からなる桁行１間(4.1m)×梁行１間(2.8m)の側柱建物である。主軸はN-28°-Eで、柱痕から柱は直径10～15cm程度と推定される。時期は不明である。

SB06　P39・115・118・119・123からなる桁行３間(3.0m)×梁行１間(2.2m)の側柱建物である。桁側の柱間は1.0～1.1mである。主軸はN-13°-Wで、柱痕から柱は直径15cm程度と推定される。時期は不明である。

SB07　P43・44・46・48・50からなる桁行２間(2.6m)×梁行２間(1.9m)の側柱建物である。主軸はN-38°-Eで、柱痕から柱は直径15cm程度と推定される。時期は不明である。

土坑　SK01　長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.4mの楕円形土坑である。平面形や埋土の状況から、土壙墓の可能性が高い。

SK02　長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.3mの楕円形土坑である。平面形や埋土の状況から、土壙墓の可能性が高い。

SK05　長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.4mの楕円形土坑である。平面形や埋土の状況から、土壙墓の可能性が高い。上記遺構の埋土に関して自然科学的分析は行っていないが、他年度の調査時にリン分析を行った結果、土壙墓の可能性が高いと判断されたものと様相が類似している。長軸方向は概ね東北東－西南西に定まっており、一定の基準があったことが予想される。なお、いずれからも遺物は出土していない。

SK07　長軸2.1m、短軸0.55m、深さ0.3mの長方形土坑である。平面形や土層の堆積状態から、組合式箱形木棺直葬墓と推定される。南東側の短側壁以外は断面箱形になっているのに対し、当該部はやや緩やかに成形されている。土層断面観察の結果、墓壙掘削後、底面に6cm弱の置き土を施して木棺を据える面を整えた後、墓壙の幅1杯の幅43cm、厚さ4cmの底板を敷き、その上に長側板を据え置いたことが明らかになった。長側板の厚さは5cm程度と推定され、墓壙長側壁との間に生じた隙間には埋土を充填していた。完成した木棺内部の幅は30cm強と推定される。墓壙底面の傾斜や土層断面から、箱形木棺は長さ1.7m程度と推定されるので、成人を伸展葬で埋葬することがぎりぎり可能な木棺であったことがわかる。覆土には土師器片や炭化物、鉄滓が数点混入していたものの、埋葬時期を直接的に示すものではない。遺骸や木棺の腐朽に伴い、墓壙が埋没した後、噴砂に切られていたので、噴砂を生じさせた大規模地震が発生する以前の墓であることは確実である。

イ．小結

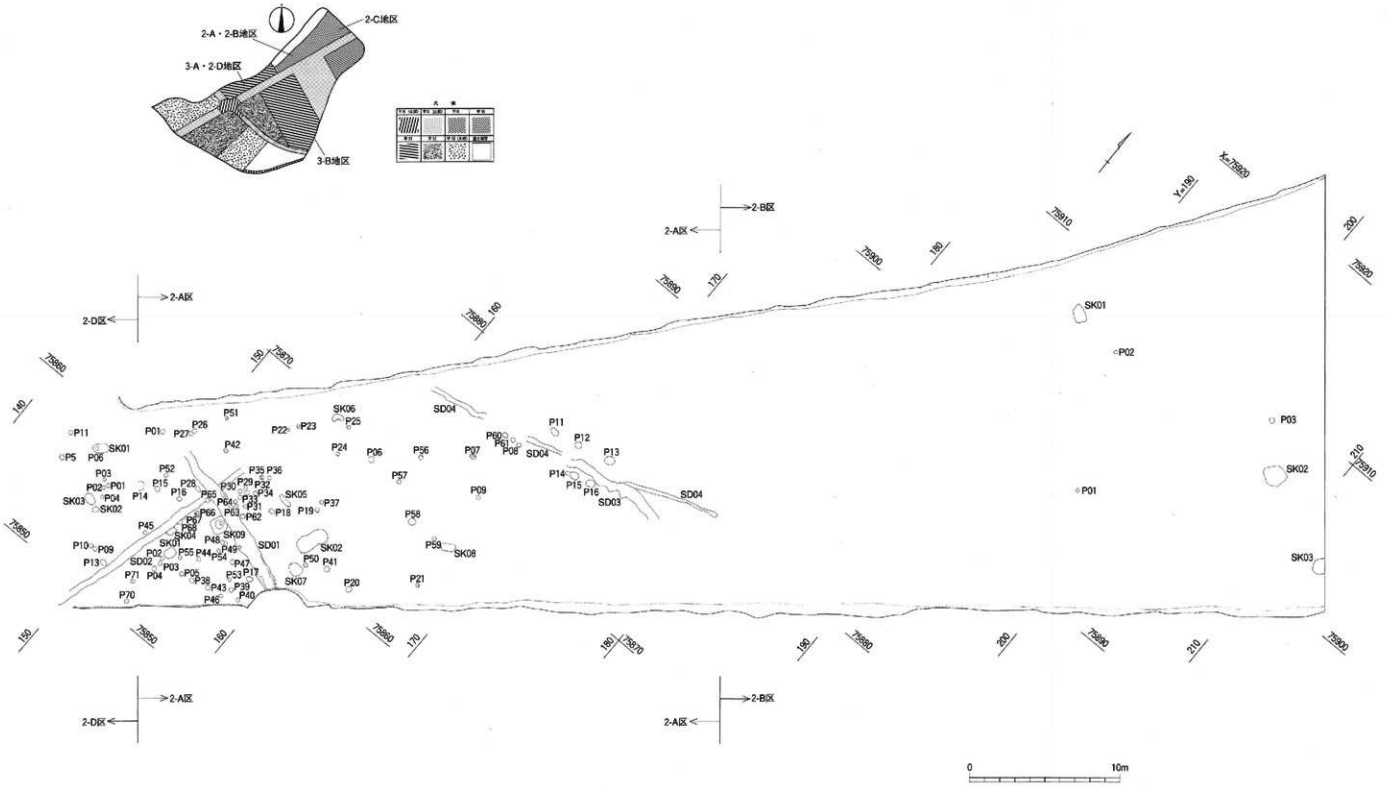
2-C地区下層に営まれた遺構群からはほとんど遺物が出土せず、またわずかに出土した土器片も小片のために時期を特定することは難しい。ただ、土壙墓が営まれていることなどから、後述する2-D地区と遺構の形成年代が類似している可能性もある。木棺墓は平成13年度調査区（次年度報告予定）で若干確認されているものの、木遺跡では少数例である。木棺墓は土壙墓群の周縁部に分布する傾向にあり、埋葬時期が判明する例はないが、両者が同時期の埋葬であれば、墓制の違いが何を意味するのかが問題となる。（小黒）

(5) 2-A・B・C地区まとめ

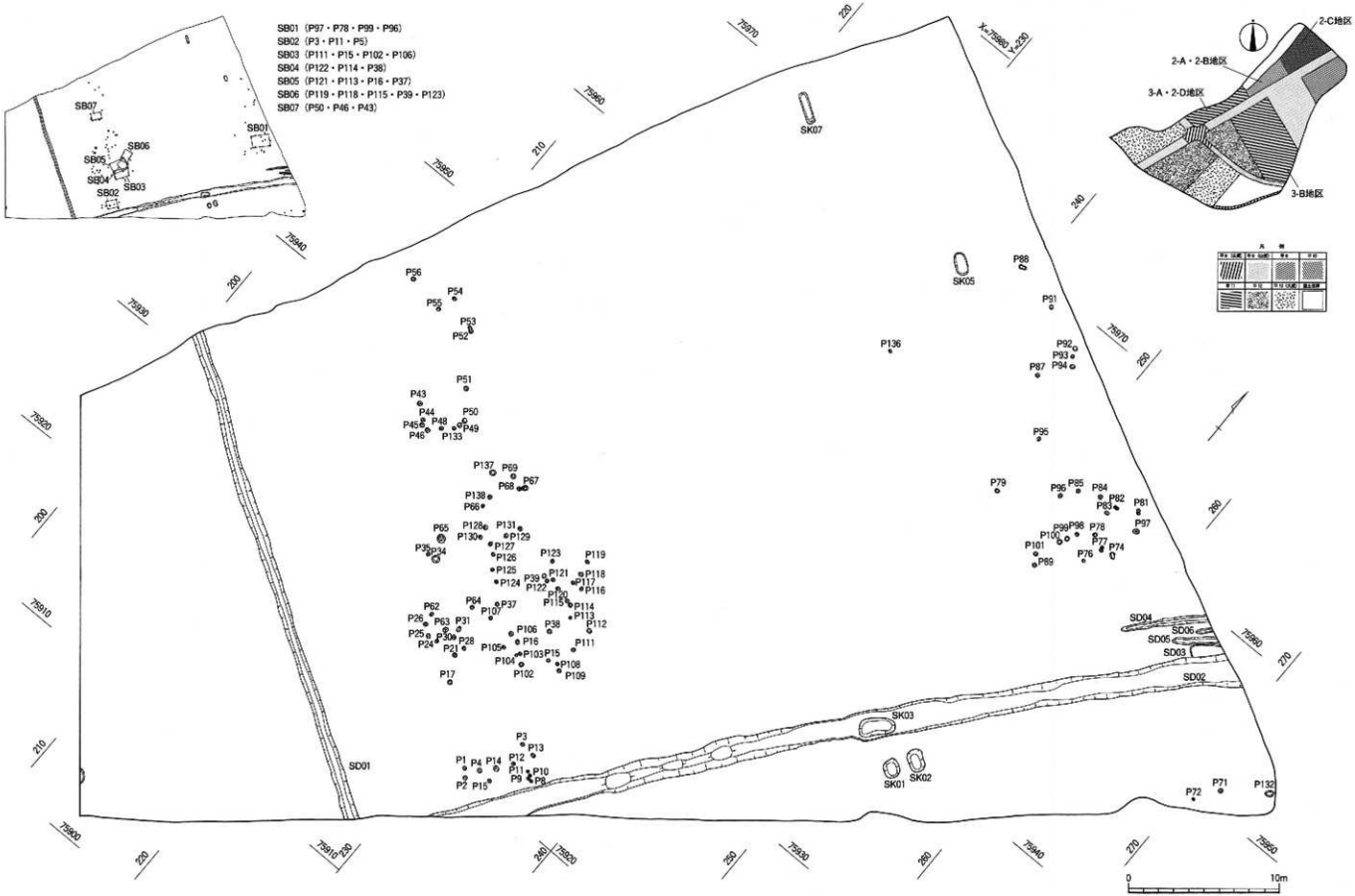
平成10年度調査A・B・C地区の所在遺構には、区画溝4条、掘立柱建物7棟、土坑16基があるが、他調査区と遺構所在数を比較すると大幅に少ないと言わざるを得ない。前述したとおり表土機械掘削によって上層包含層・上層地山が削平を受けたことも要因の一つであるが、排出土中に遺物が出土していないこと、B～C地区にかけて微谷地形となることから、現表土が堆積する以前に洪水・井田川の氾濫等により前代に遺構面が消失していた可能性が高い。

本調査区の下層遺構群（2-A、2-B、2-C）の構築年代を検討すると、隣接する平成8～9年度調査区の遺構はB区金屋線交差点北側北半が12世紀を中心とした中世前期、南半は14世紀代の構築と報告されている。当該区は交差点北側北半に隣接し、出土遺物には古代・中世前期のものも散見されるが、2-A地区SK03の床面直上から14世紀代の中世土師器が出土しており、遺構大半の帰属年代は交差点北側南半及び2-D区の中世後期である可能性が高い。

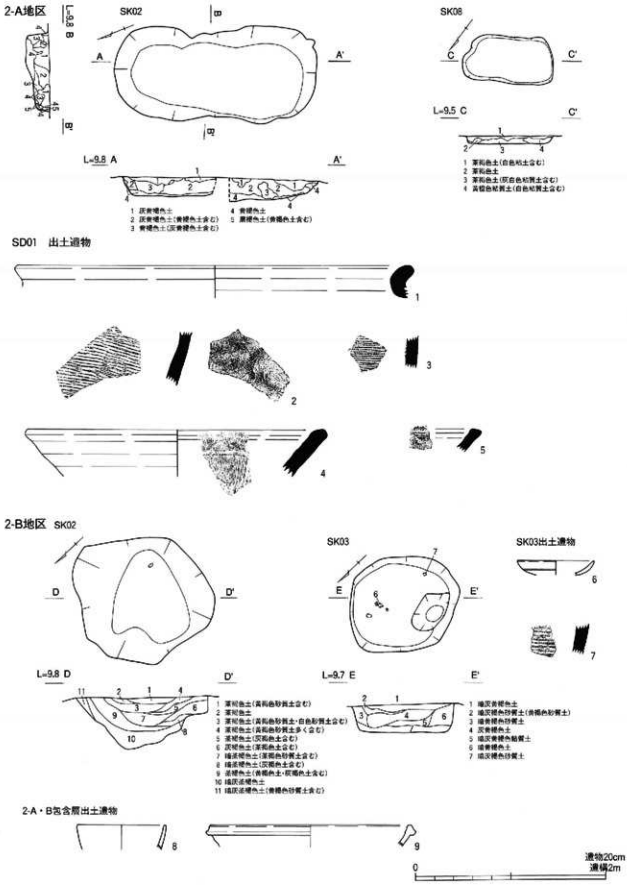
確認された土坑16基のうち、土壙墓と推定されるものが4基、木棺墓と推定されるものが1基ある。当遺跡の土坑は墓壙として群をなす傾向が指摘されているが、今回の調査区では点在している。確認面が削平を受けているため、深いもののみが残存していたとも考えられるが、2-C地区SK03のように2-C地区SD02の埋没後に構築されたものもあり、当該区に作られた土坑は構築時期に幅があるため群をなさなかったと考えられる。（近藤）



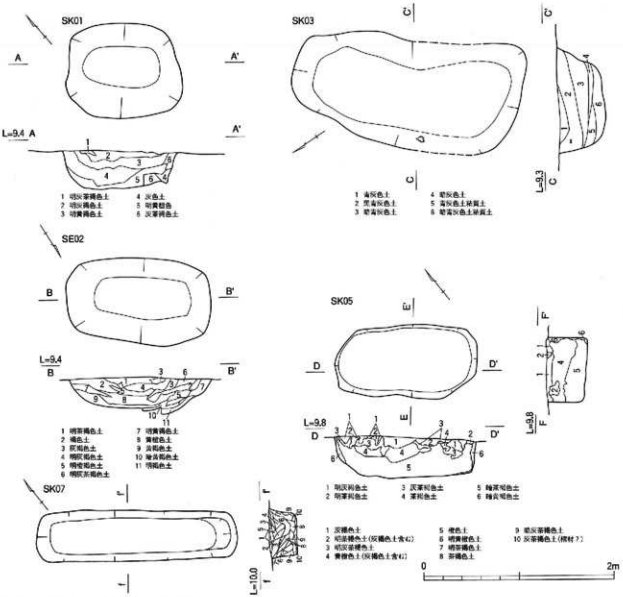
第22図　2-A地区・2-B地区　遺構配置図（1：250）



第23図　2-C地区　遺構配置図（1：250）



第24図　2-A・B地区遺構・出土遺物実測図（遺構１：40、遺物１：４）



第25図　2-C地区土坑実測図（1：40）

遺構番号	調査区	平面形分類	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	備考
SK01	A	C2	0.80	0.68	0.08	なし		
SK02	A	C1	2.13	1.03	0.25	中世土師器・珠洲	中世	土壙墓
SK03	A	C2	0.85	0.55	0.25	なし		
SK04	A	A2	0.68		0.28	なし		
SK05	A	C2	0.95	0.31	0.14	なし		
SK06	A	不整円形	0.75	0.32	0.18	なし		
SK07	A	D	0.94	0.83	0.20	なし		
SK08	A	C2	0.96	0.50	0.08	なし		
SK09	A	A2	1.00	1.00	0.70	なし		
SK01	B	C2	1.10	0.82	0.16	なし		
SK02	B	D	1.44	1.24	0.53	なし		
SK03	B	C2	1.14	1.00	0.30	中世土師器・鉄滓	中世	
SK01	C	C2	1.30	1.00	0.40	なし		土壙墓
SK02	C	C2	1.50	1.00	0.30	なし		土壙墓
SK05	C	C2	1.50	0.80	0.40	なし		土壙墓
SK07	C	B1	2.10	1.55	0.30	中世土師器、鉄滓、炭化物		木棺墓

第7表　2-A・B・C区土坑一覧

3．平成11年度調査

平成11年度は、幹線の西側と東側部分の発掘調査を実施した。西側を2-D・3-A地区、東側を3-B地区として設定した。地区ごとに概要を報告する。

(1) 金屋南遺跡2-D地区（上層）

ア．検出遺構の概要（第26図）

下層地山（黄褐色砂質土）上に暗褐灰色土が最大20cm堆積した後に構築された遺構群である。発掘調査区全域ではなく、限られた範囲に分布する。自然科学分析（147～155頁参照）の結果、当該地の土壌は洪水堆積により形成されたと推定されており、層厚に差がある暗褐灰色土も同様の性格をもつと考えられる。撹乱が多く、遺構面自体が削平を受けている。

井戸2基、溝8条、土坑12基、ピット10基が確認されている。以下、代表的なものについて概述する。

井戸　SE01（第28・29図　写真図版24）直径約4m、深さは2.3mの掘り方をもつ大型井戸である。黄褐色砂質土地山下の青灰色砂、さらに下の礫層まで掘削が及んでいる。上部の井戸側自体はすでに腐朽しているが、土層断面には確認面下0.5mから痕跡が確認できる。確認面下1.7mで、現存する井戸側を検出した。井戸側は内法で一辺0.6mの縦板組横桟隅柱留井戸である。掘り方底面に横桟を組んで井戸側を組み上げ、横桟は下から4段までが遺存していた。縦板は幅11cm、厚さ5mm程度のものを2～3重に重ねて補強していた。礫層内に曲物が水溜として埋置されていることを確認したが、湧水で壁面が崩壊する危険性があったため、取り上げを断念した。井戸側のうち、遺存度の高い代表的なものを第36図14･15～38図に示した。なお、井戸側材の樹種同定は行っていない。

井戸側内・掘り方内からは遺物が少量出土している。掘り方内埋土から出土した土師器皿は16世紀前後と思われ、その頃に利用されていた可能性がある。井戸を廃絶する際は、井戸側材を再利用することもなく、井戸側内に礫を投げ込み、意図的に埋め戻していた。重量53.1kgの大きな礫もあり、すり石として使用されていたものもある。投げ込まれた礫の総重量は244.31kgにも及ぶ。井戸廃絶後、確認面下最大0.8m程度まで廃棄土坑が掘削され、利用されていた。廃棄土坑が埋没する過程で、ピットも設けられていた。

SE02（第29・30図　写真図版24）直径2.8mで、掘り方内覆土からは土師器皿、珠洲（甕・片口鉢）、古瀬戸平碗が出土した。1.3m程度掘り下げると円形の井戸側プランが確認され、さらに掘り下げていくと石組井戸であることが判明した。井戸側の内法直径は0.5mである。井戸側は長楕円形の礫を基本的に小口積みで積上げて形成していた。掘り方壁面との距離があるところほど裏込めを幾重（3～4重）にも施している。井戸側内には井戸側材が崩落し、埋没していた。

掘り方内覆土からは珠洲片口鉢・甕、中世土師器が出土した。掘り方内埋土は下部に青灰色粘土を、上部に粘土ブロックを含む暗褐色土を水平に叩き締めながら積上げられ、中からは土師器皿・珠洲甕が出土した。井戸側内出土珠洲片口鉢は14世紀後半、掘り方内覆土出土珠洲甕・片口鉢が13世紀末～14世紀初頭、古瀬戸平碗が14～15世紀、土師器皿が15世紀後半～16世紀代と推定できる。以上から、井戸は14世紀後半～15世紀代には埋没が始まり16世紀までに完全に埋没したと考えられる。井戸埋没後、井戸側内を噴砂が走っており、16世紀以降の地震に由来するものであることがわかる。

溝　SD05　幅5m、深さ1.3mの直線的に続く溝で、SD04よりも古い。覆土上層は水田耕作土（床土）と同質の灰褐色砂質土であり、水田形成時まで埋没しきらないでいたことがわかる。これは、上層面で確認された溝の大部分に当てはまる。断面観察からは、溝が機能するよう何度も掘り直されたこと

がわかる。覆土は一様にしまりがあり、上部が土層、下部は砂層である。砂層には酸化鉄が付着しているものもある。掘削時期を推定するのは難しいが、珠洲のほかにも覆土上部からは越中瀬戸・青磁・白磁などが出土しており、埋没は近世まで下ることがわかる。SD04からも越中瀬戸皿が出土している。

SD05は、既報告（富山市教育委員会1999）の「B区金屋線交差点北側」・「C区」で確認されたSD22と同一の溝である。SD22からも越中瀬戸や炉壁が出土し、SD05と遺物相が似ている。既報告SD16はSD22と連結する溝と捉えられており、これらの溝群は本遺跡でも最新段階（近世）まで利用されていた。

土坑　SK09　長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.2mの楕円形土坑である。出土遺物はなく、確認面はすでに削平されている。平面形や埋土の状況から、土壙墓と推定できる。埋土に関してリン分析などの自然科学的分析は行っていないが、他年度の調査時にリン分析を行った結果、土壙墓の可能性が高いと判断されたものと様相が類似している。

その他の土坑は、性格を推定するのが難しいが、SK03からは珠洲片口鉢・土師器皿・土錘・鉄滓が、SK04・06～08からは珠洲甕が出土している。SK03出土遺物は15世紀代と推定される。

イ．出土遺物の概要（第33～36図　写真図版26）

井戸（第33図）SE01　1～3は掘り方内覆土から出土した。1・3は古代の土師質土器であり、周辺の遺構覆土からの混入と考えられる。1は内外面とも、3は外面を赤色塗彩している。2は灯明皿として利用されていた。宮田編年（宮田1997）Ⅵ期と推定される。4は井戸側内覆土から出土した鋳造関連遺物である。炉壁に木炭・砂が融着しており、重量は68gである。14世紀後半～15世紀後半に行われた鉄・銅鋳造作業（3-B地区、89～98頁参照）に由来すると考えられる。5は掘り方内埋土出土中世土師器であり、井戸の構築時期を推定する上で基準となる。宮田編年Ⅴ期と推定される。本井戸は16世紀前後に構築・利用され、16世紀代のうちに埋没した。

SE02　6～11は掘り方内覆土から出土した。6・7・9は中世土師器皿で、いずれも宮田編年Ⅴ～Ⅵ期と推定される。8・11は珠洲である。8の甕および11の片口鉢は吉岡編年（吉岡1994）Ⅳ1期と推定できる。10は炉壁片である。12～17は井戸側内覆土から出土した。12・13・17は珠洲片口鉢で、12は吉岡編年Ⅳ2期と推定される。14・15は叩き石である。16は中世土師器皿で、18は掘り方内埋土から出土した珠洲甕である。

溝　SD02（第34図1～5）　1は瀬戸美濃、2は青磁碗である。外面には鎬蓮弁文が施されている。3は珠洲壺の口縁部で、吉岡編年Ⅳ1期頃と推定される。4・5は伊万里染付である。4は砂目積みで、図示していないが底面の蛇の目釉剥ぎ部分には「二　六十之三」かと思われる墨書がある。1～3は周辺の遺構覆土からの混入と考えられる。

SD04（第34図6）　吉岡編年Ⅴ期と推定される珠洲片口鉢である。

SD05（第34図7～24）　7～11は珠洲である。7の甕は吉岡編年Ⅳ1期、9の片口鉢は吉岡編年Ⅲ期、10の片口鉢は同Ⅳ2期頃と考えられる。12は越中瀬戸灰釉丸皿、13は瀬戸美濃鉄釉碗、14は古瀬戸瓶類、15は不明陶器である。16～21・23はいずれも非ロクロ成形の中世土師器である。概ね、宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定される。22は瓦質土器で、口縁部下の2条の突線間に施されたスタンプ文は、富山県域では舟橋村仏生寺城跡（舟橋村教育委員会2001）SD08出土品にやや類似している。24は不明鉄製品である（163～165頁参照）。

SD06（第34図25～31）　25は唐津大甕である。26は不明磁器で、近代以降のものと思われる。28は珠洲片口鉢で、吉岡編年Ⅳ1期と思われる。30は瀬戸美濃鉄釉丸皿で、断面には熱を受けた痕跡がある。

29・31は越中瀬戸皿である。

SD12（第35図1～16、第38図12） 第35図1・2は古代のものと推定される平瓦で、内面には布目圧痕が残る。隣接する3-A・3-B区には古代の遺構が多く分布するので、混入品と考えられる。3は10～11世紀頃と思われる土師器坏である。4は石錘（重さ120g）、5は茶臼で、石材は安山岩系のものを用いている。6は越中瀬戸鉄釉甕である。7・9～11・21は唐津で、10は近代にくだると思われる。8・12は越中瀬戸である。13～15は伊万里、16は青磁である。第38図9は子供用の下駄である。指頭圧痕から、右足用と推定される。樹種同定は行っていない。

土坑（第35図）SK03 17は古岡編年Ⅴ期の珠洲片口鉢、18～21は非ロクロ成形の中世土師器である。概ね宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる。

SK08 22は非ロクロ成形の中世土師器皿で、宮田編年Ⅳ期と思われる。

ピット P48（第35図23） 非ロクロ成形の中世土師器皿である。

P203（第35図24） SK64出土破片と接合した。古岡編年Ⅲ期と推定される珠洲片口鉢である。

地山直上（第35図25・26、第36図1～5） 第35図25は古岡編年Ⅳ$_2$期と推定される珠洲片口鉢、26は珠洲壺と思われる。第36図1は古岡編年Ⅲ期と思われる珠洲片口鉢、3は同Ⅳ$_1$期と思われる珠洲壺である。4は青磁碗、5は宮田編年Ⅳ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器皿である。

遺物包含層（第36図6・7） 6は宮田編年Ⅳ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器皿である。7は青磁である。

排土・撹乱（第36図8～13） 8は排土から出土した古岡編年Ⅳ$_1$期の珠洲甕である。9は青磁碗、10・12は越中瀬戸皿、11は越前と思われる片口鉢である。

ウ．小結

2-D区上層に営まれた遺構群は、前代の混入遺物を含みつつも、概ね14～16世紀代にかけて利用されたと推定される。一部の溝は近世～近代にかけて利用されたと考えられる。

SD06・12が最新段階の遺構となる。一応、遺構と把握してはいるが、近代段階の撹乱的な性格をもつものである可能性も考えられる。上層地山面は撹乱が多く、地山面自体が削平されている可能性がある。（小黒）

(2) 金屋南遺跡2-D地区（下層）

ア．検出遺構の概要（第27図　写真図版25）

黄褐色砂質土上に構築された遺構群で、発掘調査区全域に分布する。掘立柱建物3基、土坑130基、溝7条、ピット123基が確認された。以下、代表的なものについて概述する。

掘立柱建物 SB01（第31図） P17～22からなる桁行2間（3.8m）×梁行1間（2m）の側柱建物である。主軸はN-78°-E、桁側の柱間は1.7・2.1mである。柱痕から柱は直径15～25cmと推定される。時期は不明である。

SB02（第31図） P49・64・66からなる桁行1間（3.8m）×梁行1間（1.9m）の側柱建物である。主軸はN-23°-Eで、柱痕から柱は直径20cm程度と推定される。時期は不明である。

SB03（第31図） 柱穴が1つ後世の土坑により破壊されているが、P122～126からなる桁行2間（3.4～3.6m）×梁行1間（1.5m）の側柱建物である。西辺が若干長く、主軸はN-23°-W、桁側の柱間は1.6・1.8mである。柱痕から柱は直径10～12cmと推定される。使用時期を推定することはできないが、一部の柱穴が土坑群により破壊されているので、土坑群が営まれる以前の遺構であることは確実である。

SB04（第31図） 柱穴が2つ後世の土坑により破壊されているが、P127～129・131からなる桁行2間（2.8m）×梁行1間（1.3m）の側柱建物で、辺の向きが方位に平行する。桁側の柱間は1.0・1.7mである。柱痕から柱は直径13～18cmと推定される。使用時期を推定することはできないが、一部の柱穴が土坑群により破壊されているので、土坑群が営まれる以前の遺構であることは確実である。

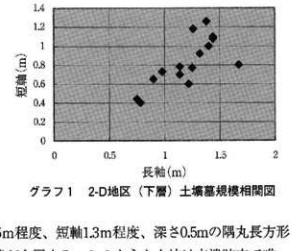
土坑　SK39　長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.3の楕円形土坑である。平面形や埋土の状況から、土壙墓の可能性もある。同様に、SK40～43・49・61・76～78・81・86・89・105・124・127も土壙墓と考えられる。長軸方向は概ね南北・東西の2方向に限定され、一定の基準があったことが予想される。

SK127から土師器皿・古銭・鉄片が、SK89から珠洲片口鉢・土師器皿・鉄片が、SK77・105から土師器皿が、SK49から土師器皿・鉄片が、SK43・40から鉄片が出土した。いずれも小片で上層から出土することが多いことから、副葬品ではなく、埋葬の際の混入品と考えられ、埋葬時期を推定することは難しい。これら以外からは遺物が出土していない。SK124は埋葬後に噴砂に切られ、SK105は噴砂を切って構築されている。噴砂との重複関係から、SK124は16世紀以前、SK105は16世紀以降の埋葬と推定できる。なお、上記遺構の埋土に関して自然科学的分析は行っていないが、他年度の調査時にリン分析を行った結果、土壙墓の可能性が高いと判断されたものと様相が類似している。

	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形
SK39	1.14	0.78	0.32	楕円形
SK40	0.75	0.44	0.13	楕円形
SK41	1.38	1.26	0.41	円形
SK42	1.22	0.6	0.33	長楕円形
SK43	1.26	1.18	0.39	楕円形
SK49	1.32	0.92	0.53	楕円形
SK61	0.78	0.4	0.2	楕円形
SK76	1.67	0.8	0.5	長楕円形
SK77	1.25	0.77	0.77	長方形
SK78	1.14	0.7	0.18	長方形
SK81	0.9	0.65	0.3	楕円形
SK86	1.4	1	0.5	楕円形
SK105	0.98	0.73	0.43	楕円形
SK124	1.44	1.1	0.72	楕円形
SK127	1.44	1.08	0.45	楕円形

第8表　2-D地区（下層）土壙墓規模一覧

SK48　長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.25mの円形土坑である。覆土はレンズ状に堆積するが、底面・覆土中層には炭化物・焼土を多く含む厚さ5～10cmの層が認められた。遺構の性格を特定するのは困難だが、明瞭な炭化物層が認められる土坑は当地区では唯一である。詳細な時期比定はできないが、底面からは珠洲甕が出土している。このほか、古銭や鉄片も出土した。



グラフ1　2-D地区（下層）土壙墓規模相関図

SK69　重複が激しいために詳細は不明だが、長軸2.5m程度、短軸1.3m程度、深さ0.5mの隅丸長方形土坑と推定される。他と異なり、深さ2cm程度の壁溝が全周する。このような土坑は本遺跡内で唯一の例である。遺物が出土せず、土坑の性格は推定できない。

SK96　長軸2.2m、短軸2m、深さ0.45mの円形土坑である。地山ブロックを含む土が自然堆積している。中世土師器に混じって、丁寧に作られた土馬の頭部が出土している。土馬は、その形態的特徴から製作時期が古代に遡ると考えられる。

溝　SD01～04　幅30～50cm、深さ5～10cmの溝で、直角に曲がる。溝が途切れているのは、地山面が削平されていることに起因すると考えられる。覆土は暗茶褐色系で、SB02の桁方向に平行する。SD01～04はSB02の周囲に巡らした区画溝であった可能性が高い。区画溝との位置関係や両建物の規模が酷似していることを重視すると、SB02が先行して築かれ、廃絶後にSB01が建替えられた可能性もある。

イ．出土遺物の概要（第39・40図　写真図版26）

土壙墓（第39図）SK49・77・105から土器が出土しており、埋葬時期を想定する上で参考になる。

SK49　1・2は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ期と推定される。

SK77　15は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定される。

SK105　32・33は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ期と推定される。

以上の検討から、土壙墓は概ね15世紀代に構築された可能性を想定することができるのではなかろうか。噴砂を切って構築されたSK105から出土した土師器は、埋葬時の混入遺物と考えられる。次年度報告予定の4-B地区では15世紀代の火葬場遺構が確認されており、15世紀代に葬制の変化が生じた可能性がある。

土坑（第39・40図）SK50　第39図・3は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ期と推定される。

SK56　第39図・4～7は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定される。

SK62　第39図・8・9は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定される。

SK65　第39図・10～12は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定される。

SK66　第39図・13・14は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定される。

SK77　第39図・15は非ロクロ成形の中世土師器で、宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定される。

SK79　第39図・16～19は非ロクロ成形の中世土師器で、17以外は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と推定されるものの、17は古相を示し、同編年Ⅲ～Ⅳ期と思われる。

SK84　第39図・20は宮田編年Ⅲ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器、21は吉岡編年Ⅲ期と推定される珠洲片口鉢である。

SK94　第39図・22～24は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK96　第39図・25・26は宮田編年Ⅴ期と推定される非ロクロ成形の中世土師器、27は土馬である。胎土は緻密で、焼成も良好である。轡など馬具が丁寧に表現されており、優品といえる。中世後期にこのような形態的特徴の土馬は存在せず、周辺の古代の遺構覆土からの混入品と考えられる。古代の馬具にあってもこのような丁寧なつくりのものは珍しく、古墳時代の馬形埴輪を髣髴とさせる。

SK99　第39図・28は吉岡編年Ⅲ期頃と思われる珠洲片口鉢である。

SK101　第39図・29は珠洲壺底部である。

SK103　第39図・30・31は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK105　第39図・32・33は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK111　第39図・34～36は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK112　第39図・37は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK123　第39図・38は青磁碗である。

SK129　第39図・39は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK130　第39図・40～44は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK137　第40図・1～3は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK144　第40図・4は宮田編年Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

SK145　第40図・5～7は非ロクロ成形の中世土師器で、5・6は宮田編年Ⅲ～Ⅳ期、7は同Ⅴ期と推定される。

SK148　第40図・8は宮田編年Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。灯明皿として利用されていた。

SK182　第40図・9は宮田編年Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。

P202　第40図・10は吉岡編年Ⅲ期頃と思われる珠洲甕である。
P208　第40図・11は宮田編年Ⅴ期と思われる非ロクロ成形の中世土師器である。
地山直上（第40図）非ロクロ成形の中世土師器で、12・13は宮田編年Ⅴ期、14・15は同Ⅲ～Ⅳ期と推定される。
遺物包含層（上層地山）（第40図）16～21は非ロクロ成形の中世土師器である。16～18・20は宮田編年Ⅳ～Ⅴ期、19・21は同Ⅴ期と思われる。22は珠洲片口鉢、23は伊万里碗である。23は、現地調査中は遺物包含層（上層地山中）として把握していたが、遺物の年代観を考慮すると、本来は上層地山直上遺物として把握すべきものであった可能性もある。

ウ．小結

2-D地区下層に営まれた遺構群は、概ね14～15世紀代と考えられる。上限としては13世紀後半代の遺構があるものの、主体的ではない。土壙墓と推定されるものが多く、いわゆる墓域を想起させるものがある。下層遺構群の覆土に注目すると、暗褐色系と褐灰色系に二大別できるので、覆土の色調差は遺構の時期差に起因している可能性もある。

下層遺構群は、上層遺構群と比較的近似した時期に営まれた可能性がある。下層地山上の遺物包含層、すなわち上層地山中に含まれる遺物も上層遺構群から出土する遺物と近似した年代を示す。地山の成因として、洪水堆積が想定されている（147～155頁参照）ことを考慮すると、上層地山中に含まれる遺物は下層遺構群の覆土に含まれていたものである可能性もあり、人々は洪水の影響を受けつつもこの地で継続して生活していたと考えられる。そのなかでも、遺物相全体としてみれば、下層遺構群が古く、上層遺構群が新しいことは明らかである。

出土遺物を2-D地区全体としてみると、非ロクロ成形の中世土師器が圧倒的に多い。その形状・つくりも類似したものが多い。在地産以外の陶磁器をみると、下層遺構群では珠洲に限られるのが、上層遺構群では珠洲の他、青磁、古瀬戸、瀬戸美濃、唐津、伊万里が出土している。時期的な推移もあろうが、このような差が認められる。唐津・伊万里など近世遺物も含まれるようになる。　（小黒）

(3) 金屋南遺跡3-A地区

ア．検出遺構の概要（第27図　写真図版24・25）

2-D地区の下層地山（黄褐色砂質土）に対応し、遺構面自体が削平されている。調査区南西隅は、南西方向に約8°で傾斜している。井戸1基、溝27条、土坑51基、ピット29基が確認されている。以下、代表的なものについて概述する。

井戸　SE01（第32図・写真図版25）長軸4.2m、短軸4m、深さ2.7mの掘り方をもつ大型井戸である。黄褐色砂質土地山下の青灰色砂、さらに下の礫層まで掘削が及んでいる。確認面下2.4～2.5mで、礫層に到達する。掘り方底面は礫層上面に相当する。上部の井戸側自体はすでに腐朽しているが、土層断面には確認面下1mから痕跡が確認できる。確認面下1.8mで、現存する井戸側を確認した。井戸側は内法で一辺0.6mの縦板組横桟隅柱留井戸である。掘り方底面から、さらに水溜設置用の掘え方を掘削している。水溜設置後、掘り方底面から横桟・縦板を組んで井戸側を組み上げ、横桟は下から2段までが遺存していた。縦板は幅11cm、厚さ5mm程度のものを2～3重に重ねて補強していた。井戸側のうち、遺存度の高い代表的なものを第42～44図に示した。樹種同定は行っていない。

井戸側内・掘り方内からは遺物が少量出土している。掘り方内埋土から出土した土師器皿は16世紀前後と思われ、その頃に利用されていた可能性がある。井戸廃絶後、確認面下最大1m程度まで廃棄土坑が掘削され、利用されていた。

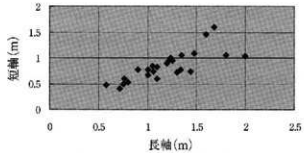
溝　SD02～20・22・29・30（第27図・写真図版24・25） 最大幅24～92cm（平均53cm）、深さ6～24cm（平均14cm）の溝である。覆土はSD29・30が暗褐色・暗灰褐色系である他は明褐色土であり、類似するものが多い。溝の間隔も類似するところが多い。遺物はわずかしか出土していない。遺構の形成時期を推定するのは難しいが、SD29や付近の地山直上から出土した須恵器坏身が参考になる。遺物から判断する限り、本溝群は9世紀後半頃の畑の畝間の溝群と考えられる。なお、覆土の微細構造軟X線観察（147～155頁参照）でも畝間の溝の可能性が追認されている。

土坑　SK01（第27図・写真図版24・25） 長軸2.1m、短軸1.8m、深さ0.3mの隅丸方形土坑である。確認面はすでに削平されている。性格不明だが、覆土からは砥石・黒鉛・炉壁の破片が出土していることは形成時期を推定する上で参考になる。3-B地区（89～98頁参照）で確認された鋳造関連遺構は14世紀後半～15世紀後半のものであり、本遺構は14世紀後半以降に下る可能性が高い。

SK02（第27図・写真図版24） 長軸1.6m、短軸1.46m、深さ0.44mの円形土坑である。確認面はすでに削平されている。平面形や埋土の状況から、土壙墓の可能性もある。同様に、SK03～05・07・09・16～20・23～25・27・29・33～35・114～117・119・121・125も土壙墓と推定できる。埋土に関してリン分析などの自然科学的分析は行っていないが、他年度の調査時にリン分析を行った結果、土壙墓の可能性が高いと判断されたものと様相が類似している。長軸方向は概ね南北・東西の2方向に限定され、一定の基準があったことが予想される。SK27から砥石片が、SK117から珠洲片口鉢片が、SK125から土師器皿が出土しており、これらの土坑群の形成時期を推定する上で参考になる。

遺構No.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形
SK02	1.6	1.46	0.44	円形
SK03	1.24	1	0.24	長方形
SK04	0.76	0.6	0.17	長方形
SK05	1.3	0.72	0.55	楕円形
SK07	1.1	0.6	0.15	楕円形
SK09	1.68	1.6	0.38	正方形
SK16	1.1	0.82	0.38	長方形
SK17	0.8	0.52	0.3	楕円形
SK18	不明	0.52	0.21	楕円形
SK19	0.9	0.78	0.25	長方形
SK20	1	0.78	0.31	長方形
SK23	1	0.66	0.21	長方形
SK24	0.58	0.48	0.2	長方形
SK25	1.22	0.94	0.5	楕円形
SK27	1.48	1.08	0.43	楕円形
SK29	1.35	1.05	0.45	楕円形
SK33	0.75	0.5	0.32	楕円形
SK34	1.25	0.95	不明	長方形
SK35	1.2	0.9	0.53	楕円形
SK114	1.05	0.84	0.32	楕円形
SK115	0.72	0.4	0.34	楕円形
SK116	2	1.04	0.28	楕円形
SK117	1.8	1.06	0.22	楕円形
SK119	1.31	0.78	0.43	楕円形
SK120	1.06	0.74	0.19	楕円形
SK121	1.44	0.74	0.44	楕円形
SK125	1.24	1	0.38	楕円形

第9表　3-A地区土壙墓規模一覧



グラフ2　3-A地区土壙墓規模相関図

イ．出土遺物の概要（第41～44図　写真図版27）

井戸　SE01（第41図1～8） 1～7は掘り方内覆土から出土した。1～5は非ロクロ成形の中世土師器皿である。いずれも宮田編年（宮田1997）Ⅳ～Ⅴ期頃と思われる。6は鋳造関連遺物で、外壁に木炭・砂が融着している。重量は385gである。7は鉄鎌である。X線写真観察は行っていないが、現状では目釘孔は認められない。重量は464gである。8は水溜据え方埋土上面から出土した非ロクロ成形の中世土師器皿である。宮田編年Ⅳ～Ⅴ期頃と思われる。

第42～44図には遺存状態の良い井戸側材を図示した。腐植したものもあるが、基本的には同様の形状に整えている。第44図の井戸側内出土木製品は、何かの底板と思われる。

遺物の出土状態から、第41図・8は井戸の構築時期を示唆する可能性が高い。土師器と鋳造関連遺物の年代観に大きな矛盾はなく、本井戸は15世紀代以降に構築・利用されていたと推定される。

土坑（第41図）SK01　9は砥石である。10は黒鉛で、重量は7gである。11は炉壁で、重量は35gである。

SK27　12は砥石である。

SK117　13は珠洲片口鉢である。吉岡編年（吉岡1994）Ⅳ期頃と思われる。

SK122　14は須恵器無台坏である。灰白色で、9世紀後半頃と思われる。

SK125　15は中世土師器皿である。

溝（第41図）SD29　16は須恵器坏である。9世紀後半頃と思われる。

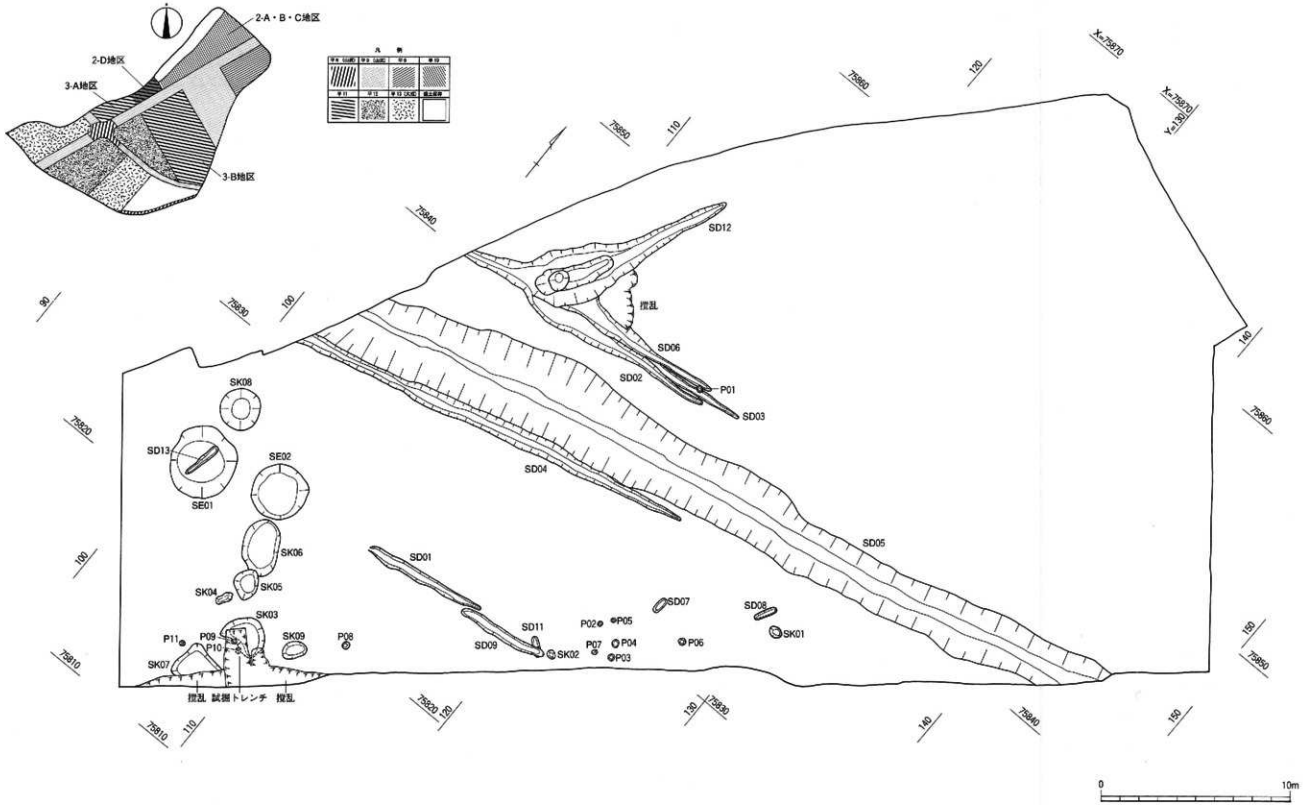
地山直上（第41図）17は八尾窯底部である。13世紀後半～14世紀前半と推定される。18は9世紀後半頃の須恵器坏である。

遺物包含層（第41図）19は珠洲甕、20は青磁、21・23は須恵器坏、22は土錘である。

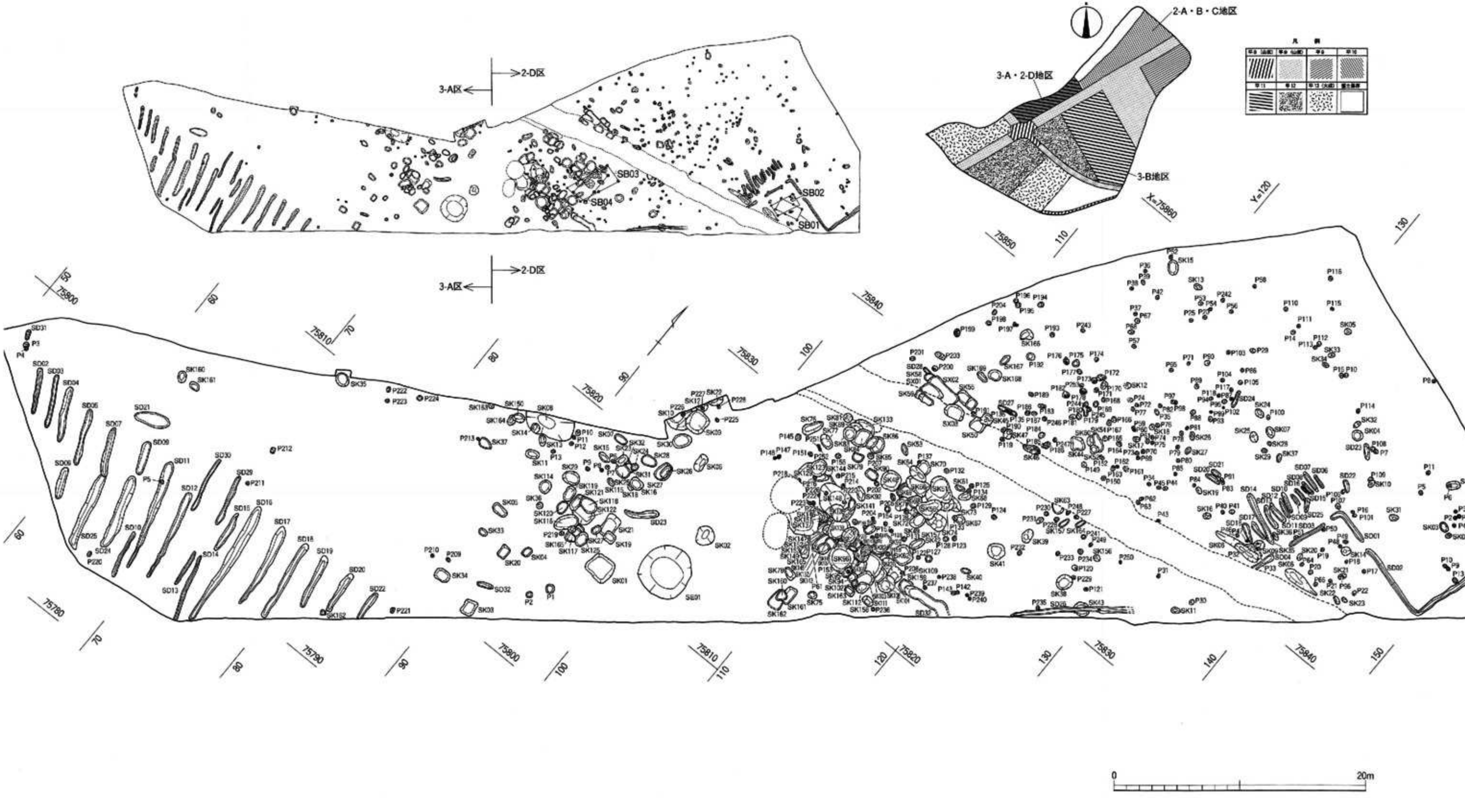
ウ．小結

3-A地区に営まれた遺構群は、概ね15～16世紀代と9世紀後半代に二大別される。古代の掘跡は隣接する3-B地区の他にも、平成8年度調査B区交差点地点（富山市教育委員会1999）や平成13年度調査B区（富山市教育委員会2003）でも確認されている。これらの地区では平安時代（9世紀後半～10世紀前半）の遺構が多く分布し、竪穴住居も確認されている。3-A地区の掘跡から出土した土器は少数だが、地山直上の遺物とあわせ、周辺地区の古代遺構の年代と整合的である。本地区の掘跡も、隣接地区の竪穴住居などと共に古代集落を構成していたと考えられる。

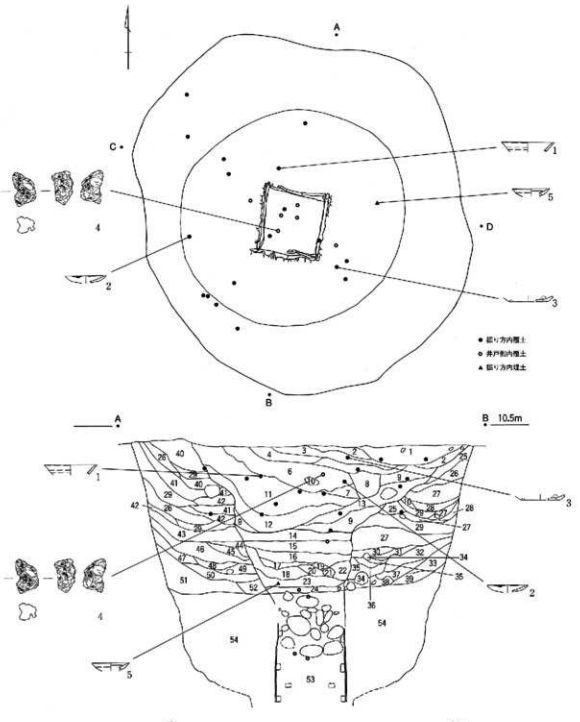
中世後期の遺構も認められるが、2-D地区に比べて遺構数・遺物量共に少ない。遺構の形成期間は類似するので、中世遺構群の性格は2-D地区区と同様、墓的なものと推定される。　（小黒）



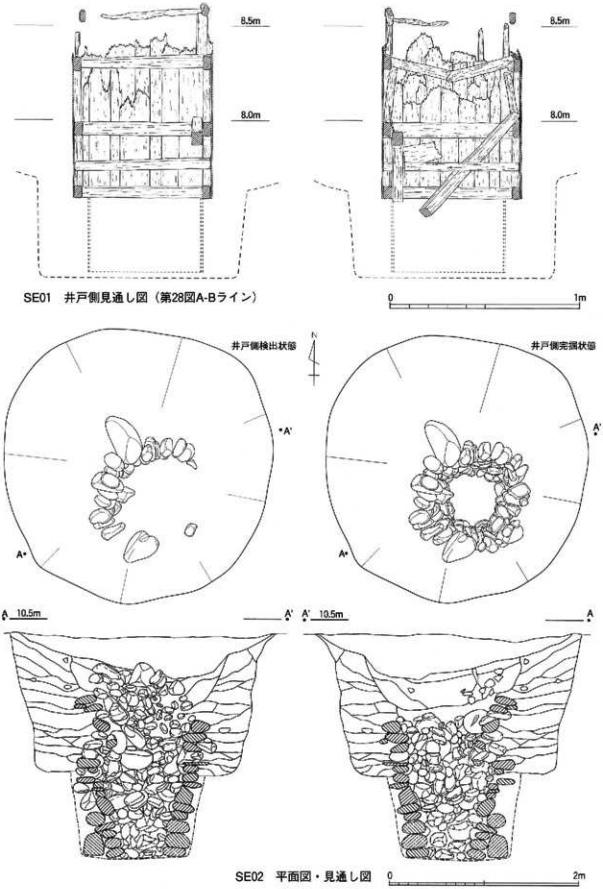
第26図　2-D地区上層　遺構配置図（1：200）



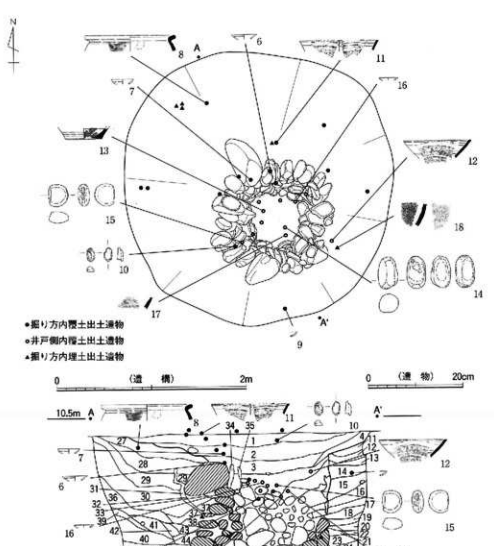
第27図　2-D地区下層・3-A地区　遺構配置図（1：300）



第28図　2-D地区上層SE01平面図・断面図（１：40）遺物番号は第33図と対応する。

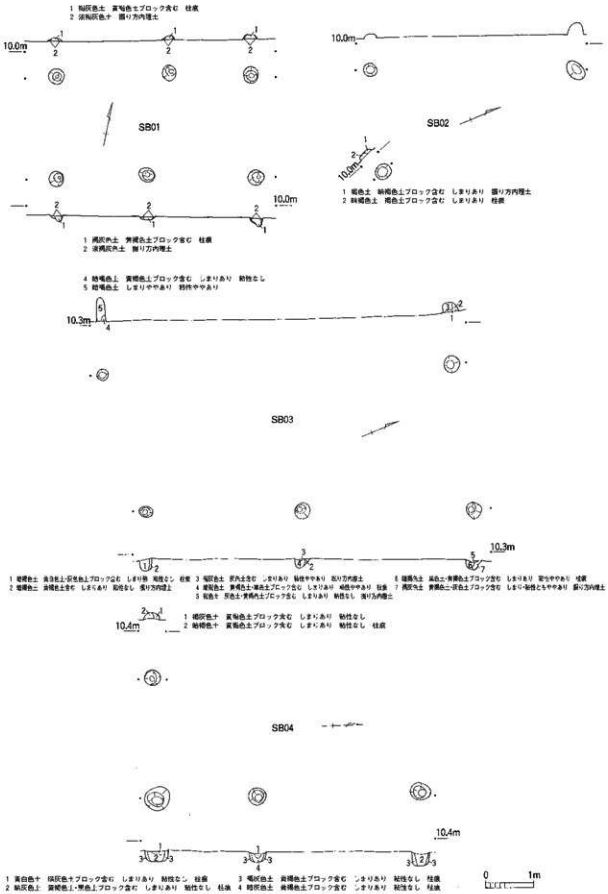


第29図　2-D地区上層SE01（1：20）・SE02（1：40）

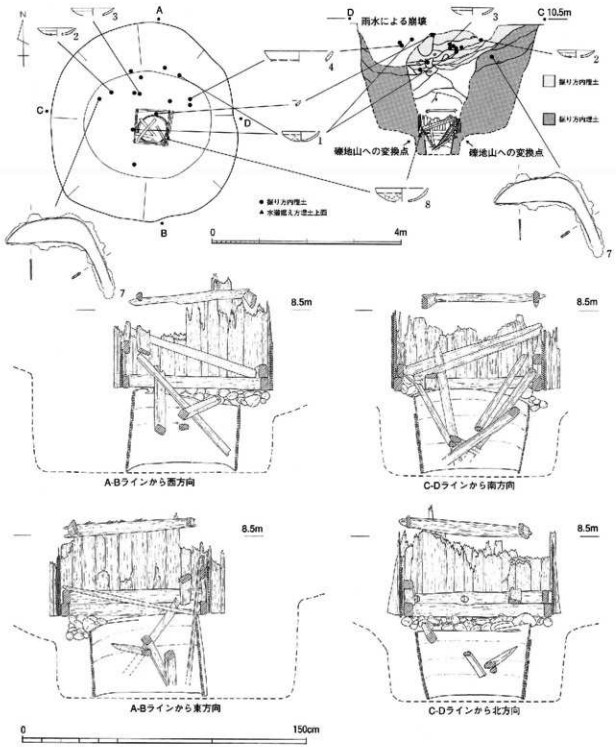


1	暗灰色土	灰色土ブロック含む	しまり強	粘性なし	掘り方内埋土	28	暗灰色土	灰色土・青褐色土ブロック含む	しまり強	粘性なし	掘り方内埋土
2	褐褐色土	灰色土・青褐色土ブロック含む	しまり強	粘性なし	掘り方内埋土	29	褐色土	灰色土・青色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
3	褐褐色土	青褐色土ブロック多め含む	しまりやや弱	粘性やや有り	井戸側内埋土	30	褐褐色土	灰色土・青色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
4	暗灰色土	灰色土ブロック含む	しまり強	粘性なし	掘り方内埋土	31	灰色砂	地砂	しまりなし		
5	暗灰色土	灰色土・青褐色土ブロック・青粘質含む	しまりあり	粘性なし	井戸側内埋土	32	灰色土ブロック	褐色土含む			
6	記号および暗色系灰色土ブロックなどよりまばらに含む		しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土	33	褐色土				
7	灰褐色土	青褐色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	井戸側内埋土	34	灰色砂	地砂	しまりなし		
8	褐色土	青褐色ブロック含む	しまりあり	粘性なし	井戸側内埋土	35	灰色砂	地砂	しまりなし		
9	褐色土		しまりあり	粘性なし	井戸側内埋土	36	褐色土	灰色土・黄白色ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
10	灰色砂	地砂	しまりなし			37	灰色土ブロック	暗褐色土・被覆粘質含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
11	暗褐色土	灰色土・黄白色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土	38	暗褐色土	灰色土・黄白色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
12	黄白色土ブロック	暗褐色土含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土	39	暗褐色土	灰色土・黄白色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
13	暗褐色土	灰色土ブロック・暗褐色土含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土	40	褐色土	灰色土・黄白色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
14	黄白色土ブロック	暗褐色土含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土	41	暗褐色土	灰色土・黄白色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土
15	暗褐色土	灰色土・黄白色土ブロック含む	しまりあり	粘性なし	掘り方内埋土	42	褐褐色土	灰色土ブロック含む	しまりやや弱い	粘性やや有り	
16	褐褐色土	黄褐色土ブロック含む			掘り方内埋土	43	暗灰色土	灰色土・灰色砂・酸化鉄含む	しまりやや弱い	粘性やや有り	
17	褐色土	黄褐色土・灰色土ブロック含む			掘り方内埋土	44	灰色土	灰色土ブロック含む	しまりやや弱い	粘性やや有り	
18	暗褐色土	灰褐色土ブロック含む			掘り方内埋土	45	灰褐色土	酸化鉄含む			
19	褐褐色土	黄褐色土ブロック含む			掘り方内埋土	46	褐灰色土	灰色土ブロック含む	しまりやや弱い	粘性やや有り	
20	褐色土	黄褐色土・灰色土ブロック含む			掘り方内埋土	47	暗灰色土	灰色土・灰色砂・酸化鉄含む	しまりやや弱い	粘性やや有り	
21	暗灰色土	黄褐色土ブロック含む			掘り方内埋土	48	暗灰色土	灰色土・灰色砂・酸化鉄含む	しまりやや弱い	粘性やや有り	
22	褐色土	黄褐色土ブロック含む				49	灰褐色土	酸化鉄含む			
23	褐色土	黄褐色土・灰色土ブロック含む			掘り方内埋土	50	暗灰色土	灰色土ブロック含む	しまりやや弱い	粘性やや有り	
24	灰色粘質土	酸化鉄含む			掘り方内埋土	51	茶褐色土	灰色土ブロック含む			
25	暗灰色土	黄褐色土ブロック含む			掘り方内埋土	52	灰褐色土	酸化鉄含む			
26	暗灰色粘質土	酸化鉄含む			掘り方内埋土	53	茶褐色土	灰色土ブロック含む			
27	褐褐色土	灰色土・灰褐色土ブロック含む	しまり強	粘性なし	掘り方内埋土	54	青灰色粘土				

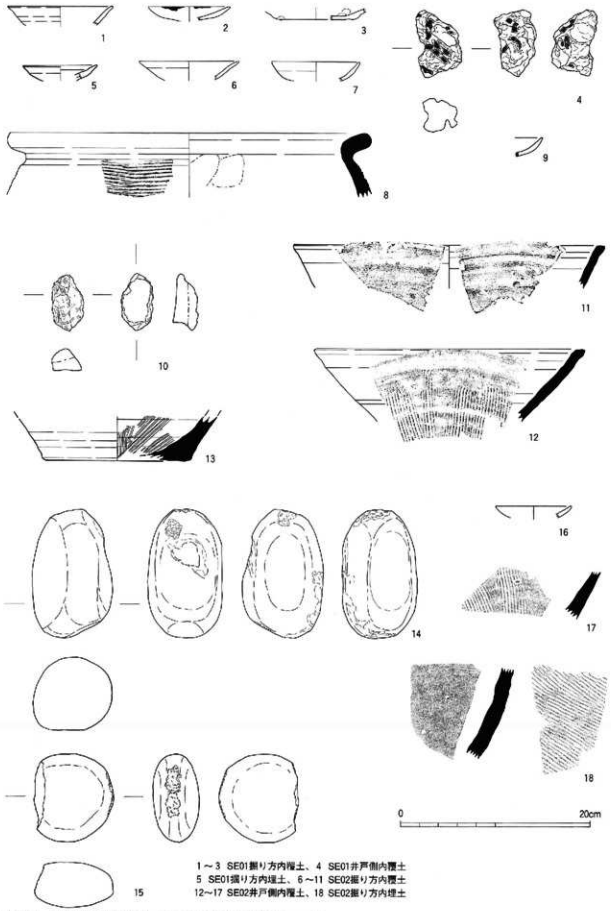
第30図　2-D地区上層SE02遺物出土状態・セクション図（1：40）遺物番号は第33図に対応する。



第31図　2-D地区下層SB03・04平面図、断面図（1：80）

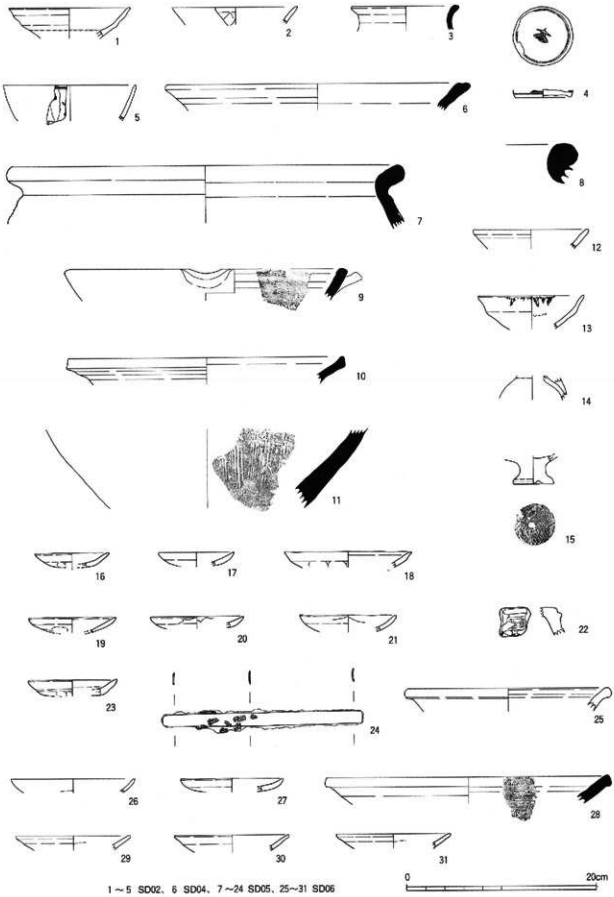


第32図　3-A地区SE01完掘状態（1：80）・井戸側見通し図（1：20）遺物番号は第41図に対応する。

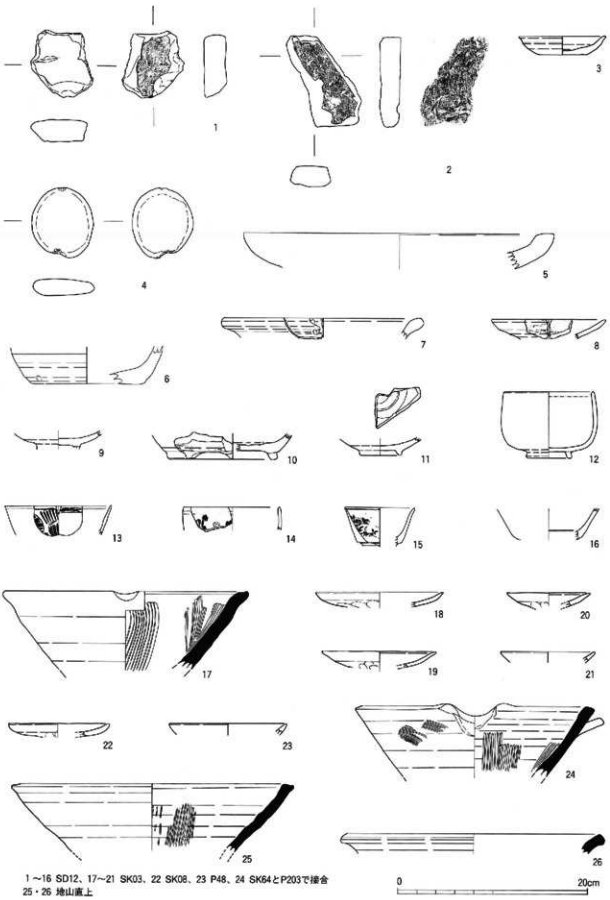


1～3 SE01掘り方内覆土、4 SE01井戸側内覆土
5 SE01掘り方内堆土、6～11 SE02掘り方内覆土
12～17 SE02井戸側内覆土、18 SE02掘り方内堆土

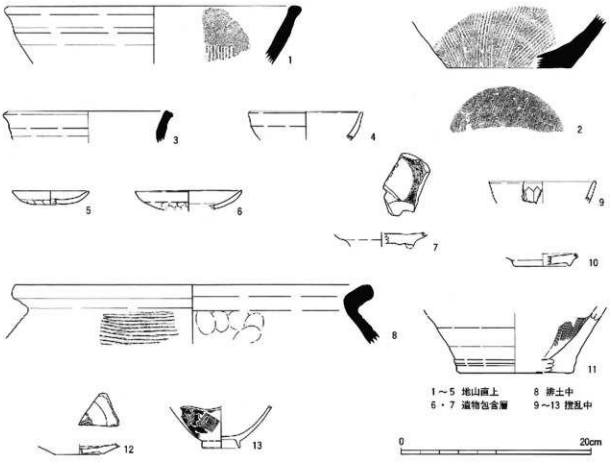
第33図 2-D地区上層SE01・SE02出土遺物実測図（1：4）

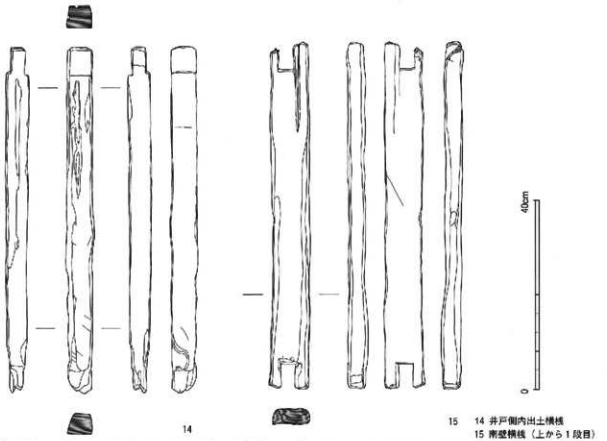


第34図　2-D地区上層遺構出土遺物実測図（1：4）

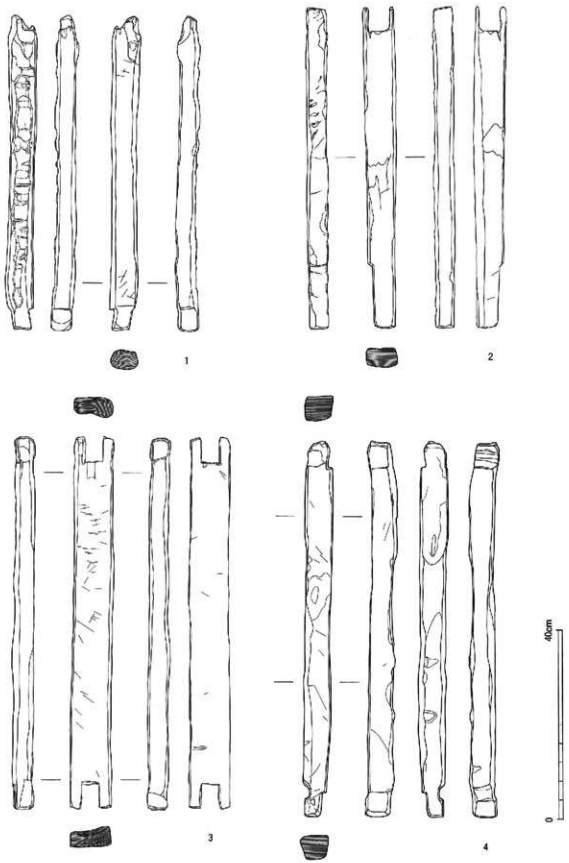


第35図　2-D地区上層遺構出土遺物実測図（1：4）



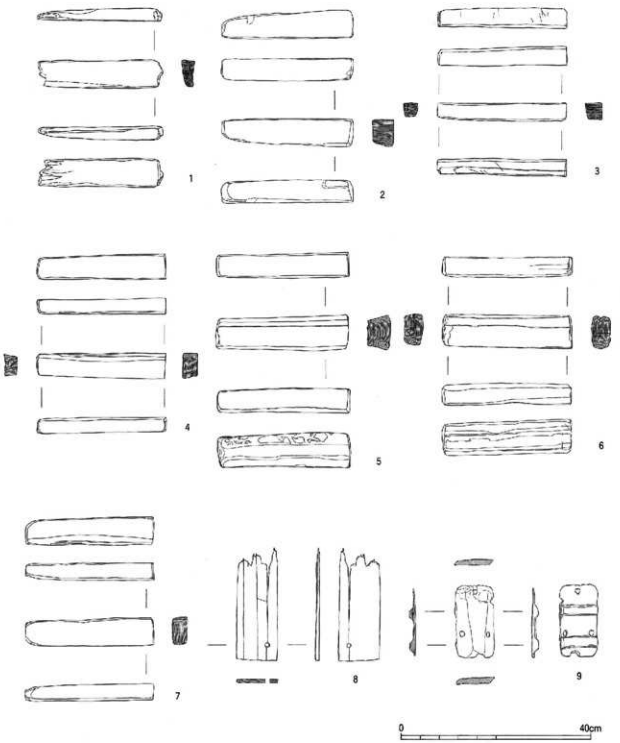


第36図　2-D地区上層出土遺物実測図（1～13）（1：4）・2-D地区上層SE01井戸側材実測図（14・15）（1：8）



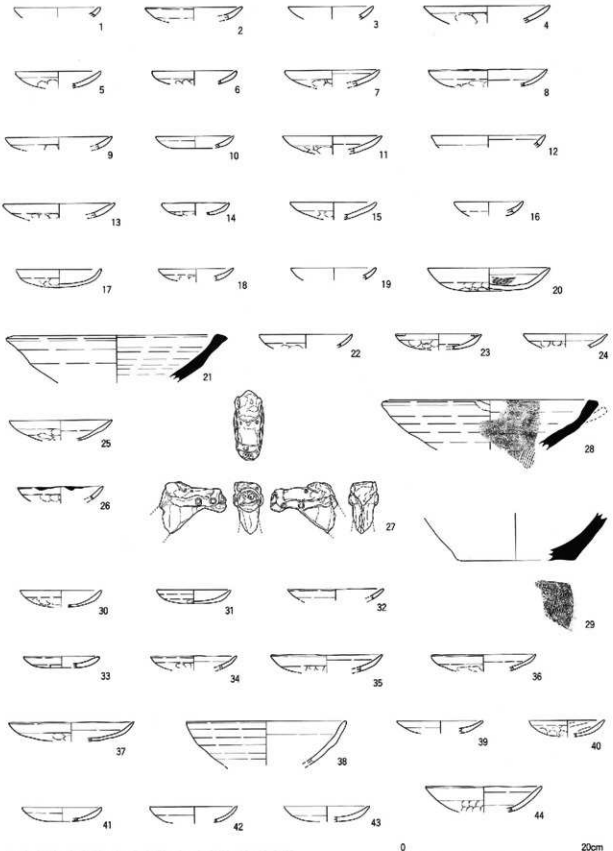
1 北壁横桟（上から2段目）、2 東壁横桟（上から2段目）、
3 南壁横桟（上から3段目）、4 西壁横桟（上から3段目）

第37図　2-D地区上層SE01井戸側材実測図（1：8）



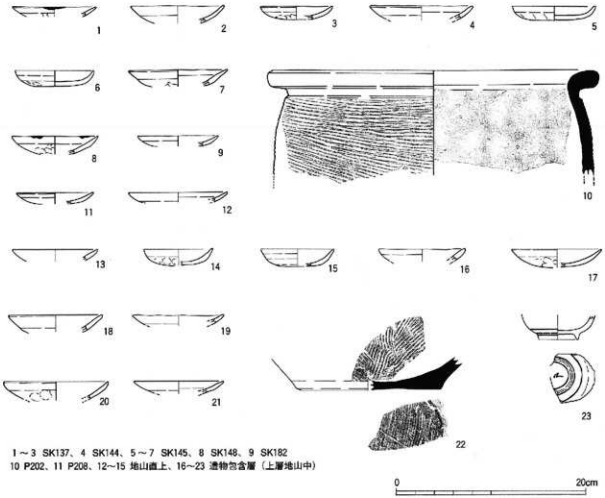
1 東北隅隅柱（上から1段目）、2 西北隅隅柱（上から2段目）
3 東北隅隅柱（上から2段目）、4 東南隅隅柱（上から2段目）
5 東南隅隅柱（上から3段目）、6 西南隅隅柱（上から3段目）
7 西北隅隅柱（上から3段目）、8 東南壁板（転用材）
9 SD12出土下駄

第38図　2-D地区上層SE01井戸側材（1～8）・SD12出土木製品実測図（1：8）



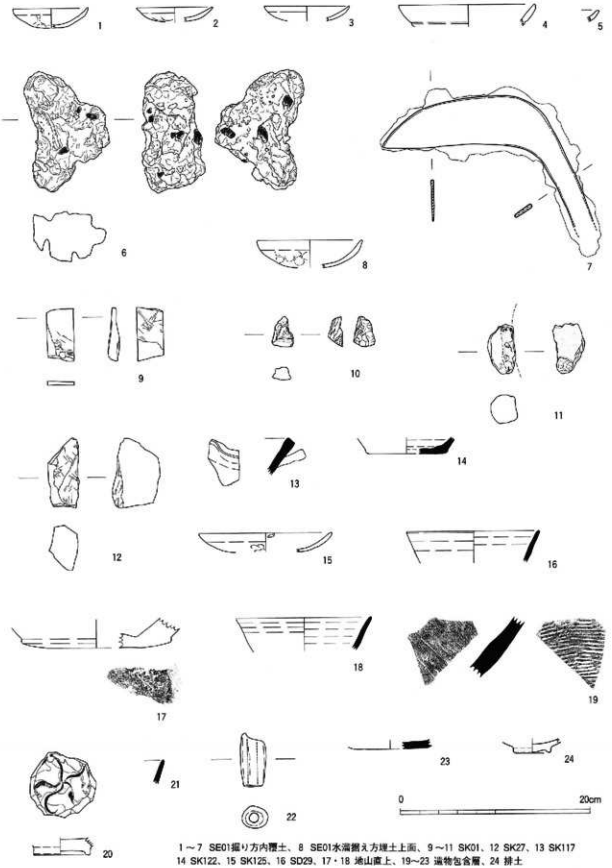
1・2 SK49、3 SK50、4～7 SK56、8・9 SK62、10～12 SK65
13・14 SK66、15 SK77、16～19 SK79、20・21 SK84、22～24 SK94
25～27 SK96、28 SK99、29 SK101、30・31 SK103、32・33 SK105、34～36 SK111、37 SK112、38 SK123、39 SK129、40～44 SK130

第39図　2-D地区下層土坑出土遺物実測図（1：4）



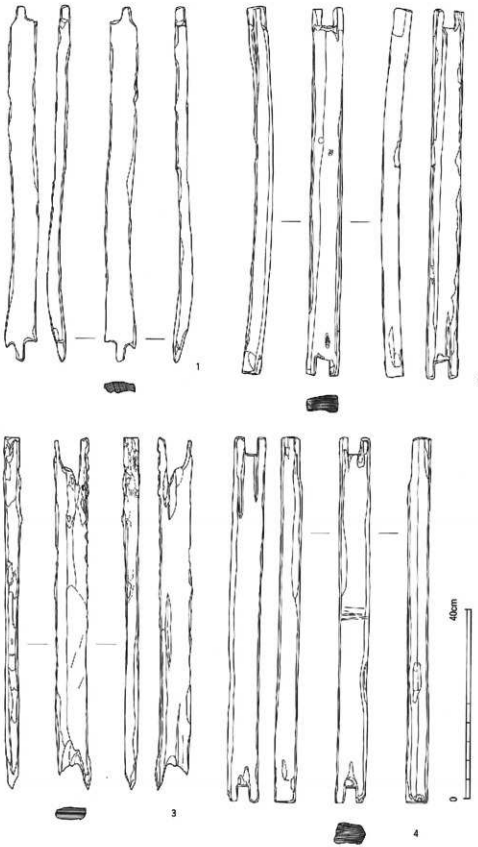
1～3 SK137、4 SK144、5～7 SK145、8 SK148、9 SK182
10 P202、11 P208、12～15 地山直上、16～23 遺物包含層（上層地山中）

第40図　2-D地区下層遺構出土遺物実測図（1：4）



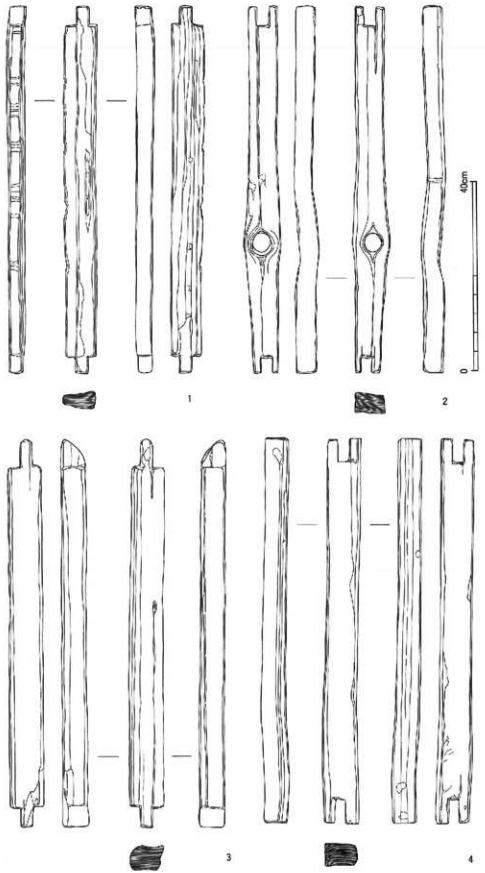
1～7 SE01掘り方内埋土、8 SE01水溜掘え方埋土上面、9～11 SK01、12 SK27、13 SK117
14 SK122、15 SK125、16 SD29、17・18 地山直上、19～23 遺物包含層、24 排土

第41図 3-A地区遺構出土遺物実測図（1：4）



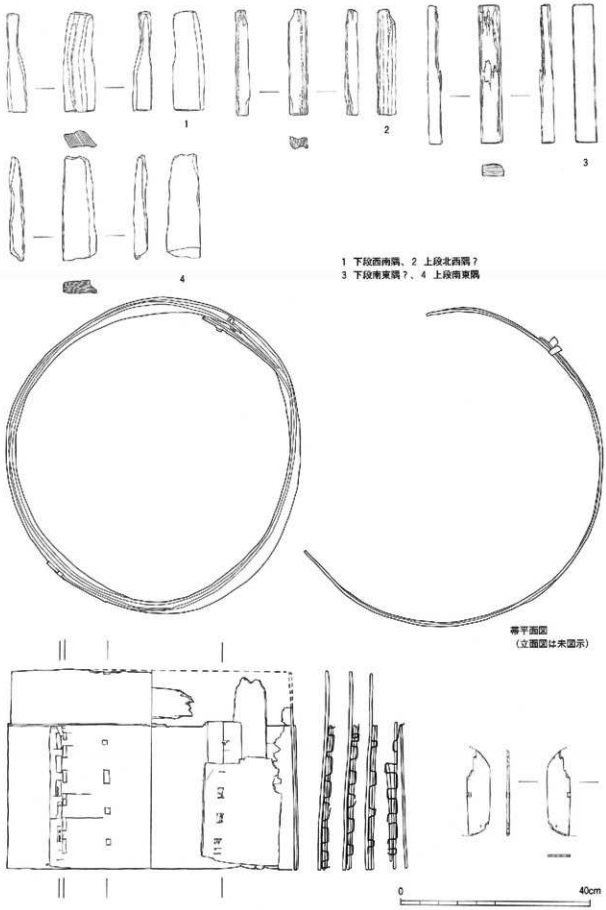
1 北側横桟（上から1段目）、2 西側横桟（上から1段目）
3 東側横桟（上から1段目）、4 南側横桟（上から2段目）

第42図　3-A地区SE01井戸側材(1)（1：8）



1 東側横桟（上から2段目）、2 北側横桟（上から2段目）、3 西側横桟（上から3段目）、4 南側横桟（上から3段目）

第43図　3-A地区SE01井戸側材(2)（1：8）



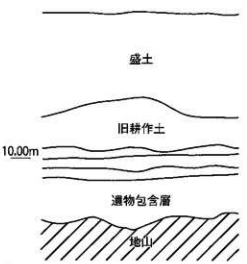
第44図　3-A地区SE01井戸側材(3)、隅柱、水溜、井戸側内出土木製品（1：8）

(4) 金屋南遺跡3-B地区

本地区では、東側で河川跡（幅10m以上。本地区では河川の西肩を検出）を検出し、西側は安定した地山が形成されている。その部分で中世の井戸８基、溝20条以上、土坑500基以上、ピット多数を検出した。

また、河川部分では、中世に鋳造が行われており、溶解炉1基、廃滓場（南北約15m、東西約34m）、鋳造土坑２基、礎石建物、井戸１基を検出した。

本地区の周辺はすでに道路工事や造成工事が行われており、旧地形などがわかりにくい。その中で層序を確認すると、旧耕作土が約30～45cm、その下に10～20cmの遺物包含層があり、遺構検出面に至る（第45図）〔層序は小林学芸員が確認〕。遺構検出面は南（標高約10.40m）から北（標高約10.10m）に傾斜しており、高低差は約30cmある。また、西から東にやや傾斜する。遺構検出面は北西部分が一部黄褐色土、それ以外は黄白色砂質土であり、遺構の肩部分は非常に崩れやすい状況であった。



第45図　3B地区　基本層序（1：20）

ア．検出遺構の概要

井戸　本地区では９基の井戸を検出した。河川跡部分で検出した１基（SE09）以外は、本地区の中南部の東西25m、南北11mの範囲に集中して作られる。すべて井戸側がある。（瑞沢）

SE01（写真図版33）　直径約3.5m、深さ約２mの掘方をもつ大型井戸である。黄白色砂質土地山下の灰色砂まで掘削が及んでいる。上部の井戸側自体はすでに腐朽しているが、土層断面には確認面下1.4mから痕跡が確認できる。確認面下2.4mで、現存する井戸側を確認した。確認された横桟も上から落下してきたものであり、原位置を留めていない。腐朽を免れたものがわずかに遺存した状況にある。遺存状態は悪いが、断面観察所見もあわせ、井戸側は内法で一辺0.9mの縦板組横桟隅柱留井戸と推定される。なお、水溜は確認されなかった。

掘方内覆土・井戸側内覆土・掘り方内埋土からは、多くの遺物が出土した。井戸側内覆土からは、井戸側材以外にも若干の木片が出土したが、遺存状態が悪く、製品か自然木かどうかは判断できない。掘り方内埋土から出土した中世土師器は宮田編年（宮田1997）Ⅳ～Ⅴ期と考えられるので、少なくとも15世紀代以降の構築であることは間違いない。（小黒）

SE02（第52図　写真図版30・33）　長軸5.1m、短軸4.2m、深さ2.5mの掘方をもつ井戸である。西方17mにSE01、東方に11mにSE03がある。井戸側は石組と木組で作られ、井戸検出面から約1.7m掘り下げると検出される。検出位置は堀方の中央ではなくて、北側に寄っている。石組は方形木組を囲むよう組まれる。石組は平面的には2列確認した。１列は木組に沿って組まれ、長軸約30cmの大型の石である。それらを囲むように長軸約20cmの小型の石が組まれる。木組に沿った石組は3段分を確認した。ただし、３段目が残るのは東部分のみである。

木組は一辺80cm四方の方形横板井籠組（宇野1989）の２重構造である。その内部には水溜として直径約40cmの曲物が設置される。内側の木組みは長さ約80cm、幅約30cm、厚さ約5.5cmの板材を方形に組んでいる。北側と南側の材は工字形で、東側と西側は凵形であり、それらを組合わせている。

外側の木組は長さ約83cm、幅約20cm、厚さ約1cmの板材を方形に組んでいる。板材は凵形でそれらを組合わせている。樹種はスギ科スギ属スギであった。

井戸の掘方からは珠洲・八尾・中世土師器・鉄製品・炉壁・石などが出土している。

SE03（第53・54図　写真図版31・33）長軸4.6m、短軸4.2m、深さ2.65mの堀方をもつ井戸である。本井戸の東方すぐにSE04とSE05がある。井戸側は石組と木組である。井戸検出面から約10cm掘り下げ石組を検出した。石組の直径は約90cmで、長軸30cmほどの細長の石を使用し、長軸を井戸の中央に向けて組まれる。石組は深さ1.5m分確認され、その下は木組があり縦板組隅柱横桟留である（宇野1989）。木組は深さ1.4m分確認された。横桟の間隔は約30cmである。その下にはさらに水溜として方形の木組が設置される。樹種は、ヒノキ科クロベ属クロベとヒノキ科アスナロ属である。

本井戸の構築手順は以下の通りである。長さ70cm、幅約30cm、厚さ1.5～2.0cmの板材を方形に組む。その外側には長さ約80cm、幅約５cm、厚さ5.5cmの角材を方形に組んでいる。木組の大きさは一辺約90cmである（**第54図・右下**）。それを囲むようにして隅柱を４本立て、それを横桟で結ぶ。隅柱には３ヵ所のほぞ穴があり、現状で３本分横桟が現存していた。さらに横桟の外側には縦板を立てる（**第54図・下**）。縦板は１点樹種同定しており、ヒノキ科アスナロ属である。

木組の周囲には隅柱の転用材と思われるほぞ穴のある材を置き、その上から石組の石を設置している。軟弱な埋土であるため、石を設置するための基盤を設置したと考えられる（**第54図上**）。

井戸の掘方や井戸内からは珠洲・中世土師器・八尾・瓦器・土錘・銭貨・鉄製品・炉壁・白色滓・緑色滓などが出土している。出土遺物から15世紀後半に構築されたと考えられる。

SE04（第55図　写真図版31・34）本井戸はSE05と切合い関係がある。SE04がSE05を切っているため、本井戸がSE05より新しい。SE04、SE05ともほとんど近世溝SD01に切られている。確認した面で直径約3.6m、深さ2.0m以上の掘方をもつ井戸である。井戸側は石組と木組で、井戸検出面から約１m掘り下げ石組を検出した。石組の直径は約2.5mで、長軸25cmほどの細長の石を使用し、長軸を井戸の中央に向けて組まれている。石組は深さ1m分確認した。石組は上部では1.2mで、石組の断面はすり鉢状になっており、本遺跡の石組み井戸の石組は他の井戸ではみられないタイプである。その下は木組があり、縦板組隅柱横桟留である（宇野1989）。木組は深さ約90cm分確認した。木組内には水溜として直径約65cmの桶が設置される。

木組は90cm四方の方形で、隅柱の断面は長方形で長さ90cm、幅約15cm、厚さ13cmである。横桟を設置するためのほぞ穴は2ヶ所ある。

本井戸の井戸側の構築手順は以下の通りである。まず、桶を設置し、それを囲むように木組を組む。木組の底部付近から、木組を囲むようにして石組が作られる。

井戸の掘方や井戸内から珠洲・中世土師器・八尾・古瀬戸・土錘・鉄製品・砥石・炉壁・黒鉛化木炭などが出土している。掘方内の出土遺物から15世紀後半に構築されたと考えられる。

SE05（第56図　写真図版31・34）本井戸はSE04と切りあっており、SE04より古い。本井戸の掘方は長円形で、長軸3.6m、短軸3.1m、深さ2.3mの井戸である。井戸側は石組と木組である。井戸検出面ですでに石組が検出される。石組は隅丸方形で一辺約１mである。長軸30cmほどの細長の石を使用し、長軸を井戸の中央に向けて組まれている。石組は深さ2.3m分確認し、石組の深さ1.7m地点から木組がある。

木組は２重構造で、内側の木組は2段に組まれ、１段目は長さ約80cm、幅約30cm、厚さ約４cmの板材で、２段目は長さ約80cm、幅約13cm、厚さ約４cmの板材である。外側の木組は内側木組の底部から約30cmのところから内側木組に沿うように設置される。板材は長さ約85cm、幅約25cm、厚さ約１cmである。その内には水溜として直径約45cmの桶が設置される。

石組はこの木組を囲むように構築され、石組を積上げる際に漆椀を逆さにした状態で埋め込んでい

る（写真図版34）。井戸を構築する際の祭祀行為と考えられる。

井戸の掘方からは須恵器・珠洲・中世土師器・漆器・炉壁などが出土している。出土遺物から15世紀後半に機築されたと考えられる。（堀沢）

SE06（第57図　写真図版35） 東西4.3m、南北4.5mの円形の掘方で、直径約１mの円形に縦板が立てられていたようである。SE07・SK514・SK521等の土坑より古い。上部に縦板はなく、下層で一部が内側に倒れこむようにして検出された。土層断面をみると、井戸本体と掘方の境の線が上部に向かって、かなり開いており、一部の縦板が倒れ込んで出土したことなどから、上部は井戸側が崩壊した後に縦板上部を取り去るなどの作業を行った土坑ではないかと思われる。縦板下部の外側には酸化鉄沈着層が巡り、その内側にやや粘質の土が存在した。縦板を立てるために基部を固めた土と推測している。上段曲物直径0.6～0.7m、高さ0.37m、下段曲物直径約0.4m、高さ0.28mである。検出面から下段曲物下端までの深さは3.25m、標高6.75mである。掘方からは、上段曲物周囲に敷かれた礫に赤色顔料が付着していた。掘方内から中世土師器、八尾、珠洲、土錘、銅銭、礫、井戸本体からは中世土師器、珠洲、曲物底板、漆器、板状・角材状木製品、銅銭、鉄滓、鉄滓、炉壁、礫、種子が出土している。14世紀代に使用されたと考えられる。

SE07（第58図　写真図版30・35） 東西3.1m、南北3.2mの円形の掘方をもつ。SE06より新しい。井戸側は石組みで、上部で1.15m×0.8mの長方形、最下層で1.1m×1.05mの方形を呈する。最下層には石組みの内側に簡単な木組みが存在する。建築材を転用した材を横板にし、丸太材を四隅に立て補強している。隅柱の樹種は、マツ科マツ属である。下層では掘方の壁縁まで２重に石組が巡り、下から３段目の石は横板の上に乗っている。水溜めとして直径0.65～0.7m、高さ0.755mの結物桶が設置されていた。桶と木組の間には礫が敷かれ、桶の中には礫が投げ込まれていた。検出面から桶下端までの深さは約2.6m、標高7.3mである。下層の石組みに赤色顔料がところどころに見られた。掘方内から中世土師器、珠洲、鉄塊、炉壁、鉄滓、鋳型、石臼、礫、井戸本体内から中世土師器、珠洲、青磁、古瀬戸、炉壁、滓、礫が出土している。出土遺物の年代から15世紀代に使用された井戸と考えられる。

SE08（第59・60図　写真図版35） 東西5.0m、南北4.7mの掘方をもち、0.85m×0.85mの方形縦板組隅柱横桟留の木組井戸側である（宇野1989）。上部にSK358等のこれより新しい土坑が存在する。隅柱は横桟の上に積み上げる方式である。横桟は下から１段目・２段目は端部が凸型のものと凹型のものを組んでおり、下から３段目は二叉のもと三叉のものを組み、４段目は二叉と二叉を組んでいる。水溜めは１段の曲物で、直径約0.65m、高さ0.28mである。内部に大礫が投げ込まれていた。検出面から曲物下端までの深さは約3.6m、標高6.9mである。縦板の間に半円形の漆塗り折敷の破片が挟み込まれていた。意図的に挟み込んだと思われ、井戸構築に関わる祭祀であると思われる。掘方部分に酸化鉄が沈着した層が縦に入っており、井戸側の上半部を補修した際の土坑の壁部分と思われる。掘方・補修孔内から、中世土師器、珠洲、八尾、短刀、礫、炉壁、滓が、井戸本体から中世土師器、珠洲、下駄、折敷、板状木製品、銅銭、炉壁、錘状石製品、被熱礫、礫が出土している。出土遺物から、14世紀後半頃に廃絶したと考えられる。（安達）

SE09（第56図　写真図版32） 本地区の東側の河川跡内で検出した。SE04、05から東方に34m離れる。この井戸は溶解炉の炉壁を井戸側に転用している。掘方は不整形で、長軸約1.1mで、深さは90cm以上である。炉壁を上下逆さまにして、やや斜めに据えており、北西端の焚口があったと思われる穴のあけた部分には礫を詰めて安定させていた。また、完全に１個体の炉壁転用したのでなく、径の同じような炉壁を合わせて構築している。部分的に青灰砂まで掘り込んでいる。炉壁の厚さは約10cmである。

本井戸が検出された地点の標高は7.7mで、西側部分は標高10.3mであり、2.6m低い。本井戸付近は河川が東側に流れをかえた後のある時期は陸地化しており、その際に井戸を構築したと考えられる。このような形態の井戸は本例のみである。

本井戸の北方約8m地点では、溶解炉が検出され、本遺跡で鍋などの鋳造が行われていたことがわかってる。周辺ではそれ以外の炉は確認していないが、複数の炉が構築され、それを再利用したと考えられる。井戸内から鉄滓・木片などが出土した。（堀沢）

土坑　本地区では約500基の土坑を検出した。土坑は調査区の全域に広がっている。それらを便宜的に地区分けして代表的な土坑の様相を述べる。南北溝であるSD13の西側の北部分をA区、南部分をD区、SD13の東側で、東西溝であるSD07とSD09に挟まれた部分をB区、SD09とSD69に挟まれた部分をC区、SD69より南部分をE区、近世溝SD01より東部分をF区、SD72より南部分をG区とした（第46図）。

第46図　土坑区割図（1：1,600）

A区　SK02（第61図　写真図版36）長軸1.15m、短軸0.75m、深さ0.51mの長方形である。覆土は暗褐色土が主体で、13世紀の中世土師器がある。

SK05（第61図　写真図版36）長軸1.6m、短軸1.22m、深さ0.14mの長方形である。覆土は暗褐色土が主体で、炭化物がある。

SK123（第61図　写真図版36）長軸1.38m、短軸1.06m、深さ0.64mの長方形である。覆土はにぶい黄褐色土である。噴砂に切られる。

SK149（第61図　写真図版36）長軸1.08m、短軸0.78m、深さ0.15mの長方形である。覆土はにぶい黄褐色土である。中世土師器がある。

SK116（第61図　写真図版36）長軸0.74m、短軸0.62m、深さ0.42mの方形である。珠洲がある。

B区　SK28（第58図　写真図版37）長軸2.04m、短軸1.80m、深さ0.50mの方形である。長軸0.35mの石や拳大の石が出土している。

SK63（第61図　写真図版37）長軸1.58m、短軸1.35m、深さ0.53mの長方形である。土錘がある。

SK75（第62図　写真図版37）長軸2.86m、短軸1.8m、深さ0.62mの長方形である。中世土師器・珠洲がある。本地区の土坑で長軸が最大である。

C区　本区の西側では土坑が約50基の土坑が切り合っている（**第63・64図　写真図版38・39**）。平面形は方形や長方形、長円形がある。土坑の長軸方向は大きくは南東-北西方向と南西-北東方向に分かれる。**SK243・SK246・SK248**からは銭貨がある。

SK209（第64図　写真図版38）長軸3.19m、短軸2.84m、深さ0.35mの方形である。暗褐色土、灰色土が主体的で、最下層には黒褐色土が堆積する。土坑底部には硬化面がある。中世土師器・珠洲・石・硯・鉄製品・鋳造関連遺物がある。15世紀後半と考えられる。

D区　SK308（第62図　写真図版40）長軸2.86m、短軸1.8m、深さ0.62mの長方形である。土坑の中心部に銭貨がある。土層の堆積は大きく4層に分かれ、最上層の層以外に銭貨18枚含まれる。（堀沢）

E区は土坑・ピット・井戸が激しく重複し、密集する。土坑群は長方形～長楕円形の土坑と、大型の方形竪穴状土坑、小型の方形～円形土坑の3種が存在する。長方形～長楕円形土坑の長軸方向は若干のぶれはあるものの、北北東－南南西方向（仮に縦方向とする）とそれと直交する西北西－東南東（横方向）の2グループがある。竪穴状土坑や小型方形土坑の軸方向もこの方向と合う。切り合い関係から、古い順にSE08・SE06、横方向土坑、縦方向土坑、ピットの変遷が伺える。小型の方形～円形土坑は縦方向土坑とピットの間に入るものが多いがそれより古いものもある。

SK395（第65図） 1.4m×1.05m、深さ0.4m、長軸が北北東－南南西方向の不整楕円形の土坑である。中世土師器が出土している。SK515・SK352・SK396より新しい。中世土師器が出土している。

SK533（第65図 写真図版41） 上記のSK395より古く、その下部に存在する。SK520より古く、SK515より新しい。1.6×0.9m（推定）、深さ0.75m（復元深度）、長軸は北北東－南南西方向である。このように一つの土坑を完掘するとその下部により古い土坑が検出されるという状況が多くみられた。

SK604・SK606・SK554（第65・66図 写真図版41） SK604は1.55m×1.00m、深さ0.7m、長軸が西北西－東南東方向、長方形の土坑である。SK606・SK504より新しい。SK606はSK604より浅いため、全形は不明である。SK554はこれら2基の土坑より古い。幅が1.2m、深さ0.55mの西北西－東南東方向の長方形土坑である。

SK506・SK543（第65・66図） SK506は1.5m×1.0m、深さ0.45m、北北東－南南西方向の不整長方形の土坑である。中世土師器、珠洲が出土している。SK543より新しい。SK543は長さが推定1.5mで、幅は不明、SK506と同方向である。

SK552（第65・66図 写真図版41） 1.65m×1.0m、深さ0.7m、北北東－南南西方向の長方形土坑である。珠洲、鏡が出土している。

SK536（第65・66図 写真図版41） 2.1m×1.2m、深さ0.8m、西北西－東南東方向の長方形土坑である。SK551より古い。

SK381（第66図 写真図版41） 1.9m×1.2m、深さ0.55m、西北西－東南東方向の不整長方形の土坑である。覆土の堆積状況が上層と下層で異なるため、2基の土坑が重なっている可能性もある。

SK197（第66図） 1.25m×1.15m、深さ0.4mの不整方形の土坑である。珠洲が出土している。

SK389（第67図 写真図版41） 2.45m×2.45m、深さ0.25mの隅丸方形の竪穴状土坑である。壁や床面が焼けており、また炭粒・焼土粒などが覆土に多く含まれることから、何らかの火を使った作業を行っていた工房跡と考える。

SK180（第67図 写真図版41） 当初、覆土の色の違いから2基の土坑に分けていたが、床面付近に沈着する酸化鉄層が連続していたため、方形の1基の土坑であろう。2.1m×1.9m、深さ0.4m、他の長方形土坑と軸方向を揃える。酸化鉄沈着層の下、床面直上には淡灰黄色砂質土に焼土が帯状に入る層が確認されている。珠洲が出土している。SK389とともに鋳型の製作（リサイクルを含む）に関わる工房と推測する。

SK177（第67図） 2.45m×1.7m、深さ0.8m、北北東－南南西方向の長方形土坑である。砥石、釘が出土している。（安達）

F区 SK97（第62図 写真図版42） 長軸0.95m、短軸0.95m、深さ0.25mの方形である。底部から珠洲の鉢が出土している。

SK115（第62図 写真図版42） 円形の土坑である。底部から擂鉢が出土している。

SK130（第62図 写真図版42） 長軸1.60m、短軸1.10m、深さ0.50mの長方形である。底部に張り付くようにして完形の中世土師器が出土している。（堀沢）

A 区

遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態
SK02	1.15	0.75	0.51	長方形
SK04	0.98	0.72	0.48	楕円形
SK05	1.60	1.22	0.14	長方形
SK07	1.28	1.08	0.16	長方形
SK09	1.06	0.88	0.13	方形
SK10	1.05	0.70	0.11	長方形
SK13	0.92	0.72	0.18	方形
SK88	1.12	1.00	0.11	方形
SK89	0.88	0.76	0.24	方形
SK90	1.08	0.92	0.02	方形
SK105	1.10	0.68	0.21	長円形
SK116	0.74	0.62	0.42	円形
SK122	0.94	0.74	0.80	長方形
SK123	1.28	1.06	0.64	長方形
SK124	0.80	(0.60)以上	0.22	不明
SK125	(1.00)	0.60	0.24	不明
SK141	0.85	0.60	0.15	長円形
SK142	0.67	0.53	0.18	円形
SK149	1.08	0.78	0.16	長円形
SK150	0.93	0.50	0.14	長円形
SK259	1.37	1.10	0.78	長方形
SK269	(1.10)以上	1.10	0.80	長方形

B 区

遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態
SK18	1.14	1.02	0.23	方形
SK19	1.20	0.80	0.38	長円形
SK20	1.40	1.08	0.10	長円形
SK21	1.00	0.96	0.12	長円形
SK22	2.12	1.40	0.20	方形
SK23	1.76	1.44	0.24	長方形
SK24	1.37	1.05	0.42	長円形
SK26	1.84	0.94	0.38	長円形
SK27	1.96	1.21	0.18	長方形
SK28	2.04	1.80	0.50	長方形
SK29	0.94	0.88	0.35	円形
SK30	1.20	0.88	0.43	方形
SK31	1.50	0.92	0.22	不整形
SK32	1.42	1.12	0.46	長円形
SK34	1.06	0.54	0.62	長円形
SK36	0.76	0.72	0.25	円形
SK40	(1.16)	1.00	0.23	不整形
SK41	1.62	(1.20)	0.66	方形
SK42	1.16	0.92	0.30	円形
SK43	1.72	1.56	0.41	方形
SK44	1.12	0.80	0.21	長円形
SK45	1.61	1.00	0.26	長方形
SK46	1.24	(1.12)	0.37	方形
SK47	1.08	0.86	0.30	円形
SK47	1.24	1.24	0.32	方形
SK49	1.68	1.56	0.45	方形
SK50	2.02	1.20	0.44	長方形
SK51	2.56	1.48	0.61	長方形
SK52	1.76	(1.48)	0.50	方形
SK53	1.23	0.94	0.22	長円形
SK55	不明	1.07	0.20	不明
SK56	不明	0.90	26.00	不整形
SK57	1.24	0.80	0.17	長円形
SK58	1.45	1.15	0.20	方形
SK59	1.40	0.96	0.35	長方形
SK60	1.48	0.80	0.12	長方形
SK62	0.74	0.58	0.18	不整形
SK63	1.58	1.35	0.53	方形
SK67	0.78	0.52	0.32	長円形
SK69	1.28	0.88	0.28	長円形
SK70	0.95	0.80	0.14	方形
SK71	1.52	0.78	0.08	長円形
SK72	0.84	0.78	0.19	円形
SK73	1.20	1.00	0.40	円形
SK75	2.86	1.80	0.62	長方形
SK83	1.30	1.30	0.28	方形
SK84	1.50	1.00	0.18	方形
SK85	1.25	(1.05)	0.56	不整形

遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態
SK86	0.96	0.76	0.15	方形
SK137	1.38	1.06	0.40	長方形
SK139	0.98	0.76	0.44	長円形
SK156	1.60	0.58	0.12	長円形
SK171	1.66	1.60	0.28	方形
SK213	2.00	1.52	0.23	長方形
SK234	1.08	1.06	0.17	方形
SK235	1.48	0.88	0.28	長円形
SK265	2.44	1.48	0.33	長円形
SK266	2.12	不明	0.15	不整形
SK280	1.12	1.06	0.52	方形
SK281	1.40	0.98	0.20	長円形

C 区

遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態
SK152	1.26	1.02	0.18	方形
SK153	1.02	0.90	0.18	方形
SK154	2.42	1.32	0.33	長方形
SK155	1.54	0.84	0.25	長円形
SK157	1.60	1.10	0.40	長方形
SK209	3.19	2.84	0.35	方形
SK210	1.30	1.30	0.50	円形
SK212	1.75	1.55	0.36	長方形
SK213	1.68	1.32	0.36	長方形
SK214	0.78	0.66	0.06	丁形
SK215	1.68	1.2	0.40	不整形
SK216	0.82	0.58	0.14	長円形
SK217	0.82	0.54	0.12	長円形
SK218	1.20	0.98	0.23	方形
SK219	1.50	1.50	0.58	方形
SK220	不明	1.17	0.37	長方形
SK221	1.29	0.90	0.36	不整形
SK222	1.12	0.69	0.28	長方形
SK223	不明	(0.70)	0.23	不明
SK224	1.08	不明	0.26	方形
SK225	1.20	不明	0.43	方形
SK226	1.14	1.00	0.38	不明
SK227	0.55	0.38	0.08	不明
SK228	2.20	(1.20)	0.26	長方形
SK229	1.05	1.05	0.19	方形
SK230	1.48	(1.25)	0.39	不整形
SK231	1.30	0.76	0.30	長方形
SK232	不明	1.30	0.32	長方形
SK233	1.28	1.00	0.66	長方形
SK234	(1.77)	(1.40)	0.41	長方形
SK235	1.83	1.55	0.32	長方形
SK236	0.69	0.63	0.19	円形
SK237	0.82	0.62	0.19	不整形
SK238	不明	0.75	0.12	不明
SK239	1.32	1.00	0.18	長方形
SK240	1.34	1.10	0.32	長方形
SK241	不明	0.87	0.38	不明
SK242	0.98	0.78	0.22	方形
SK243	(1.90)	1.38	0.50	不整形
SK245	1.49	1.10	0.49	長方形
SK246	2.17	1.36	0.30	不整形
SK247	0.70	0.56	0.23	円形
SK248	1.32	0.74	0.16	不整形
SK249	1.46	1.18	0.23	長方形
SK250	1.60	1.25	0.28	長方形
SK251	不明	1.25	0.35	長方形
SK252	1.75	0.93	0.37	長円形
SK253	1.55	0.67	0.24	長円形
SK254	1.40	0.73	0.23	長円形
SK255	(1.30)	0.80	0.22	長方形
SK243	1.35	0.85	0.28	長方形
SK235	(2.20)	1.58	0.27	長方形
SK256	1.47	1.28	0.28	方形
SK257	2.08	1.67	0.74	長方形
SK258	0.56	0.51	0.08	円形
SK263	(1.23)	1.07	0.22	方形
SK266	1.26	不明	0.17	不明
SK271	1.62	1.28	0.34	不明
SK279	1.70	不明	0.18	方形か

遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態
SK287	(1.00)	不明	0.49	不明
SK288	0.66	0.50	不明	不整形
SK289	1.95	1.80	0.28	方形
SK290	(0.90)	(0.80)	0.10	不明
SK291	1.50	(1.22)	0.48	方形
SK292	不明	1.86	0.15	長方形
SK293	1.23	1.15	0.41	方形

E 区

遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態
SK171	(1.95)	1.62	0.30	不整形
SK173	1.13	0.96	0.05	方形
SK174	1.50	1.03	0.88	長方形
SK175	1.03	0.70	0.17	長円形
SK176	不明	1.00	0.35	方形
SK177	2.45	1.75	0.88	長方形
SK178	2.31	1.96	0.50	不整形
SK179	2.28	1.38	0.44	長方形
SK182	1.00	0.75	0.35	不整形
SK183	1.32	0.96	0.40	方形
SK184	0.76	0.65	0.32	不整形
SK185	(1.92)	1.30	0.37	長方形
SK186	1.80	1.50	0.42	方形
SK187	2.50	1.50	0.36	長方形
SK188	不明	1.38	0.30	不明
SK189	1.76	不明	0.47	不整形
SK190	1.55	(1.10)	0.46	長方形
SK191	不明	1.02	0.34	長方形
SK192	1.08	0.93	0.38	不整形
SK197	1.24	1.13	0.40	方形
SK198	1.28	0.92	0.25	長方形
SK199	0.74	0.20	0.42	円形
SK318	(1.55)	0.92	0.28	長方形
SK320	0.80	0.75	0.13	不整形
SK321	0.58	0.44	0.13	不整形
SK322	0.78	0.63	0.28	円形
SK326	0.68	0.60	0.68	円形
SK329	1.22	0.86	0.17	長方形
SK340	1.12	1.02	0.26	方形
SK350	0.96	0.96	0.22	方形
SK352	不明	1.00	0.19	不明
SK354	1.06	不明	0.20	方形か
SK355	不明	1.30	0.16	不明
SK357	不明	1.09	0.26	不明
SK359	0.91	0.60	0.12	長方形

F 区

遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態
SK94	(2.50)	不明	0.17	不明
SK95	1.17	0.85	0.12	長円形
SK96	1.20	0.76	0.12	長円形
SK97	0.95	0.85	0.25	方形
SK98	0.80	0.58	0.08	長方形
SK99	0.72	0.45	0.20	長円形
SK104	1.28	0.87	0.18	長方形
SK106	0.96	0.92	0.47	方形
SK107	0.86	0.68	0.12	長円形
SK108	0.88	0.61	0.14	長円形
SK109	1.00	0.76	0.24	不整形
SK110	1.00	0.90	0.10	不整形
SK112	0.63	0.60	0.16	方形
SK113	1.38	1.08	0.18	長方形
SK114	1.88	1.46	0.29	長方形
SK115	1.40	1.30	0.29	円形
SK117	1.82	1.58	0.88	方形
SK118	1.50	0.98	0.25	長方形
SK119	1.30	(1.20)	0.25	方形か
SK127	1.14	0.85	0.28	不整形
SK128	0.76	0.53	0.12	長円形
SK130	1.60	1.10	0.50	長円形
SK132	0.72	0.36	0.15	長円形
SK159	1.25	0.86	0.24	長方形
SK160	1.22	1.13	0.25	方形
SK205	1.73	1.04	0.12	長円形

第10表　3-B地区土坑一覧（A区・B区・C区・E区の一部・F区）

イ．井戸・土坑出土遺物の概要（第74～77図・写真図版46～52）

①井戸出土遺物（第74・75図・写真図版46・47・51・52）

SE01　1～3は非ロクロ成形の中世土師器である。底部には指頭圧痕が明瞭に残る。2には口縁部には指ナデの跳ね上げ痕跡が認められる。また、油煙が付着しており、灯明皿として利用されたことがわかる。宮田編年（宮田1997）Ⅳ～Ⅴ期と考えられる。4は八尾で、壺か甕の底部である。（小黒）

SE02　5～10は中世土師器である。5・7～10は非ロクロ成形、6はロクロ成形である。5は口縁部内面に段を持つ。6は口縁部が外反する。9と10は口縁部に油痕が残る。灯明皿として使用していた。9と10は橙色である。鉄製品は釘がある（**写真図版51**）。長さは、④が5.8cm、⑤が7.6cmである。⑤は錆がひどい。

SE03　11～28は中世土師器である。11～27は非ロクロ成形である。11・13・14・18・20・22は油痕が残る。灯明皿である。11と12は灰白色で器壁は厚い。口縁端部は丸い。13～19は口縁端部はやや鋭く、器壁は薄い。13・14・17・18は灰白色、16と19は橙色である。20と21は口縁端部は丸い。20は灰白色、21は橙色である。22は口縁端部内面に段がある。にぶい黄橙色である。23は口縁部の器壁は厚く、灰白色である。21～27は口縁部は外反する。24～25の口縁端部は薄く鋭い。すべて灰白色である。28はロクロ成形の土師器で、底部に糸切の痕跡を残す。内外面に赤彩の痕跡が残る。29は八尾壺の口縁部。内外面に釉がかかる。13世紀後半～14世紀前半。31と32は珠洲である。30は擂鉢の底部で、内面には卸し目が残る。卸目の条数は幅2.8cmに11条ある。底部は静止糸切である。31は甕の口縁部で、口径は約53cmである。体部外面は平行叩き、内面には当て具痕跡が残る。吉岡編年Ⅳ期である。32は瓦器の火鉢である。肩部に二条の隆帯があり、その間に菊花文が押捺される。33は土錘で、孔径は約1cmである。34は銭貨である。北宋銭の「祥符元寶」（真書）で、初鋳年は1009年である。

SE04　35～50は中世土師器である。35～49は非ロクロ成形である。36・40・44は口縁部に油痕が残る。灯明皿である。35～37は全体的に器壁は厚く、口縁端部は薄くなる。35は橙色、36・37は灰白色である。38～40は口縁端部は器壁が薄くなる。38の口縁端部は特に鋭い。38と39は橙色である。41・43・44は器壁が厚く、口縁端部は丸い。ともに灰白色である。42は口縁部内面に段がある。灰白色である。45～49は口縁部が外反する。47と48は外面のナデが強い。45と48は橙色、46はにぶい黄橙色、47と49は灰白色である。50はロクロ成形の土師器で、底部に糸切の痕跡を残す。51～54は珠洲である。51は鉢で口縁端面に櫛目波状文を施す。吉岡編年Ⅴ期である。**写真図版46**の①と同一個体と考えられる。52と53は甕の口縁部で、体部外面には平行叩きが残る。吉岡編年Ⅴ期である。**写真図版46**の④と同一個体である。54は擂鉢で、内面には卸目がある。卸目の条数は2.4cmと2.7cmに9条ある。底部は静止糸切である。**写真図版46**の⑤は珠洲の壷で、体部外面には平行叩き、内面には当て具痕跡が残る。55は古瀬戸の卸皿である。口縁部に釉がかかる。15世紀中頃と考えられる。56は土錘で、孔径は5mmである。57は砥石である。色調は赤褐色である。仕上砥か。鉄製品は**写真図版51**の⑥がある。釘か。

SE05　58は中世土師器の底部である。糸切の痕跡が残る。59は漆器の椀である。高台の高さは1.4cmである。椀内面と外面に黒漆が塗られ、その上に赤漆で内面と外面に文様が施される。内面は線状に赤漆が残るが、剥離が激しく何の文様か不明である。外面には赤漆による文様が3面あり、1面は扇文である。扇面部分と要部分はほぼ残存する。扇骨部分は剥離している（**第74図59-2**）。2面目は植物文が描かれる。何を表現したかは不明である（**第74図59-3**）。3面目も植物文と考えられる。何を表現したかは不明である（**写真図版52　59-4**）。15世紀後半と考えられる。（堀沢）

SE06　65は珠洲の甕で、上段曲物内下層から出土したものである。吉岡編年のⅢ期に属する。66は片口鉢の底部で静止糸切りで、内面は滑らかに磨耗している。卸し目が認められないことから吉岡編

年のⅡ期以前であろう。67は土錘である。約3分の1のみ遺存している。短径は推定4.2cm、孔径は1.2cmである。68は無文の黒漆塗りの椀である。薄手で、高台は磨耗しているが、小さく低い。木取りは横木取りの板目である。13世紀後半から14世紀前半か。69・70は銅銭。69は行書の「元豊通寶」で、初鋳1078年の北宋銭である。70は篆書の「皇宗通寶」で、初鋳1038年の北宋銭で、他2枚が裏面に付着している。

SE07 60～62は中世土師器で、非ロクロ成形口縁部1段ナデである。61は口縁部内外面に油煙が付着する。15世紀に属する。63・64は珠洲である。63は甕で、吉岡編年のⅢ期に属する。64は壺の底部で、静止糸切りである。

SE08 71～75は中世土師器で、非ロクロ成形口縁部に1段ナデを施す。75は井戸本体下層出土で、外面底部に掻押し成形の痕跡が明瞭に残り、内面底部は不定方向ナデを施す。14世紀後半に属すると思われる。76はロクロ成形の土師器で、12世紀以前に属する。77～80は珠洲である。77は甕、他は片口鉢である。80は幅の狭い卸し目がまばらに入る。吉岡編年による帰属時期は77・80がⅡ期、78・79がⅣ1期である。81は大型刀子である。鋒両刃造の可能性がある。全長28cm、刀身本体の長さは約18cmである。82は片面のみ漆塗りの板状木製品で、朱漆で千鳥の文様が描かれる。厚さは1.1cm、周囲を意図的に削っている可能性がある。83・84は下駄である。83は丸型の露卯下駄で、前歯のほぞがほぞ穴に残っている。裏面がかなり磨耗しており、歯が取れてからも使用していた可能性がある。84は連歯下駄で、後歯の磨耗が激しい。表面には前壺付近に、足指、足裏跡の凹みがある。（安達）

②土坑出土遺物（第76・77図・写真図版48・49・50・51）

A区（第76図）SK02 1・2は非ロクロ成形の中世土師器である。ともに口縁部外面端部にナデを施す。2は端部に油煙が残る。灯明皿である。器壁は厚い。13世紀代と考えられる。

SK149 3・4は非ロクロ成形の中世土師器である。4は端部に油煙の痕跡が残る。灯明皿である。口縁部外面端部にナデを施す。

SK269 5・6は非ロクロ成形の中世土師器である。ともに口縁部外面端部にナデを施す。5は口径は6.8cm、器高は1.4cmである。6は口径12.0cm、器高は2.7cmである。13世紀代と考えられる。写真図版51の⑨は鉄製品で、刀子である。長さ7.5cmである。

SK116 7・8は珠洲である。7は甕の口縁部である。8は擂鉢。口径26.5cm、器高は11.1cmである。内面には卸し目が残り、卸目の条数は幅1cmに4条ある。底部は静止糸切である。体部外面と内面に帯状に煤が残る。

B区（第76図）SK75 9は非ロクロ成形の中世土師器である。体部外面と内面に煤が付着している。10は珠洲の擂鉢である。口縁端部内側に段がある。卸目が若干残る。吉岡編年Ⅴ期と考えられる。

SK30 11は非ロクロ成形の中世土師器である。端部外面はナデを施す。それより下には指圧痕跡が残る。15世紀代。鉄製品は写真図版51の⑥がある。

SK64 12は非ロクロ成形の中世土師器である。内面に煤が付着している。15世紀代か。

SK24 13は非ロクロ成形の中世土師器である。口径11.0cm、器高3.0cmである。灰白色で、端部外面はナデを施し、それより下には指圧痕跡が残る。14世紀後半か。

SK63 14は土錘で、孔径は約1.5cmである。

SK50 15は砥石である。灰白色で仕上砥である。

SK53 16は砥石である。幅3.2cm、長さ8.4cm以上、厚さ1.1cmで仕上砥である。石材は泥岩で、浅黄色である。5面すべてを砥面として使用している。

C区（第76・91図）SK233 17は非ロクロ成形の中世土師器である。灰白色で、端部に油煙の痕跡が

残る。灯明皿である。13世紀代と考えられる。

SK254　18・19は非ロクロ成形の中世土師器である。ともに灰白色でL1縁部外面はナデを施す。19はナデが強い。15世紀後半と考えられる。

SK219　20は非ロクロ成形の中世土師器である。灰白色で。口縁部外面を強く撫でる。油煙の痕跡が残る。灯明皿である。

SK220　21は土師器の甕の底部。にぶい黄橙色。古代の遺物と考えられる。

SK209　22～30は中世土師器である。22～29は非ロクロ成形、30はロクロ成形である。24・26・27は口縁端部に油煙が残る。灯明皿である。色調は22・23は黄橙色、24～30は灰白色である。24と25の口縁端部は薄くなる。26～29の口縁端部は外反する。28と29は口縁端部内面にやや段を持つ。30は底部。回転糸切の痕跡がある。また、体部内外面に赤彩が残る。概ね15世紀後半と考えられる。31～36は珠洲。31・32は甕の口縁部。ともに体部外面には平行叩き、内面には当て具痕跡が残る。32と33は同一個体である。34～36は擂鉢である。34と35の内面には卸目が残る。34の卸目の条数は幅1.7cmに5条ある。35の卸目の条数は幅3.6cmに11条ある。ともに吉岡編年Ⅳ期と考えられる。36は鉢の底部で、外面には平行叩きの痕跡がある。37は硯で、石材は泥岩である。色調は灰黄色である。写真図版51の⑦は鉄製品で、釘である。

SK292　39は銅塊である。長さ5.2cm、幅3.0cm、厚さ1.5cmで、重量は97gである。

SK207　40は鉄製品。長さ現存で7.0cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmである。楔か。

SK243（第91図　写真図版51）　1は北宋銭で真書の「祥符元寶」（初鋳年は1009年）である。全体が残る。

SK246（第91図　写真図版51）　2は北宋銭で篆書の「皇宋通寶」（初鋳年は1038年）である。

SK248（第91図　写真図版51）　3は北宋銭で篆書の「皇宋通寶」（初鋳年は1038年）である。全体が残る。

D区（第77・91図）SK308　41は非ロクロ成形の中世土師器。口縁端部の内側には段があり、鋭い。内外面に油煙が残る。灯明皿である。16世紀代か。4～14は銭貨（第91図　写真図版51）である。4は唐銭で「開元通寶」（初鋳年は621年）である。4以外は北宋銭である。5は真書の「皇宋通寶」（初鋳年は1009年）、6～8は真書の「熙寧元寶」（初鋳年は1009年）［7と8は同一個体］、9は真書の「嘉祐元寶」（初鋳年は1009年）、10と11は行書の「元豊通寶」（初鋳年は1078年）、12は篆書の「聖宋元寶」（初鋳年は1101年）である。写真図版51の①は真書の「熙寧元寶」（初鋳年は1009年）、②は真書の「天聖元寶」（初鋳年は1023年）である。この他に「紹聖元寶」（初鋳年は1094年）、「治平元寶」（初鋳年は1064年）がある。（堀沢）

E区（第77・91図）SK355　42は摩滅により調整方法が不明であるが、中世土師器非ロクロ成形の小皿で、口縁は内彎して立ち上がり、端部は尖る。口縁端部付近に油煙が付着する。体部から底部に指頭圧痕が残る。

SK360　43・44・45は中世土師器の非ロクロ成形口縁部1段ナデの皿で、45は強いなでによって、外面に段ができる。内面底部は不定方向のナデを施す。第91図の17は草書の淳化元寶（初鋳990年）で、18は行書の元祐通寶（初鋳1086年）で、ともに北宋銭である。

P411　46・47は中世土師器非ロクロ成形口縁部1段ナデの皿である。2点とも体部から底部にかけて指頭圧痕が残る。

SK395　48・49は中世土師器非ロクロ成形、1段ナデの皿である。49は口縁部がやや外反する。

SK506　50・51は中世土師器非ロクロ成形、1段ナデの皿である。50は体部から底部にかけて指でな

でつけた跡が残る。52は珠洲甕で、吉岡編年のⅥ期（15世紀後半）に属する。第91図の20は行書の元豊通寶で初鋳1078年の北宋銭である。

SK517　53は非ロクロ成形の中世土師器皿で、調整方法は不明である。口縁部は内彎して立ち上がる。

SK178　54は中世土師器の非ロクロ成形の皿である。調整方法は不明。器壁が薄く、口縁部は内彎して立ち上がる。内外面に油煙の付着がある。

SK549　55は中世土師器非ロクロ成形、1段ナデの皿で、口縁部が外反する。

SK520　56は青磁の椀で13世紀中頃。写真図版49の⑦も青磁で、13世紀末から14世紀前半に属する。

SK527　57は青磁の椀で、13世紀中頃と思われる。

SK508　58は珠洲甕で、吉岡編年のⅡ$_2$期からⅢ期（13世紀初めから中頃）である。

SK187　59は珠洲壺である。頸部に波状櫛描文を施す。吉岡編年のⅣ期に属する。

SK185　60は珠洲片口鉢の底部で、内面が2次的に被熱している。

SK197　61は珠洲片口鉢で、吉岡編年のⅣ期（14世紀前半から半ば）である。卸目は浅く幅広である。

写真図版49の①～③は珠洲の片口鉢である。口縁端部はやや外傾する。①は生焼けで口縁部に2次的被熱がみられる。内面は器面が剥離しているが、卸目の痕跡がみられる。③は内面の卸目は1単位の幅が3cm、10条である。吉岡編年のⅣ期に属する。

SK552　62は珠洲片口鉢で、吉岡編年のⅣ期である。63は鉄製の鎹である。断面形は方形である。

SK177　64は砥石で、流紋岩製の中砥である。上端は折損し、下端には敲打痕がある。他の4面を使用している。65は鉄製の釘で、錆のため断面形ははっきりしない。

SK534　66・67は砥石である。66は上面から出土した。66は流紋岩製中砥、67は泥岩製仕上砥である。66は1面のみ使用し、他の面は剥れたようである。縦方向のかなり深い擦痕が入る。67は下端が折損しており、2面の他、上端の一部に若干の使用痕がある。

SK171　第91図15の銅銭は、真書の「祥符元寶」で、初鋳1009年の北宋銭、16は真書の「皇宋通寶」で、初鋳1038年の北宋銭である。

SK396　第91図19は行書の「元豊通寶」で、初鋳1078年の北宋銭である。

SK370　写真図版49の⑥は古瀬戸の壷または瓶類と思われる。灰釉が外面にかかる。（安達）

F区（第77図）SK130　68は非ロクロ成形の中世土師器である。13世紀前半と考えられる。

SK166　69は珠洲の鉢の口縁部である。吉岡編年Ⅴ期と考えられる。第91図21は真書の「開元通寶」、（初鋳年は621年か960年）で、唐銭か南唐銭である。22は真書の「淳化元寶」（初鋳年は990年）で北宋銭、23は篆書の「治平元寶」（初鋳年は1064年）で北宋銭である。

SK203　70は珠洲の擂鉢の口縁部である。内面には卸目が残る。吉岡編年Ⅴ期と考えられる。

SK97　71は珠洲の擂鉢である。口縁端部は断面が三角形になる。内面には卸目があり、幅2.2cmに9条ある。吉岡編年Ⅲ期と考えられる。

P109・110　72・73は珠洲である。ともに内面に卸目が残る。72は片口鉢の擂鉢である。吉岡編年Ⅴ期と考えられる。73の擂鉢の底部で、静止糸切の痕跡が残る。

SK115　74は鉄製品で、握鋏である。現存する長さ12.1cmである。刃の部分が直線であるため、本来はもう少し長かったと考えられる。握る部分の長さ（アゴから腰までは）は5.6cmで、幅は0.6cm、厚さは0.2cmである。刃の部分は長さ6.3cm以上、幅は0.8～1.0cm、厚さ0.2cmである。刃の厚さから見ると第74図の上が刃の表、下が裏と考えられる。（堀沢）

ウ．溶解炉・廃滓場周辺の遺構の概要

溶解炉の基礎構造（第69・70図　写真図版43）旧河川堆積土（灰色土）を除去する過程で確認された。河川の水流や鋳造時の整地等により上部は削平されている。当時の地表面上に露出していた溶解炉本体部分はすでになく、おそらく操業終了時に破壊されたと思われる。地下の基礎構造部分のみが遺存していた。基礎構造部分の掘り方は確認面上で長軸約3.5m、短軸約1.4m程度である。深さ60cm程度が遺存していた。確認面は平坦である。掘り方の壁面は垂直気味にそり立つ部分やなだらかな斜面部分など場所によりさまざまである。掘り方底面の地山は粘性のある灰白色シルトである。

掘り方は過去の（ほとんど時間差はない）鋳造作業によって生じた鋳造関連遺物を含む土層（以下、廃滓土とする）を掘り込んでおり、確認されたなかでは新しい段階の溶解炉に伴う基礎構造である。周辺の溝等により破壊されているだけでなく、当時の地表面自体も削平されていると考えられる。それは基礎構造上に後の鋳造作業に伴う廃滓土が堆積していることによる。後述するように、廃滓場の土層断面の検討から、溶解炉の更新のたびに設置場所周辺の廃滓土を平坦に整地して、作業し易いようにしており、このことからも平坦に整地された基礎構造の上部に堆積した廃滓土は、後の溶解炉の操業によると理解するのが妥当である。後の溶解炉はすでに跡形もなく破壊され、廃滓土の堆積も薄いものの、廃滓場は本来さらに西側まで拡がっていたことになる。

掘り方掘削後、溶解炉の設置予定位置の真下に30cm程度の土壇を築き、そこから周縁に沿わせるように土を充填している。充填土は掘り方底面から30cm程度の高さで水平に整えられており、砂や炭化物が多く含まれた土を意図的に用いている。炭化物はブロック状の細かいものが用いられている。その後、溶解炉の設置予定位置の真下は再度10cm程度掘りこまれ、改めて焼土ブロックや黄白色土ブロック、砂、炭化物を含む黄褐色土を細かな単位で敷き詰めている。その周囲には炭化物を含む灰褐色土を貼り付けるように置いている。これらの上に細かく砕いた溶解炉の炉壁をガラス質が付着した内側を上に向けて楕円形に敷き詰めている。それと同時に脇を土で固め、基礎を補強している。

楕円形に敷き詰めた炉壁片を囲むように、ほぼ同径の大形の炉壁片を複数用いて内法で60cm×50cmの楕円形の筒状構造を構築している。隙間には炉壁小片や礫を充填し補強している。外形では80cm×65cmの規模となる。高さは30cm程度が遺存しており、地下に埋設されていた部分のみが削平を免れたものと思われる。これらの炉壁は2～3回程度粘土を貼り直して溶解炉として再利用された後、砕かれて最終的に基礎構造の部材として用いられている。補修回数の異なる炉壁片が用いられていることからも、径が類似した複数の炉壁片が用いられたことは明らかである。

基礎構造内部の炉壁片上にはしまりが強く粒子の粗い黄褐色土を意図的に貼り付け、その上も細かな単位で充填している。以上のように、溶解炉の基礎構造は、防湿対策のため大きく穴を掘った後、炭化物や砂を含む層に加えて、設置予定位置の真下は特に念入りに構築しているのである。炉壁本体は遺存しない。本来の径を復元できるだけの破片は少ないが、概ね基礎構造部分と同程度の直径であったのではないかと思われる。

排水溝（第69図）SD57　溶解炉基礎構造の掘り方端部から2.7m離れたところに位置する。幅25cm程度、深さ20cm程度である。覆土は灰褐色土で焼土ブロックや炭化物、鉄滓が含まれ、酸化鉄が沈着している。後世の溝により破壊されている部分が多く、溝の走行方向や規模は不明瞭である。溝の掘込面は基礎構造とほぼ同じ標高である。

SD60　溶解炉基礎構造の掘り方上に位置する。掘り方内を埋め戻して基礎構造を完成させた後に掘削されている。幅35cm程度、深さ13cm程度である。覆土は灰褐色土で、焼土や炉壁、鉄滓、炭化物を含む。SD60の上には、後の操業による廃滓土が覆っている（1層）。後世の溝により破壊されてい

る部分が多く、溝の走行方向や規模は不明瞭である。覆土の様相はSD57と類似し、これら2つの溝からは鋳造関連遺物が出土することからも、両溝は基礎構造上に設置されていた溶解炉の操業に伴う排水溝の可能性も想定できる。この想定が妥当であれば、基礎構造上に設置されていた溶解炉の送風装置（フイゴ）は基礎構造の南側に設置されていた可能性が高くなる。前述の通り、地表面は整地による削平を被っているので、フイゴ座は遺存しない。

これらの他にも、基礎構造とSD57の間には溝が3条認められる。SD57・60と覆土の色調は類似するものの鋳造関連遺物が含まれないものや、鋳造関連遺物が含まれるものの覆土の色調が異なるものがある。覆土の色調が類似するものは、SD57・60と同時期の排水溝である可能性もある。

廃滓場（第68・72・73図　写真図版44・45）旧河川の覆土を除去すると、縦約15m×横約34mの範囲に鋳造関連遺物や土器・陶磁器等を含む廃滓場を確認した。深さは最大約2mとなる。約15°の傾斜地を利用して、鋳物生産が行われていた。廃滓場の旧河川側（低地）にはSE09が構築されている。廃滓場が形成された時点では通常河川の水は当該地点まで及んでいなかったと考えられる。SE09の井戸側上部には炉壁が転用されており、鋳物師集団が利用したものであろうか。廃滓場の中央部を縦走してSD56が存在する。操業が全て終了した後に形成された溝である。

廃滓場内に任意の局地座標系を設定し、遺物は含まれる層序を記録してグリッド一括取り上げとした。重要なものは光波測距儀（トータルステーション）を用いて出土地点を三次元計測した。設定したグリッドは1m四方を基本として、溶解炉の基礎構造付近は50cm四方（32地区）とした（全120地区）。（小黒）

廃滓場土層断面　廃滓場に設定した各トレンチの土層断面に最大6面の平坦面を認めた。その中には人為的なならし作業と推測される面が含まれ、操業面と推測した。各横断面の操業面の同時性については縦断面で連続をレベルから確認した。同時性が確定できない場合には数字にダッシュ（'）をつけている。6回の操業が想定されるが、溶解炉の基礎構造上部を廃滓土が覆っており、さらに斜面上部にあった操業面が近世の大溝（SD03）によって削平されていることは確かである。図中の廃滓層は廃棄物としての炉壁、鋳型、焼土、鉄滓、炭等の鋳造関連遺物が土よりも多い層である。凡例に挙げていない層にもある程度の鋳造関連遺物が含まれている。

C-C'断面は溶解炉掘方に直交するラインである。6回の操業面を確認している。第1次から3次操業面の形成までの間は、斜面の傾斜に沿って薄くではあるが炭の多い層やある程度の鋳造関連遺物が含まれる層が堆積している。第2次操業面と3次操業面は酸化鉄層に覆われており、この面で水に浸かったり、乾燥したりしていた時期があることを示している。この付近で、盛んに操業が行われたのは第3次操業以降で、特に第3次操業面の上には廃滓層や廃滓土、炭の多い層がある。また、鋳造土坑とみられる掘り込みが認められる。溶解炉基礎構造に伴う堆積は第6次操業面より上と思われる。第3次操業面の上から吉岡編年V期の珠洲が出土している。この面以下では最も新しい時期に属する遺物である。よって第3次操業を15世紀前半頃と位置付ける。

D-D'断面は溶解炉より上流側である。第1次操業面の上に堆積する層は鋳造関連遺物をほとんど含まない自然堆積層が多く、この付近が操業の中心部ではなかったことがわかる。第2・3次操業が中心である。第2・3次操業面上には廃滓層や炭層が厚く堆積する。85区第1次操業面上から吉岡編年IV1期の珠洲が出土している。SE09はこのトレンチよりやや上流側で重機による廃滓場範囲確認時に検出されている。レベルから第3次操業面に構築された井戸と考えられる。鋳造の一連の作業の中で使用する水を斜面の下側の井戸で確保したのであろう。

第72図は②トレンチと③トレンチとの間の縦断面の一部であるが、鋳造土坑SK316が最終操業面

(第7次) から掘り込まれていることがわかる。SK342は第5次操業面から掘り込まれている。

A-B'断面は溶解炉より下流側で、少なくとも3回の操業面が認められる。第3次操業面より古い高まりが河川側に認められ、遺構の掘り込みもみられる。第3次、4'次、5次が操業の中心である。73区最下層 (第1次操業面上) から古岡編年Ⅳa期の珠洲が出土している。

E-E'断面は①トレンチと②トレンチとの間の縦断面である。第2次操業面のド (第1次操業時堆積層) にもある程度の鋳造関連遺物が含まれる。第3次から5次まで多く鋳造関連遺物が含まれる。6次にもある程度の鋳造関連遺物が含まれている。第5次操業面上には暗橙褐色土の硬化面が認められ、その上に黄色砂が薄く堆積していた (第68図参照)。リサイクルのための鋳型真土の粉砕等が行われていた作業面と推測する。

縦断面の観察から、第2・3次操業面が②・③トレンチ付近で高まり、傾斜していることがわかる。②トレンチから下流にかけて第4次操業面も傾斜している。それより後の操業面は斜面に平行に平坦な面を作り、広い作業スペースを確保していたことがわかる。そのような面にSK342、SK316、SK346、SK332などの鋳造遺構が作られている。14・19・42・48・49・52～54・66・67・72～74・78～80・85区など平坦面が作られたあたりは鋳造関連遺物の重量分析でも大量の鋳造関連遺物が出土している (グラフ4参照)。おそらく斜面上部に構築されることが多かった溶解炉からの鋳造関連遺物を斜面下に掻き出して平坦面を作ったことと、平坦面上に作られた鋳造土坑などの作業スペースからの鋳造関連遺物が多く蓄積したという2つの理由によって鋳造関連遺物の量が多くなっている可能性がある。

④トレンチより上流側では廃滓土が薄くなる。①トレンチより下流側にはさらに廃滓場が広がる可能性がある。川の中心部に向かって重機による断ち割りを行ったところ、さらに廃滓土が広がっていることを確認した。自然堆積層の間層としてほぼ水平に堆積しており、水の影響を受けて流れ込み、堆積したものであろう。

土層断面と遺物の出土層との対照から、この付近での鋳造の開始は14世紀代にさかのぼる可能性がある。第3次操業は15世紀前半前後かそれ以降、操業停止は15世紀後半ごろと考えられる。

鋳型の出土層位と分布 (第48図・第80～85図　写真図版44・45参照) 19の磐は30区第1次操業面から出土している。磐は第3次、6次操業面からも出土しており、操業開始当初から終わり頃まで鋳造されていたようである。鍋も第1次または2次操業面、3・4次操業面、また鉄鍋鋳造土坑から出土している。鉄鍋鋳造土坑は溶解炉基礎構造よりは古いものの第5次操業面を下らないことから、鉄鍋の鋳造も恒常的に行われていたと考えられる。57の梵鐘鋳型は52区第1次または第2次操業面から出土し、実測図を掲載したものの中には第4次、第5次操業面出土のものがないが70区第7次操業面から38の梵鐘擬座の鋳型が出土している。28の獣脚鋳型は88区第1次または第2次操業面から出土している。SD56内や第5次操業面からも出土しており、各期にわたって鋳造が行われていたと考えられる。以上のように鋳型種によって層位の中で特別偏りが無く、各種製品全般を鋳造の開始期から最終段階まで鋳造していたと考えてよいだろう。平面分布をみると、梵鐘鋳型が1区で大量に出土していること、平坦面のある⑤・⑥トレンチの下側から各種鋳型が多く出土していることが注目される。(安達)

鉄鍋鋳造土坑 (第71図　写真図版44) 溶解炉基礎構造の南西に鉄鍋の鋳造土坑が1基遺存していた。上部は削平され、基底部を残すのみである。少なくとも基礎構造に伴う溶解炉の操業以前のものである。長軸56cm、短軸46cm、深さ15cmの掘り方内に鋳型が掘られていた。

鋳型 (外型) の内面は鋳造時の熱により還元し、灰色に変色している。このことは、この土坑内で確実に鋳造が行われたことを示す。掘り方内埋土は赤化している部分もある。赤化の度合いが強い部分と確認できる程度の部分、不明瞭な部分と差が認められるので、この赤化は鋳造時の被熱によるの

ではなく、防湿効果を得るために赤化した土を掘り方内埋土として利用した可能性もある。

鋳造後、製品を取り出す段階で鋳型は破壊されるので、内型は原位置で遺存していない。外型も小破片に砕けた部分が多い。崩落または移動した小破片も多いが、残存部分のなかで原位置を保っている外型破片から推定される直径は24cm程度である。この直径や正円形であることから、本土坑で鋳造されていた製品は鍋と推定される。廃滓場からはリサイクル用に細かく砕いたと思われる鉄鍋の破片が多く出土していることや、既述の通り完形の鉄鍋が平成9年度調査SK102から出土していることからも、鉄鍋用の鋳造土坑との推定に大過はないと考える。（小黒）

その他の鋳造土坑（第73図） 以下は、鋳造に関わるどの段階での作業に使用された土坑であるか、はっきりしないものもあるが、廃滓場上や、廃滓場形成の途中段階の面で構築されており、比較的まとまって炉壁や鋳型が出土していることから鋳造土坑と判断した。

SK316 1.0×0.7m以上の楕円形または円形の土坑と思われる。トレンチに切られ、全体形は不明である。掘り込み面はSD56によって削平されている。隣接してやや小型の土坑が存在する。一度埋まった後に掘り直されている。下層に廃滓層がある。中層付近にも炉壁がまとまって出土している。他に中世土師器、珠洲、八尾、鉄製品、鋳型、滓、黒鉛化木炭、被熱礫が出土している。

SK342 3.0×3.0m、深さ0.15mの方形の遺構である。第5次操業面から掘り込んでいる。床面に溝状の土坑、南東隅と南西隅に楕円形のピットが存在する。他の2隅はトレンチに切られて不明である。他の鋳造土坑と比べて大型で、梵鐘鋳造にともなう可能性もある。銑鉄が出土している。

SK295 1.25×0.9m、深さ0.6mの楕円形の土坑で、掘上層面に構築されている。炭、焼土粒、鉄等を出土している。断面形は椀形である。

SK346 0.95×1.8m以上の長方形の土坑である。深さ約0.1mである。トレンチに切られ、全体形は不明である。第4次操業面から掘り込んでいると思われる。炉壁、鋳型、滓、黒鉛化木炭、被熱礫が出土している。

P380 斜面上部に構築された浅い不整楕円形の土坑である。0.8×0.4mで、深さ0.2mである。比較的大きな炉壁片を出土している。

SK332 1.2×1.7m、深さ0.15mの長方形を呈すると思われる土坑である。SD56に切られ、掘り込み面は不明である。珠洲、鋳型、滓、炉壁が出土している。

SK333 楕円形を呈すると思われる土坑で、0.8×1.2m、深さ約0.3mである。SD56に上部が削られている可能性があるが、削平がほとんど無いとすれば第3次操業面からの掘り込みとなる。大型の鋳型、炉壁、銑鉄が出土している。

SK343 0.9×0.8m以上、深さ約0.4mの不整形な土坑である。（安達）

礎石建物（第71図） 溶解炉基礎構造の南西で、礎石を4基確認した。柱穴を確認した時点ですでに礎石が露出しているので、柱穴は溶解炉基礎構造掘り方上面に後の操業による廃滓土が堆積する以前か、あるいは基礎構造構築以前に利用され、削平されていたことになる。礎石は掘り方内に置き土を施すなどして底面を整えた後、平坦な面を上部にして据えられている。掘り方内埋土には鉄滓も含まれており、鋳造を行っていた時期に比較的近い時期の構築と思われるが、時期を特定することはできない。P383・385とP384・386がセット関係にあると推定されるが、両者の配置からこれらの4基の礎石が一つの建物を構成していたとは考えにくく、おそらく異なる2棟の建物が近接して存在していたと考えられる。廃滓場側には対応する礎石列が確認されなかったので、おそらく東側に対応する礎石列が存在していたと思われるが、当該部分は後世に溝群が多く形成されているので、その際に破壊されたと考えられる。（小黒）

エ．溶解炉・廃滓場周辺の出土遺物の概要

鋳造関連遺物（第80～90図　写真図版53～55） SD56やSE09など、廃滓場内に営まれた遺構を除く廃滓場出土遺物の総重量は6.3ｔ（6,339,301ｇ）となる。ｶﾜﾗが最も多く4.7ｔ（4,707,692ｇ：28.32%）、次いで鋳型が0.7ｔ（732,856ｇ：23.87%）、甑炉付属品（補強材・羽口）11kg（11,787ｇ：1.66%）、溶解関連遺物（木炭・礫）0.7ｔ（760,166ｇ：19.43%）、生成物（銑鉄・黒鉛化木炭）27.6kg（27,695ｇ：3.03%）、生成不純物（白色滓・滓）50.2kg（50,245ｇ：8.23%）、鋳造関連道具（取瓶・三叉状土製品・湯口栓）84kg（84,091ｇ：8.67%）、その他（鉄製品・板材）24.7kg（24,769ｇ：6.48%）となる。

これらの遺物は緩斜面上に廃棄されたものであり、さらに整地面の存在からｶﾜの操業ごとに堆積した廃滓場上面を削平したことがわかるので、遺物の出土地点が原位置を保っていないことは明らかである。総重量の約３割を占めるｶﾜﾗは大部分のグリッドから出土しているが、分布の中心が数ヶ所に分かれる傾向にある。100kg以上を目安にすると、14・19・30・42・54・66・67・72～74・78～80・85・92グリッドからの出土量が特に多い。整地による移動が若干であり、炉が破壊された場所（本来の設置場所）周辺に遺棄されたと考えるなら、炉は上記グリッド周辺に存在していた可能性を想定できる。なお、甑炉上部と推定されるガラス質が付着していないｶﾜﾗが約35kg出土した他、底部付近と思われるものも約1.8kg存在する。なお、羽口挿入口や排滓口は確認できていない。

羽口（第86図　写真図版53） 151破片を確認した。部位によって異なるが、外径・内径の相関図からはおおむね３群に大別できる。このように複数の羽口が存在することから、用途ごとに炉が使い分けられていた、つまり複数のｶﾏが存在していたことは確実であろう。なお、内径15cmのものが２個体存在する。これらは大型品（梵鐘）鋳造用の炉に伴うのであろうか。

補強材（四角柱材）（第87・88図　写真図版53） 34破片を確認した。大型品（長方形）38%、中型品（正方形）50%、小型品（長方形）12%に大別できる。甑炉の補強材という可能性以外にも、鋳型焼成坑の構築材の可能性もある。ただ、大型品・中型品には湯が付着しているものが１破片ずつあり、それらは甑炉の隙間充填材であることが確実である。

銑鉄（第90図　写真図版54） 約8.6kg出土した。銑鉄は湯が飛散して固まったものであり、その出土地点はｶﾏや鋳造土坑に近い可能性がある。400ｇ以上を目安にすると、４・32・33・63・70・75グリッドからの出土量が多い。70グリッドは約1.5kgと他を圧倒する。肉眼観察から銑鉄と分類した資料を成分分析したところ、金属学的にも誤りないことが確認された。平均炭素量が3.62%との分析結果を得た。湯口部分で固まった銑鉄も２個体ある。平均炭素量は3.08%との分析結果を得た（166～169頁参照）。大きさや形状は鍋鋳型の湯口と類似しており、鍋鋳型の湯口部分の可能性が高い。また、溶解炉の湯口付近で固まったものの可能性もある。

黒鉛化木炭（第89図　写真図版54） 約19kg出土した。木炭が明確に黒鉛化したもの以外にも、木炭に鉄錆が付着したものが多数認められる。

白色滓（写真図版54） 約5.5kg出土した。水についた結果、白色を呈したものである。Caの追究など成分分析は行っていない。

銅滓　既報告地区（富山市教育委員会1999）では金属学的分析の結果、銅滓が確認されている。廃滓場出土遺物のなかで銅滓の可能性を想定できるもの（赤銅色を呈するもの、緑青は確認されない）について、磁着性の検討を行ったところすべての資料に磁着性が認められた。

取瓶（第89図　写真図版53） 個体数を把握することは難しいが、93破片を確認した。基本的には把手が付く形態で、大型品と小型品に分けられる。湯が付着しているものが多い。

三叉状土製品（第88図　写真図版54） 約75kg出土した。ほぼすべての個体の足が折れているために本来の大きさを復元するのは難しい。観察の結果、足の太さ（直径）が本来の大きさと相関関係にあると予想されるが、追究はできていない。

湯口栓（第89図　写真図版53） 48個体を確認した。形態的特徴から丸いもの（90%）と細長いもの（10%）に分けられる。大きさからも大小に区分できるが、湯口栓は外型湯口より大形に作る必要があるので、大きさからの分類はそれほど有効でないと考える。把手は、指先でつまむという工程を何度か繰り返して作り出している。個体ごとに指頭圧痕の数が異なり、3ヶ所が13%、4ヶ所が27%、5ヶ所が25%、6ヶ所が4%、不明が21%である。

鋳型（鍋）（第80・81図　写真図版54） 重量としては梵鐘に及ばないが、個体数としては最も多く生産された製品である。約32kgが出土した。廃滓場堆積層の最下層からも出土している。五十川分類（五十川1992）の鍋Aに相当するものが多い。ただ、破壊されて小片となっているため、鍋Cとの分別が明確でなく、鍋Cが含まれている可能性もある。あえて可能性を指摘するなら、第80図5（4もか）である。なお、明確に鍋Bといえる鋳型は見い出しがたい。

鋳型（梵鐘）（第83～85図　写真図版55） 約96kg出土した。撞座を2個体（櫛歯文・列点文各1個体、第83図38・39）確認したことから、2個体以上の梵鐘が生産されていたことは確実である。なお、真土が遺存していないことから確定できないものの、外形や直径から撞座の可能性がある鋳型片は他に1点存在する（91区）。櫛歯文主体の撞座は信濃（法金寺　永享11（1439）年）・肥後（玉祥寺　明応5（1496）年）・尾張（笠覆寺　建長3（1251）年）の現存鐘にやや似た例がある。このような撞座は基本的に鎌倉時代以前には認められず、現存鐘の記年とも矛盾しない。現存鐘は蓮華文が痕跡を留めないほどに形骸化しているのに対し、本遺跡例は蓮華文の痕跡を留めているという差があるものの、それをもって直ちに古相を示すとは断定できない。

撞座以外にも、帯（中帯・下帯）・駒の爪・池の間部分を確認した。小片だと、梵鐘（池の間）なのか鉄鍋なのかを判断することは難しく、梵鐘とした破片のなかに鍋が含まれている可能性も残る。なお、廃滓場堆積層の最下層からも出土している。

鋳型（獣脚）（第82図　写真図版55） 17脚を確認した。脚の長さで2群程度に分類が可能である。香炉の獣脚であろうか。このうち5つ程度は獣脚以外の小型品の鋳型の可能性もある。廃滓場堆積層の最下層からも出土した。

鋳型（磬または風鐸の舌）（第82図　写真図版55） 10破片を確認した。磬とする場合、典型例と比較して、①典型例の端部断面が菱形なのに対し、本遺跡例は直角である、②典型例の文様が突線なのに対し、本遺跡例は凹線となる点で差が認められる。中世の磬は古代以来の整備な一群と形骸化した一群があり、本遺跡例は磬とした場合、後者に属す。磬製作工人以外の工人が真似て作った可能性や本遺跡の工人の独自性の表徴という可能性、鋳型は確認されていないものの伝世資料にある蓮華形磬の可能性が想定できる。

磬の他に風鐸の舌の可能性もある。この場合、透かしをもつものが含まれることになる。

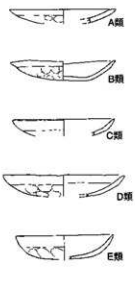
鋳型（不明小型品）（第82図　写真図版55） 32～37の6個体を図化した。鋳造された製品を特定することは難しいが、36などは梵鐘の乳であろうか。

鉄製品（第90図　写真図版55） 約24kg出土した。鉄鍋片などを確認した。鉄鍋片のなかには、黒錆が発生したことで酸化の進行が遅れ原形に近いものも含まれる。板状鉄片（茎状・三角形・長方形）が多数認められる。これらは、リサイクル用に破壊されたものが再利用されずに投棄されたものと考えられる。（小黒）

土器・陶磁器類（第78・79図　写真図版56）

SD56　1～4は非ロクロ成形の中世土師器の皿である。1は内彎して立ち上がる口縁で端部は尖る。5～8は珠洲で、5は甕、6は壺、7・8は片口鉢である。8は外底面をハケ状工具で乱雑になでつける。6は吉岡編年のⅣ期、7はⅤ期に属する（以下珠洲の帰属時期は全て吉岡編年による）。9は八尾の甕で、14世紀前半に属する。10は古瀬戸の折縁皿で、灰釉が口縁部内外面に掛かる。15世紀初め頃に属する。11は古瀬戸の鉄釉天目茶碗で、12は青磁である。

最上層・上層の自然堆積土中　13～28はすべて非ロクロ成形の中世土師器である。23・24は器高が低く、口縁部内面が端部付近で角度を変え、水平かやや内傾して尖るタイプA類である。17・18・21は口縁が外反し薄く尖るタイプB類である。29・30・32は珠洲である。29は甕でⅢ期にあたる。30は片口鉢でⅣ$_1$期に属する。32も卸し目がかなり密なことからⅣ期以降であろう。31は青磁で13世紀後半か。33は珠洲陶片の周囲を打ち欠いて円盤状に加工したもので遊戯用の駒である。34は凝灰岩製の砥石で平行な深い擦痕が入る。3面が使用されている。上下端が欠損しており、また裏面も板状剥離によって失われている。



第47図　中世土師器の分類

第6次掘業　35～39は非ロクロ成形の中世土師器である。A類、B類、底部から口縁部に短く折れるC類が存在する。

第5次掘業　40～44は非ロクロ成形の中世土師器である。C類のほか、B類より体部が内彎し、厚手の43がある。45・46は古瀬戸である。45は灰釉の瓶子口縁部である。46は鉄釉の大目茶碗である。47・48は銅銭で、47は篆書の皇宋通寶（初鋳1038年）、48は行書の元豊通寶（初鋳1078）で、2点とも北宋銭である。

第4'次掘業　49・50は非ロクロ成形の中世土師器、51は珠洲片口鉢で、吉岡編年Ⅳ$_1$期である。

第4''次掘業　52～64は非ロクロ成形の中世土師器である。A類より内面の折れる角度がゆるい52・57やB類より外反度が大きい53が存在する。54や55のような器高が大きく、内弯するD類、61・62のC類が存在する。65～67は珠洲である。65は甕でⅣ$_2$期、66は壺でⅡ期、67は片口鉢でⅡ$_2$期。68・69は古瀬戸で、68は灰釉の瓶子で14世紀に属する。69は灰釉平椀の底部で内面は見込みまで灰釉が掛かる。外面の施釉されている部分は欠損している。

第3次掘業　70～78は非ロクロ成形の中世土師器。A類や典型的なB類・C類は存在せず、70・76のようなD類が多い。79・80は珠洲片口鉢で、79は吉岡編年のⅣ$_1$期、80はⅤ期に属する。

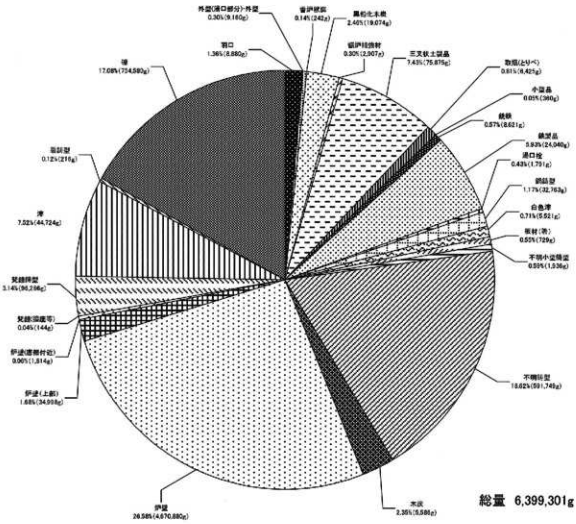
第2・2'次掘業　81～84は非ロクロ成形の中世土師器で、C類、平底のE類がみられる。85は青磁で、13世紀半ばから後半に属する。86は古瀬戸の折縁皿で、古瀬戸の中期（14世紀代）に属する。87は珠洲甕で、吉岡編年のⅢ期に属する。88は銅銭で真書の治平元寶（初鋳1064年　北宋）である。

第1次掘業　89～91は非ロクロ成形の中世土師器で、丸底のF類が存在する。92・93は珠洲甕で、Ⅳ$_2$期に属する。この近辺での鋳造は14世紀半ば以降に始まったことがわかる。

SK316　94は珠洲片口鉢で、Ⅳ期に属する。

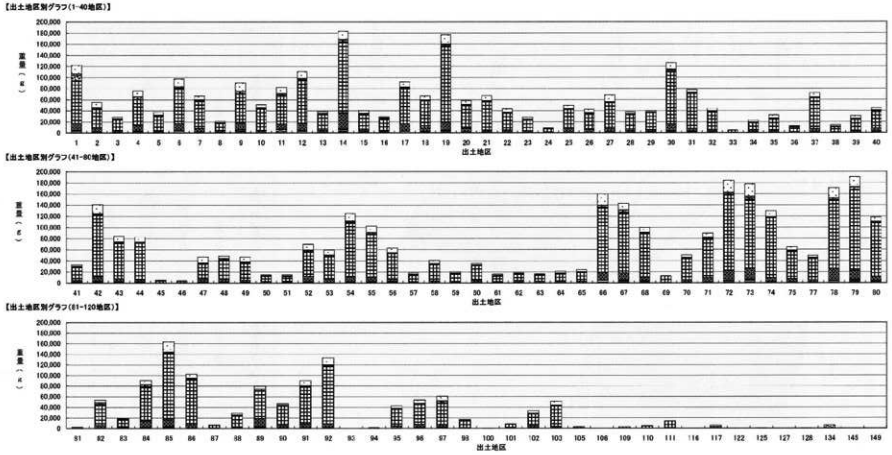
SK332　95は珠洲の壺である。静止糸切りである。

溶解炉　96は溶解炉基礎構造掘方内出土の珠洲片口鉢である。Ⅳ$_2$期に属する。（安達）



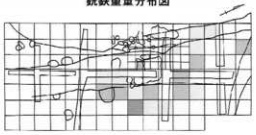
■羽口	▨外型(湯口部分)・外型	▩香炉獣脚	□黒鉛化木炭	▨低炉補強材
□三叉状土製品	■取瓶(とりべ)	▩小型品	■銑鉄	▨鉄製品
□湯口栓	□鍋鋳型	▨白色滓	▨板材(滓)	▨不明小型鋳型
▨不明鋳型	■木炭	□炉壁	▨炉壁(上部)	□炉壁(底部付近)
▩焚鐘(撞座等)	▨焚鐘鋳型	□滓	▩羽釜型	■礫

グラフ3　3-B地区廃滓場（SD56を除く）出土鋳造関連遺物の重量比率



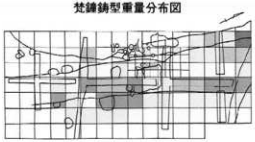
グラフ4　3-B地区廃滓場鋳造関連遺物重量分布　出土地区は第68図を参照

鉄鉄重量分布図



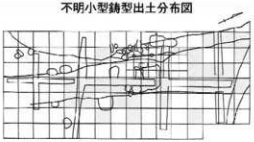
100g未満
300g未満
600g未満
600g以上

梵鐘鋳型重量分布図



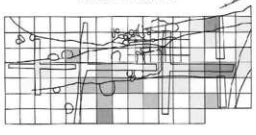
500g未満
1,500g未満
3,000g未満
5,000g未満
5,000g以上

不明小型鋳型出土分布図



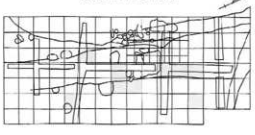
出土区

鍋鋳型重量分布図



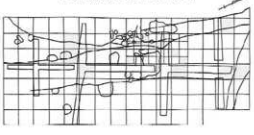
200g未満
500g未満
1,500g未満
1,500g以上

磬鋳型出土分布図



出土区

香炉獣脚鋳型出土分布図



出土区

0 20m

第48図　鉄鉄・各種鋳型分布図（1：500）

オ．まとめ

平成11年度調査は2-D地区（上層・下層）と3-A地区、3-B地区が該当する（第26・27・51図）。調査の結果、古代の畝状遺構（3-A・3-B地区）、14世紀後半から15世紀後半を中心とする掘立柱建物3棟（2-D地区下層）・井戸12基（2-D地区下層を除く地区）・土坑約740基（全地区）・溝約62条（全地区）・河川跡（3-B地区）・ピット多数（全地区）・鋳造関連遺構として溶解炉1基・廃滓場・鋳造土坑・礎石建物（3-B地区）などが検出された。

出土遺物は須恵器、土師器、土錘、土馬、珠洲、中世土師器、八坊、古瀬戸、瀬戸美濃、瓦器、青磁、銭貨、銅滓、鉄製品（刀子・鎌・鋏・釘・鏡・楔かなど）、石製品（叩き石・石錘・砥石・硯など）、木製品（下駄・漆器・折敷・井戸側・曲物・板状木製品・角材状木製品など）、鋳造関連遺物（鋳型・炉壁・羽口・補強材・木炭・銑鉄・黒鉛化木炭・白色滓・緑色滓・鉄滓・銅滓・取鍋・三叉状土製品・湯口栓・鉄鍋片）、越中瀬戸、伊万里、唐津などがある。

特に、遺構が集中して検出された3B地区は、南北溝と東西溝に区画された中に土坑や井戸がつくられ、東側の河川跡付近では鋳物生産が行われていた。ここでは、井戸について若干触れておきたい。

①井戸の構造について　今年度の調査区では、12基の井戸を確認した（第11表）。井戸側は木組のみが4基、石組と木組が6基、炉壁転用が1基ある。2-D地区下層のSE02以外は水溜があり、水溜は曲物・桶・木組になる。年代的にみると14世紀代には木組と石組があり、15世紀代はすべて石組で、16世紀代は木組である。金屋南遺跡の本年度の井戸の特徴は以下のとおりである。

1）井戸掘方は井戸側に対して非常大きい。掘方と井戸側の平面積でみると、3-A地区SE01と3-B地区SE08は井戸側面積に対して掘方面積は約20倍、3-D地区上層SE01と3-B地区SE06は12～14倍である。土質が軟弱であり、当時構築の際に崩れて結果的その大きさになったことも考えられる。

また、深さは遺構確認面から2.0m以上掘り下げ、最も深い井戸は3.6mである（3-B地区SE08）。

2）井戸の構造は2-D地区下層SE02以外はすべての井戸で井戸側と水溜がある。

木組井戸の場合は、3-B地区SE06のみが円形縦板組で、それ以外の木組井戸は方形縦板組隅柱横桟留という違いはあるものの、井戸側は木組で、水溜には曲物を使用するという共通性がみられる。方形

遺構名	掘方長軸(m)	掘方短軸(m)	掘方深さ(m)	井戸側内側(m)	井戸側の構造	水溜の構造	時　期
2D地区（下層）							
SE01	4.0	4.0	2.3	0.6	木組・方形縦板組隅柱横桟留	曲物	16世紀前後
SE02	2.8	2.8	2.3	0.5	石組のみ	なし	14世紀後半
3A地区							
SE01	4.2	4.0	2.7	0.6	木組・方形縦板組隅柱横桟留	曲物	16世紀前後
3B地区							
SE01	3.5	3.5	2.0	0.9	不明	不明	
SE02	5.1	4.2	2.5	0.8	石組・木組　横板井籠組（2段）	曲物	15世紀後半
SE03	4.6	4.2	2.65	0.9	石組・木組　方形縦板組隅柱横桟留	木組	15世紀後半
SE04	3.6	3.6	2.0	2.5	石組・木組　方形縦板組隅柱横桟留	桶	15世紀後半
SE05	3.6	3.1	2.3	1.0	石組・木組　横板井籠組（3段）	桶	15世紀後半
SE06	4.5	4.3	3.25	1.0	木組　円形縦板組無支持	曲物（2段）	14世紀
SE07	3.2	3.1	2.6	1.15	石組・木組　横板井籠組（1段）	桶	15世紀
SE08	5.0	4.7	3.6	0.85	木組　方形縦板組隅柱横桟留	木組	14世紀
SE09	1.1	1.1	0.9以上	0.6	炉壁転用	なし	

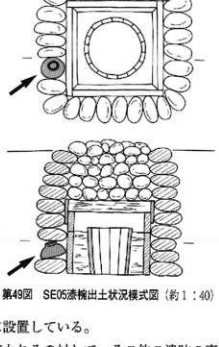
第11表　平成11年度検出井戸一覧　※方形縦板組隅柱横桟留は横桟と横桟の間に短い隅柱を立てるタイプ。方形縦板組隅柱横桟留は隅柱にほぞ穴があり、その穴に横桟を差し込むタイプ。

縦板組隅柱横桟留の井戸は隅柱にほぞ穴がなく、横桟と横桟の間をつなぐ短い角材が立てられる構造である。

石組井戸の場合は、2-D地区下層SE02を除き、石組の下に木組、さらに水溜として曲物・方形木組・桶が使用される。当時の人々は、井戸側（石組＋木組）＋水溜という井戸の構造を理解しながら、水溜の形態の選択を行っているようである。また、3-B地区のSE04のように石組が擂鉢状なり、石組上部が底部よりかなり開くタイプもある。

3）井戸は強固でなおかつ丁寧に作られている。特に石組井戸の場合、3-B地区のSE02・SE04・SE05のように石組下の木組の周囲にも石を設置する例がある。また、同地区のSE03・SE07では、石組を積み上げる際に最下部の石組の下に木の材を置き、地盤を安定させている。

②井戸祭祀について　3-B地区のSE05では、第49図のように、方形木組を囲むように作られた5段の石組の下から2段目の石組の一部を意図的に空けて、ほぼ完形の漆椀を逆さまにして設置している。設置場所は井戸側の北北東の位置にあたる。宇野隆夫氏は「漆椀を伏せることによって、井戸の神が宿る空間を作り出した」と指摘する。また、小坂眞二氏は「掘井の際には、犯土（3尺以上の侵土）を伴うため、土公（土の神）と水神の祭祀は共通の基盤にある」との見解がある。（小坂1993）。



第49図　SE05漆椀出土状況模式図（約1：40）

本井戸では、井戸を構築する際に水神（井戸の神）だけではなく、土公を対象にした祭祀が行われたと考えられる。

このような、漆椀を掘方に埋める例は富山市水橋金広・中馬場遺跡や富山市（旧婦中町）の中名Ⅴ遺跡（13世紀後半から14世紀）、県外では福井市福井城跡（13世紀）である。中名Ⅴ遺跡では漆椀を伏せて、掘方の南西隅に設置する。水橋金広・中馬場遺跡と福井城跡では漆椀の口縁部を上に向けて、水橋金広・中馬場遺跡では掘方の南に、福井城跡では掘方の北に設置している。

また、漆椀に目を向けると、本井戸の漆椀には扇や植物文が描かれるの対して、その他の遺跡の事例は文様が描かれない。このように、井戸の掘方内の設置方法や設置場所、漆椀の選択に違いがみられる。遺跡や地域よる祭祀の地域性があるのであろうか。（堀沢）

③金屋南遺跡における鋳物生産について　本遺跡では、14世紀後半～15世紀後半に緩傾斜地を利用して鉄・銅の鋳物生産が行われていた。鉄滓や鋳型などを廃棄しやすい緩傾斜地という理由だけでなく、旧神通川沿いの山裾という整った自然条件が鉄素材や炉・鋳型素材、製品の確保・流通に適していたことが、本遺跡で鋳物生産が行われた最大の理由である。本遺跡からは鉄滓だけでなく、銅滓も出土している。鉄滓の出土量はごくわずかで、それもわずかな滓が土と結合してふくれたものであることから、本遺跡では他所で精錬された素材を溶解して鋳造する工程のみが行われていたと考えられる。細かく砕かれた鉄製品片の存在から、古鉄の再溶解が行われた可能性が高い。廃滓場堆積土の観察から、過去の操業時の堆積土上面を何度か（6回以上）整地したことがわかるので、複数回の操業があったことは確実である。

廃滓場堆積層の最下層からは鍋鋳型だけでなく、梵鐘鋳型や獣脚鋳型も出土している。鍋と梵鐘・獣脚では技術レベルが大きく異なるため、梵鐘・獣脚を作れる工人は鍋も作れるだろうが、その逆はないと考えられる。仏具は鋳造後に削り工程が必要になるので、鋳放しのままの鍋工人では製作でき

ない。従って、本遺跡での鋳物生産の契機は、金屋南遺跡の集団に掌握されていた地元の鍋工人が鍋生産を始めたことにあり、時をおかずにどこからか梵鐘などの注文があったことで、熟練した鋳物師が招聘された可能性がある。梵鐘や仏具は招聘された鋳物師によって生産されたのであろう。梵鐘撞座の検討からは、信濃・肥後・尾張の現存鐘との関係が想定され、特定はできないものの西日本の鋳物師が招聘された可能性が高いのではなかろうか。

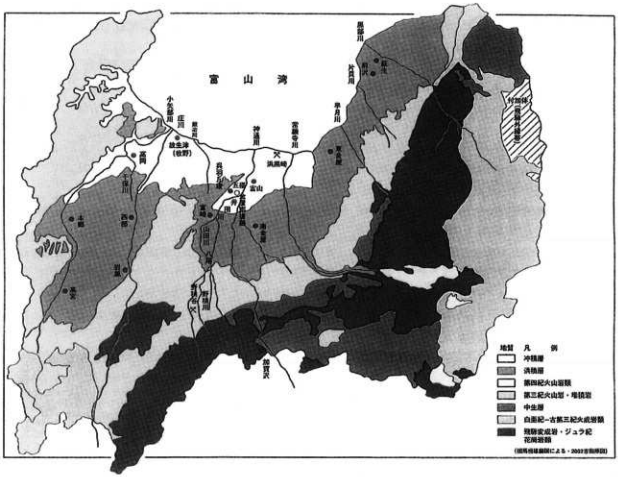
鉄鍋の地域性を考えるうえでも、有意義な資料が得られた。本遺跡では、平成９年度調査SK102から五十川分類（五十川1992）の鍋C（内耳鍋）が出土している（12頁参照）。同様に、廃滓場のSD56からは同分類の鍋B（三足鍋）が出土した。富山県域は鍋B・Cの分布圏内にあり、高岡市（旧福岡町）石名田木舟遺跡（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2002）・木舟北遺跡（福岡町教育委員会1997）でも鍋Bが出土している。鍋B・Cの共伴例としては、新潟県上越市子安遺跡がある。なお、富山県域は鍋A（口縁に屈曲のある鍋）の分布限界付近に相当する。廃滓場からは口縁部破片を含む鉄鍋破片が多く出土しているが、鍋Aと特定できるだけの遺存状態にはない。鋳型からみると、鍋Aが圧倒的に多いと考えられ、鋳物師の系譜は西日本に辿ることができる。鍋Cの可能性もある鋳型が少量認められ、平成９年度調査SK102例の存在を積極的に評価するなら、本遺跡内で鍋Cが生産されていた可能性も想定不可能ではない。類例は青森市（旧浪岡町）浪岡城（1460年頃築城、1578年落城）跡に認められるので、東北地方から流通してきた可能性もある。鍋Bを本遺跡内で生産していたかどうかは不明と言わざるを得ないが、鍋Bは福井市一乗谷朝倉氏遺跡で多数出土しており、西日本系の系譜と考えられる。鉄鍋（鋳型・製品）からは、西日本だけでなく東日本との関連性もうかがえ、東西文化の結節点としての本地域の地理的環境が多分に影響しているといえる。なお、鋳型の存在だけでなく、リサイクル用の鍋破片、銑鉄、湯口の成分分析からも本遺跡における鉄鍋生産が実証されている（166～169頁参照）。

越中では射水市（旧大島町）北高木遺跡（富山県埋蔵文化財センター1995）で鉄鍋鋳造が確認されている。D地区SD17では鍋鋳型５個体、茶釜鋳型２個体が出土し、SD17内で鋳造が行われていたとされている。遺構の時期は明示されておらず、D地区の中世とされる遺構の年代観も示されていないが、D地区出土中世遺物（報告書第73図）は吉岡編年（吉岡1994）Ⅳ$_2$～Ⅴ期の珠洲と考えられる。14世紀前半～15世紀前半の年代が与えられる北高木遺跡例の存在から、14世紀後半～15世紀後半に金屋南遺跡の集団に鍋工人が掌握されていたと考えることに大過はないだろう。

現在の金屋集落に隣接する２-A～D地区で確認された上層遺構群は14～16世紀に利用されていた。大溝は金屋集落の方向へと伸びるものが多く、何度も掘り返され（維持・管理され）ていた。一部の溝は近世～近代まで機能していたことが判明している。以上から、近世～近代に集落の中心域が遺跡内から金屋集落の位置等へと移動した可能性を想定できるのではないだろうか。

近世文書に注目すると、村内政雄氏の集成（京都国立博物館蔵「山緒鋳物師人名録」・「諸国鋳物師名寄記」・「諸国鋳物師姓名記」・「諸国鋳物師控帳」・「禁裡諸司真継家名寄隙写」から検索）では新川郡富山上金屋・下金屋に近世鋳物師が存在し、現在の富山市金屋に現地比定されている（村内1972）。五十川信矢・十河香里両氏の集成（「真継家文書」から検索）では新川郡富山上金屋に近世鋳物師が存在し、現在の富山市辰巳町１～２丁目などに現地比定されている（五十川・十河2002）。

現在の富山市金屋は近世絵図によると婦負郡域に所在することになり、新川郡富山上金屋・下金屋の記載と合致しない。現在の富山市辰巳町などは近世絵図では新川郡にあたる。このことから、五十川・十河両氏の現地比定が記載と矛盾しないことになる。辰巳町周辺は富山藩の中心地である富山町の至近に位置する。富山町は前田利次の富山城入城を契機として急速に栄えたので、富山町の繁栄と



第50図　後背地と「金屋」の分布（吉田2003より一部改変引用）

共に鋳物師が辰巳町周辺に居住することになった可能性が高い。このように考えると、「真継家文書」等に記された鋳物師は、現在の富山市金屋、つまり金屋南遺跡の鋳物師集団とは無関係ということになる。

吉田國夫氏は地質（岩石）に注目して越中の鋳造業の変遷を検討した。現在の富山市金屋（「五福（御服）金屋（呉羽山東麓）」）には元応～嘉暦（1319～1329）頃、刀鍛冶師の佐伯則重が居住し、鎌倉五郎正宗の弟子とある（「越中鐔事記」）。神通川およびその支流沿いには「五福金屋」の他、「富崎金屋（井田川と山田川の分岐点）」・「南金屋（旧新川郡熊野村）」・「富山金屋（辰巳町周辺）」と「金屋」地名が集中する。吉田氏は鋳造に必要な粘土供給地として、「五福金屋」・「富崎金屋」は呉羽山麓に発達する安養坊の粘土砂に注目する（吉田2003）。現在の史料による限り、「五福金屋」に鋳物師が存在したことをうかがわせる記載は認められないが、鍛冶師が14世紀前半に居住していたことや鋳造は鍛冶と密接な関係があることなどから、本遺跡での鋳物生産が「金屋」地名の由来になった可能性も想定不可能ではない。ただ、ここで確定する前に近世文書の検索などの作業を経る必要があり、今後の検討課題としておきたい。（小黒）

④小結　平成11年度の金屋南遺跡では、強固な井戸構築を行える高い技術を持ち、さらに構築時の祭祀を知っている人々、また、鋳物生産を行なう人々の存在がある。それらの背景には単なる在地勢力の範囲を越えて広範囲な地域との日常的交流を行える有力者の存在があったと考えられる。（堀沢）

引用・参考文献

五十川信矢 1992 「古代・中世の鋳鉄鋳物」『中・近世における東国と西国』国立歴史民俗博物館研究報告第46集　国立歴史民俗博物館

五十川信矢・十河香里 2002 「中世後半～近世の鋳物師一覧」『鋳造遺跡研究資料2002』鋳造遺跡研究会

宇野隆夫 1989 「井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社

片岡英子・大野淳也 1997 「越中の様相」『北陸の漆器考古学―中世とその前後―』第1分冊・第2分冊　北陸中世土器研究会

小坂眞二 1993 「祭・祓と陰陽道の祭祀部門」『陰陽道叢書』4 特論 名著出版

小林高範 2002 「富山市金屋南遺跡出土の鉄鍋の検討」『富山市考古資料館紀要』第21号　富山市考古資料館

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告』

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1994 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺構編）―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺物編）第1分冊・第2分冊・第3分冊―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』

富山県埋蔵文化財センター 1995『富山県大島町北高木遺跡発掘調査報告書』大島町教育委員会

富山市教育委員会・山武考古学研究所 1999『富山県富山市金屋南遺跡発掘調査報告Ⅰ』金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査　富山市教育委員会

富山市教育委員会・大成エンジニアリング株式会社 2003 『富山県富山市金屋南遺跡発掘調査報告Ⅱ』金屋企業団地造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)　富山市教育委員会

奈良国立文化財研究所 1993『梵鐘実測図集成』上・下巻　ビジネス教育出版社

服部実喜 1985 「中世鎌倉における陶磁器構成の時代的変遷」『貿易陶磁研究』No5　日本貿易陶磁器研究会

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『福井城跡―ＪＲ北陸線外２線連続立体交差事業および高架側道４号線街路工事に伴う調査―』福井県埋蔵文化財調査報告第72集

福岡町教育委員会 1997 「木舟北遺跡」

舟橋村教育委員会 2001『仏生寺城跡発掘調査報告』

北陸中世考古学研究会 1998『北陸中世の金属器―生産と流通―』

町山尚矢 2002 「富山県出土の中世後期瓦質土器」『富山考古学研究』第5号　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

宮田進一 1992 「越中における中世土師器の編年」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会

宮田進一 1997 「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史―』桂書房

村内敬雄 1972 「出縄鋳物師人名録」『東京国立博物館紀要』第７号　東京国立博物館

森　隆 2003 「富山県の中世土器（資料編）―県東部・富山平野を中心とした地域における―」『富山考古学研究』第８号　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

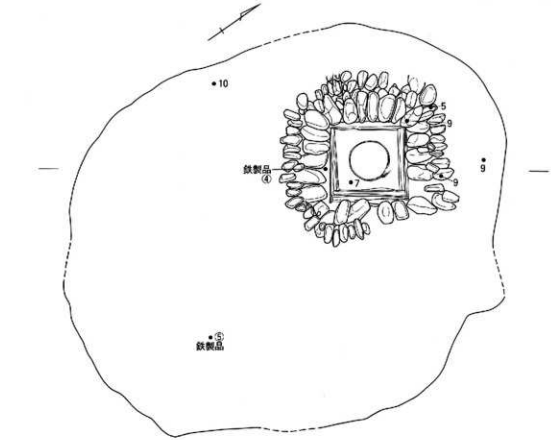
森　隆2005 「富山県の中世土器（資料編2）―道場Ⅰ遺跡出土資料の検討と中名遺跡群出土資料の総括―」『富山考古学研究』第8号　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

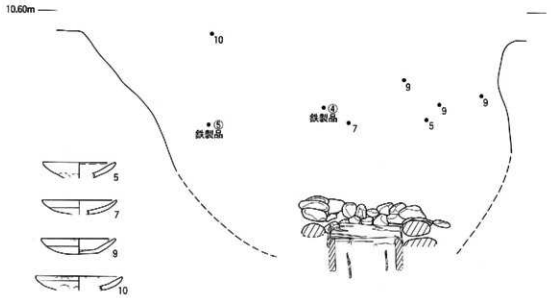
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

吉田圭夫2003 「鋳造業の背景と展開―後背地からみた越中の鋳造史―」『日本鉱業史研究』No.45　日本鉱業史研究会

四柳嘉章・下村好美 1996 「能登の木製用具　下駄の研究方法と木製品にみる中世の民間信仰」「飾る・遊ぶ・祈るの木製用具」　北陸中世土器研究会

第51図　3-B地区　遺構配置図（1：400）■は墳砂

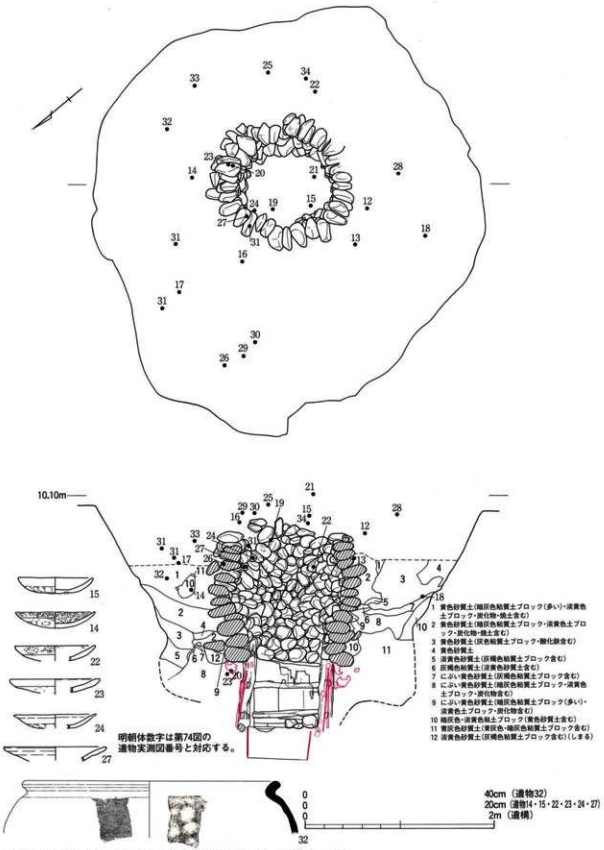




SE02出土遺物（1：4）
ゴシック体数字は第74図の遺物実測図と対応する。
○数字は写真図版51の番号と対応する。

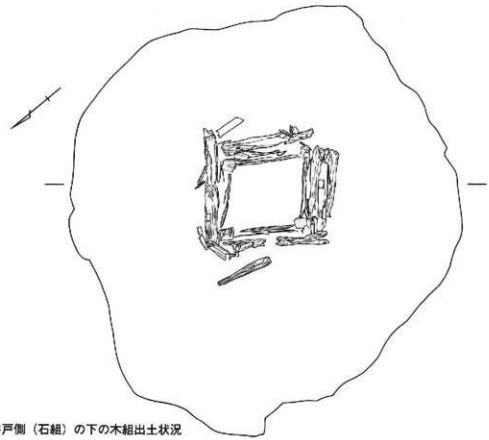
0　20cm（遺物）
0　2m（遺構）

第52図　3-B地区・SE02（1：40）

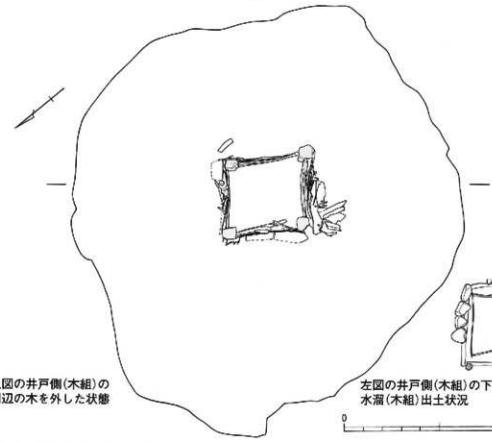


SE03出土遺物（14・15・22・23・24・27は1：4、32は1：8）

第53図　3-B地区・SE03（1：40）



井戸側（石組）の下の木組出土状況

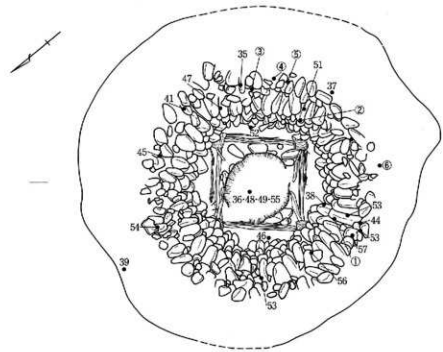


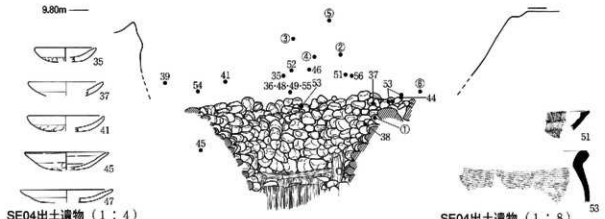
上図の井戸側(木組)の
周辺の木を外した状態

左図の井戸側(木組)の下の
水溜(木組)出土状況

0 2m

第54図　3-B地区・SE03（1：40）

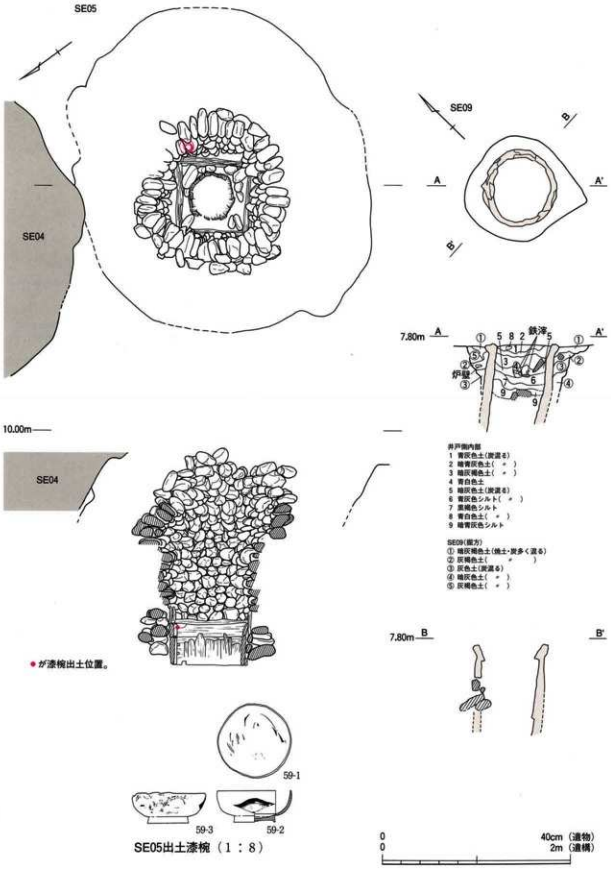




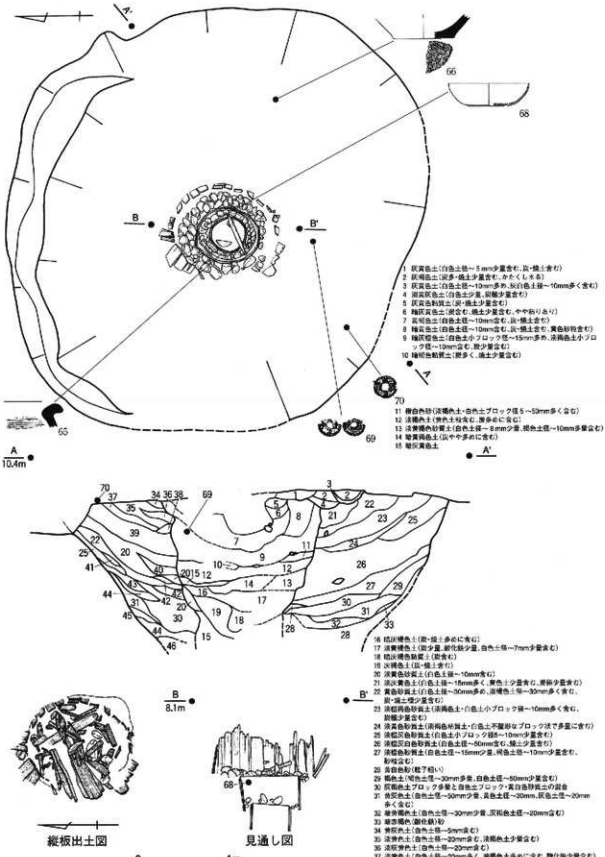
明朝体の数字は第74図の遺物実測図番号と対応する。
○数字は写真図版46の番号と対応する。

0 40cm（遺物51・53）
0 20cm（遺物35・37・41・45・47）
0 2m

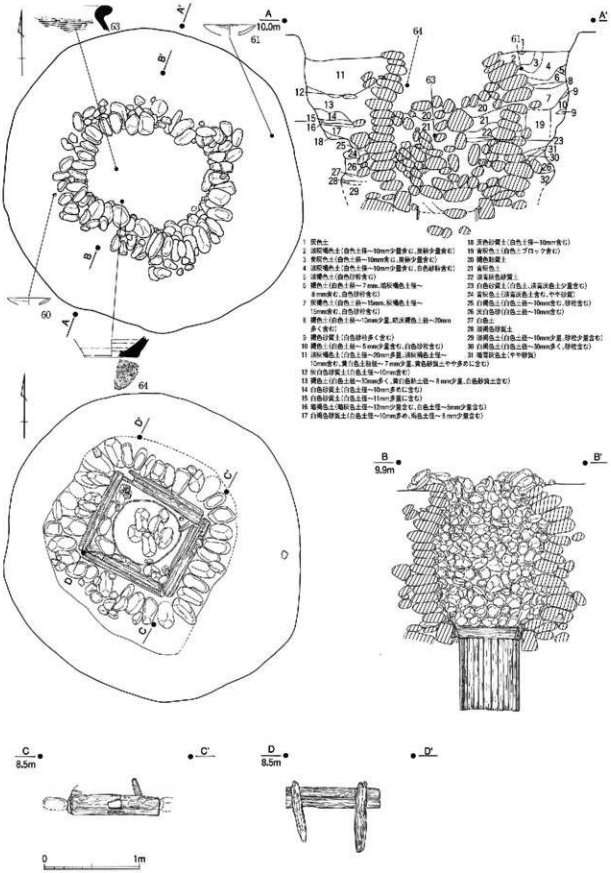
第55図　3-B地区・SE04（1：40）



第56図　3-B地区SE05・SE09（1：40）



第57図　3-B地区・SE06平面図・断面図（1：40）



第58図　3-B地区・SE07平面図・断面図（1：40）